

未成年期に父母の別居・離婚を経験した  
子に関する質的調査研究報告書

令和5年1月

公益社団法人商事法務研究会



## は し が き

親が離婚すると、子にとってはどちらか一方の親等と暮らすこととなる等、その生活環境や心理面など多大な影響を及ぼすこととなる。法制審議会家族法制部会では、離婚後の子の養育に関して、父母の関わり方や子の意思を尊重するための規律のあり方などが審議され、その第20回会議では「家族法制の見直しに関する中間試案」が取りまとめられ、現在、パブリックコメント（2022年12月6日～2023年2月17日）に付されている。

家族法制度の見直しを検討するには、上記のように幅広く国民からの意見を募集するとともに、親の離婚は子に重大な影響を与えることから、実状を把握したうえで議論を進めることが求められる。そこで、法務省より当会が委託を受けて取りまとめた「未成年期に父母の離婚を経験した子の養育に関する実態についての調査・分析業務報告書」（2021年1月）では、親の離婚が子に与える影響などについての実態を調査・分析している（未成年時に父母の別居・離婚を経験した、20代および30代の男女それぞれ250名、合計1000名を対象にWEBモニターアンケート方式にて実施）。

同調査では、親の離婚や別居についての子の捉え方や考え方はさまざまであり、離婚や別居に伴う養育環境が変化するなかで、子が親に対して自らの希望等を十分に伝えきれてない場合も少なくないという結果が明らかになっている。しかし、同調査は量的なものであったため、一般的な傾向については把握できるものの、境遇や心情、現在の状況といった個々の具体的なエピソードまでは把握できていなかった。

そのため、親の別居・離婚を経験した子から、多様な個別具体的なエピソードを収集するといった質的調査を行うことも必要とされ、その質的調査の結果を本報告書ではまとめている。本調査は、未成年期に父母の別居・離婚を経験した30名から、インタビューを通じて具体的なケースを収集し、そこから得られた調査結果について横断的な分析を行うことを目的としている。インタビューの実施にあたっては、小川洋子日本女子大学助教および曾山いづみ神戸女子大学助教が一人あたり最大120分の時間をかけ、対面またはオンラインにて行った。

インタビューにご協力いただいた方々には、過去の記憶を手繰り寄せ、私的な事項に関する質問に丁寧に回答いただいた。ご協力いただいたすべての方々に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

2023年1月

公益社団法人商事法務研究会

# 目 次

<b>I 本研究の背景及び目的</b> .....	1
(1) 背景 .....	1
(2) 目的 .....	1
<b>II 調査実施方法</b> .....	3
(1) 調査対象者の募集方法と選定基準 .....	3
(2) 調査対象者一覧（30名分） .....	3
(3) インタビュー調査実施方法・期間 .....	6
(4) 質問内容 .....	6
(5) 倫理的配慮 .....	7
<b>III 分析方法</b> .....	8
(1) 逐語録の作成 .....	8
(2) 調査対象者の分類 .....	8
(3) 分析方法（M-GTA） .....	9
(4) M-GTA の具体的な手順説明 .....	10
<b>IV 結果と考察</b> .....	12
(1) 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的な 思いを抱くようになるまでの心理的プロセス .....	12
(2) 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に否定的な 思いを抱くようになるまでの心理的プロセス .....	25
(3) 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的とも 否定的ともいえない思いを抱くようになるまでの心理的プロセス .....	37
<b>V 総合考察</b> .....	51
1 各プロセスの共通点・相違点 .....	51
(1) 各プロセスの特徴 .....	51
(2) 離別前の生活の影響 .....	52
(3) 離別に関する説明 .....	53
(4) 子どもの意思確認・意見表明（納得感） .....	55
(5) 離別後の生活 .....	57
(6) 面会交流 .....	58
(7) 養育費 .....	64
(8) 第三者の存在・かかわり .....	65
(9) 1人の人間としての両親や両親の関係性を捉える .....	66

(10) 離別への納得感と現在の両親の離別への思い.....	67
(11) 父母の別居・離婚に対して子ごとに思いが異なるに至る背景があると 考えられるもの .....	69
2 プロセスには出てきていない重要事項（その他語りから考察できる 重要事項） .....	71
(1) 再婚（再婚時に必要な配慮など） .....	71
(2) 父母の介護 .....	73
(3) あってよかった対応・支援.....	75
(4) 必要な支援 .....	76
(5) 本調査の意義と限界.....	79

#### 協力研究者（五十音順）

小 川 洋 子（日本女子大学人間社会学部心理学科助教）

曾 山 いづみ（神戸女子大学心理学部心理学科助教）

## Ⅰ 本研究の背景及び目的

### (1) 背景

父母の別居・離婚をめぐる子の養育に関する法制度の在り方については、令和3年3月から、法制審議会家族法制部会で調査審議が行われている。同部会では、離婚後の子の養育に関し、父母の関与に関する規律のあり方や、子の意思等を尊重するための規律のあり方などがとりあげられている。

この点に関する制度の見直しは、父母の離婚や別居を経験する子に対して重大な影響を与えるものであるうえに、同制度のあり方についてはさまざまな意見があるところであり、適切な検討のためには、エビデンスに基づいて実状に即した議論を進めることが必要不可欠である。そこで、法務省は、令和2年度に、父母の別居・離婚を経験した子を対象としたウェブアンケートの方法による調査分析を実施し、令和3年3月に「未成年期に父母の離婚を経験した子の養育に関する実態についての調査・分析業務報告書（法務省，2021）」（以下、「2021 実態調査報告書」という）を公表した。

上記調査分析の結果によれば、父母の離婚や別居についての子らの捉え方や考え方はさまざまであること、子らは、父母に対して、離婚や別居に伴う養育環境の変化について、自らの希望等を十分に伝達できていない場合も少なくないことが明らかになった。

また、上記調査研究は量的なものであることから、一般的な傾向については把握することができるものの、個々の子らについての具体的な境遇、心情、現在の状況等といった個別具体的なエピソードを把握することはできていない。もっとも、父母の別居・離婚を経験する子については、個別の事情に応じてその置かれる状況はさまざまであることから、この点に関する法制度の見直しにおいては、多様な場面を念頭に置きつつ、いずれの場面でも子の利益に配慮したものである必要がある。そのためには、父母の別居・離婚を経験した子らから、多様な個別のエピソードを収集する必要がある。そのため、この問題についてさらなる検討を進めるためには、未成年期に父母の別居・離婚を経験した子を対象として質的調査を行うことも必要である。

### (2) 目的

上記の背景に基づき、本研究では、未成年期に父母の別居・離婚を経験した子らから、インタビュー等を通じて具体的なケースを収集することを目的とする。具体的には、父母の別居後又は離婚時点で6歳以上15歳未満かつ現在20歳以上40歳未満の者30名程度に対するインタビュー調査を行い、そこから得られた調査結果について横断的な分析を行うことを目的とする。

具体的なケースを収集するにあたり、本調査では、「未成年期に父母の別居・離婚を経験

した子はどのような体験をとおして、父母の離別にどのような思いを抱くようになるのか」というテーマを設定した。これは、2021 実態調査報告書における「父母の離婚や別居についての子らの捉え方や考え方はさまざまである」という分析結果に基づき、「父母の別居・離婚に対して子ごとに思いが異なるに至るのはなぜなのか?」という点を明らかにしたいと考えたからである。「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子はどのような体験をとおして、父母の離別にどのような思いを抱くようになるのか」というテーマを設定し、父母の離別に肯定的な思いを抱く人、否定的な思いを抱く人、肯定的とも否定的ともいえない思いを抱く人のそれぞれにインタビューを行うことで、父母の別居・離婚に対して子ごとに思いが異なるに至る背景を明らかにすることができるのではないかと考えた。また、子ごとに思いが異なるに至る背景のなかに、2021 実態調査報告書の「子らは、父母に対して、離婚や別居に伴う養育環境の変化について、自らの希望等を十分に伝達できていない場合も少なくない」という点が影響しているか否かもあわせて検討していくこととする。

## II 調査実施方法

### (1) 調査対象者の募集方法と選定基準

父母の別居又は離婚時点で6歳以上15歳未満かつインタビュー調査実施時点で20歳以上40歳未満の人を対象として調査協力者を募集した。

協力者を募集する際には、調査会社である株式会社クロス・マーケティングに委託し、下記のウェブアンケートを実施のうえ選定を進めた。対面形式のインタビューは、会場が東京と大阪、神戸であったことから、その近隣の在住者を対象に協力者を募った。また、オンライン形式のインタビューは、全国を対象に協力者を募っている。

ウェブアンケートでは、性別・年齢・居住都道府県・6歳以上～15歳までの間に父母の別居および離婚を経験しているかどうか・父母の離別後誰と暮らしていたか・面会交流の有無と中断の有無・父母の離別への現在の思い（肯定的・否定的・どちらともいえない）・最終学歴・未婚既婚・子どもの有無・職業・調査への参加希望をたずねた。ウェブアンケートの回答において、6歳以上～15歳未満の間に父母の別居および離婚を経験しており、かつ調査への参加を希望すると回答した人のなかで、父母の離別への現在の思いについて「肯定的」「否定的」「どちらともいえない」と回答した人がそれぞれ同数程度になるように、かつ面会交流の有無や面会交流中断の有無が同数程度になるようにバランスを調整し、調査依頼を行った。その際に、年齢、性別、最終学歴や既婚未婚の別、子どもの有無についても勘案し、できるだけ調査対象者の多様性を保つよう努めた。

### (2) 調査対象者一覧 (30名分)

調査対象者一覧を表1に示す。なお、事前のウェブアンケートにおいて、6歳から15歳までの間に父母の離婚および別居を経験しているかどうかを確認し、「6歳から15歳までの間に父母の離婚及び別居を経験している」と回答した人に調査協力を依頼していた。しかし、インタビュー調査を行うなかで、別居はしているが正式に離婚しているかどうかはわからない・別居あるいは離婚時の年齢が15歳以上であったという人が何名かみられた。事前アンケートはウェブ上の簡易なものであったため、質問項目の細かい文字表現まで正確に確認せずに回答する人が一定数いたと考えられる。別居はしているが正式に離婚しているかどうかはわからない・別居や離婚時の年齢が15歳以上であったと語った対象者のインタビュー内容を確認したところ、6歳以上15歳までに離別を経験した対象者と比べて顕著な違いはみられず、同等に分析を行って差し支えないと判断し、分析対象に含めることとした。

事前のウェブアンケートによると、調査対象者の最終学歴は、小学校・中学校（高校中退も含む）が3名、高等学校・高等専修学校が7名、短期大学・高等専門学校・専門学校が5名、大学が12名、大学院が3名であった。職業は、フルタイムやそれに相当する職についている人が22名、パート・アルバイト・フリーターが3名、専業主婦・主夫が3名、



無職が1名、自営業が1名であった。

〔表1〕 調査対象者一覧

- ①～⑩ 父母の離別に肯定的な思いを抱いている群 (16名 男性：5名, 女性：11名)  
 ⑪～⑲ 父母の離別に否定的な思いを抱いている群 (6名 男性：4名, 女性：2名)  
 ⑳～⑳ 父母の離別にどちらともいえない思いを抱いている群 (8名 男性：6名, 女性：2名)

対象者	性別	年齢	両親の離別を体験した時期	調査対象者が認識している離婚理由	同居親	面会交流と中断の有無	養育費の有無
①	女性	25	別居：12-13歳、離婚：14-15歳	最終的には母の不倫	父-母	当初からあり。母とは週1回の直接交流。父とは隔週～2、3か月に1回の直接交流。中断なし。	有
②	女性	36	別居と離婚：中学3年生	父が仕事をしない	母	当初なし。高校時に偶然会い、その後1回直接交流。社会人になる頃まで年賀状のみ出していた。その後中断。介護をきっかけに再開。	なし
③	女性	36	離婚：中学3年生、別居：16歳	父の借金、パチンコ、DV	母	引越し先等に父が押しかけるといった交流あり。3-4年程前から年1-2回直接交流。	なし
④	女性	36	別居と離婚：中学2-3年生	嫁姑関係の悪さ、母から父への不満	父	当初からあり。年3-5回。中断なし。	なし(きょうだいがかかれて引き取られた)
⑤	男性	30	別居と離婚：15-16歳	不明(父の飲み歩き? 会話なし?)	母	一切なし。	不明
⑥	女性	30	別居：12歳、離婚：不明	事故による障害が父にあり、父が家族を遠ざけた	母	当初からあり。中学2年生までは半年に1回程度の直接交流。中学卒業時直接交流。高校生時は祖父母葬儀時にみかける。その後中断。27歳時に1回直接交流。その後再び中断。	有
⑦	男性	28	別居と離婚：10歳頃	父から子どもへの暴力、酒癖の悪さ	母	当初からあり。2回程度の直接交流。離別約1年後父逝去。	不明
⑧	女性	35	別居：10-11歳、離婚：15-16歳	不明(おそらく性格の不一致?)	父	一切なし。	不明
⑨	女性	31	別居と離婚：小学5年生	不明(喧嘩は何回かみたが理由はわからず)	母	当初からあり。中学生になるまで年数回の直接交流。その後中断。	不明
⑩	男性	38	別居と離婚：11-12歳	父のギャンブル依存と繰り返される転職	母	当初からあり。中学3年生までは月1回の直接交流。その後中断。19-20歳時に1回直接交流。その後再び中断。	ほとんどなし
⑪	女性	30	別居と離婚：17歳	父の借金とDV、母の金遣いの荒さ	里親-母(半年のみ。ほぼ友人宅にいた)	当初なし。26歳から父親と直接交流。高校卒業後に里親から母親の元へ戻るもすぐ自立。その後母親とは年1回ほどの直接交流。28歳から中断。	なし
⑫	男性	37	実父との別居と離婚：1-2歳小4時に再婚した義父との別居と離婚：高校1年生	不明(喧嘩時に父が母に手を出して取り返しがつかなくなったのは?)	母	実父とも継父とも一切なし。	不明
⑬	女性	34	別居と離婚：小学1-2年生	母の不倫	父-母(1週間)-父	当初からあり。小学4-5年生までは月1回ほどの直接交流。その後中断。	なし
⑭	女性	31	離婚：10-11歳、別居：離婚してから1年後	性格の不一致、母の精神的不調	父	当初からあり。母が遠方時は半年に1回ほどの直接交流。近くに引越してきてからは月0-1回の直接交流。中断なし。	不明(おそらくなし)
⑮	女性	39	別居と離婚：中学2年生	父の借金(パチンコ)	母	当初なし。20歳代の頃数回の直接交流。その後数か月1回ほど父から電話がくる。	なし
⑯	男性	37	別居と離婚：高校2年生	父の借金(倒産)	母	当初なし。離別数年後約1年間の同居期間あり。同居解消後1回のみ直接交流。その後中断。	不明(おそらくなし)
⑰	男性	30	別居：11歳、離婚：14歳	不明(母の金遣いの荒さ? 父の前家庭とのトラブル?)	母	離婚までは直接交流あり。離婚後中断。介護をきっかけに再開。	有(継続的でない)
⑱	女性	31	別居と離婚：中学2年生	父の独立による引越	母	年1回誕生日プレゼントが届く。大学および結婚時に1回ずつ直接交流。その後直接交流はないが、写真共有アプリをとおしてたまに交流あり。	有
⑲	男性	33	別居と離婚：10-11歳	父の開業に伴い夫婦喧嘩が増えた	母	当初からあり。18歳まで月1回の直接交流。長期休暇時は宿泊あり。中断なし。	有
⑳	女性	37	別居：7-8歳、離婚：不明(おそらく大学生の頃)	金銭感覚のズレ、父の子育て不協力和不倫	母	当初なし。10歳と12歳頃に直接交流あり、その後は交流なし。	有(裁判で決定した額よりは低い)
㉑	男性	34	別居と離婚：6-7歳	父の家事育児不協力和それによる母の精神的不調	母	当初からあり。高校生頃まで月2-3回母も含めて直接交流と、長期休暇時に父子のみで直接交流(宿泊あり)。大学生以降は年に数回の直接交流。中断なし。	有
㉒	男性	37	別居と離婚：6歳	父の借金、金銭トラブル	母	別居～離婚までの数か月、月1-2回電話。離婚後交流なし。	なし
㉓	女性	39	別居と離婚：6歳	父の飲酒、暴力	母	なし。10歳で偶然会った。	なし
㉔	男性	21	別居：中学2年生、離婚：不明(別居時に離婚するかもとは聞いていた)	父が母の浮気を疑う、嫁姑関係の悪さ	母	当初からあり。月1回の直接交流に1回参加した後は中断、その後就職時に1回直接交流。	有
㉕	女性	37	別居：中学2年生、離婚：15-16歳	母の多忙	父-母	当初からあり。母とは隔週程度でメールや電話。高校の頃に1度直接交流。大学から母と同居。父とは1-2か月に1回メールや電話。数年に1回直接交流あり。中断なし。	有
㉖	男性	31	別居と離婚：7歳	母の不倫	母-児童養護施設	当初からなし。20歳になり、自分で会いにいった。	なし
㉗	男性	21	別居と離婚：10歳	不明(喧嘩後父が出ていった)	母	当初はあり。2か月間週1回の直接交流。その後中断。高校時に父と通学路で会った。	不明
㉘	男性	24	別居と離婚：高校1年生	父が仕事をしない	母	当初はあり。月1回の直接交流が1年ほど続くが中断。20歳で一度直接交流。その後、インタビューを受けることをきっかけに直接交流。	有
㉙	男性	36	別居と離婚：小学6年生	最終的には父の不倫	母	当初からあり。20歳前後まで年数回は母も含めて直接交流。中断を経て30歳頃に電話、30代半ばに直接交流。	不明(おそらくなし)
㉚	男性	36	別居と離婚：6歳	母の蒸発	父方祖父母-父-一人暮らし-父-母	小学生の頃は父と週1回の直接交流。母とは離別後交流はなかったが14歳頃に母から電話があり、その後週1回～月1回電話。20歳までは年1回の直接交流も有。20代後半の頃母親と一時的に同居。	なし

### (3) インタビュー調査実施方法・期間

インタビューは2022年7月～9月に実施した。対象者の居住地と新型コロナウイルス感染症感染拡大状況を鑑み、対象者の希望によって対面形式かオンライン形式のいずれかでインタビューを実施した。インタビューはすべて協力研究者のいずれかが担当し、研究者と対象者の1対1で、プライバシーの保たれる空間で実施した。インタビューに要した時間は、事前説明を除いて1時間～2時間（平均1時間17分）であった。

### (4) 質問内容

インタビューにあたって、離別の経緯（わかる範囲で）、離別時の説明の有無、子どもの意見を表明する機会の有無、離別時の養育費の有無、面会交流の有無、離別時の気持ち、今現在父母の離別に対して抱いている気持ち、離別時に父母がしてくれてよかったこと、離別時に父母以外の人がしてくれてよかったこと、ほしかった支援などについての質問項目を含めて、表2のようにインタビューガイドを作成した。なお、調査対象者の語りの流れを重視して質問の順序を変更したり、新たに質問したりすることもあった。

〔表2〕インタビューガイド

<p>(1) 覚えている範囲で、両親が別居・離婚することになった経緯を教えてください。</p> <p>(2) 別居・離婚するに当たって、親（両親又はどちらか一方の親）から別居や離婚についての説明はありましたか。</p> <p>&lt;説明があった場合&gt;どのような説明でしたか。あなたはその説明を聞いてどのように思いましたか。</p> <p>&lt;説明がなかった場合&gt;説明をしてほしかったと思いますか。</p> <p>(3) 別居・離婚について、親（両親又はどちらか一方の親）に自分の意見や気持ちを伝えられる機会がありましたか。</p> <p>&lt;伝えられる機会があった場合&gt;何を伝えましたか。伝えやすい雰囲気があったのでしょうか。そのとき親（両親又はどちらか一方の親）はどのような反応でしたか。その反応を受けて、あなたはどのように感じましたか。</p> <p>&lt;伝えられる機会がなかった場合&gt;なぜ意見や気持ちを表明しなかった・できなかったのでしょうか。</p> <p>(4) 両親の別居・離婚について、当時どのような気持ちでしたか。</p> <p>(5) 両親の別居・離婚について、今振り返ってどのような気持ちですか。ご自身の思いはより良くなりましたか。それともより悪くなりましたか。</p> <p>(6) 両親の別居・離婚について、今振り返って先ほどの回答のように思うようになったのはなぜですか。</p> <p>（次の内容が出てこなかった場合は何う。i. 面会交流（有無、頻度やその内容（間接、直接、宿泊の有無）、自分の意見の尊重、中断の有無）、ii. 養育費（有無、伝えられ方）、iii. 両親の関係性について）</p> <p>(7)(6)のうち、ご両親の別居・離婚への現在の思いに一番インパクトを与えていると思うのはどれですか。</p> <p>(8) 両親の別居・離婚当時に振り返ってみて、両親がしてくれたということが良かった、逆に</p>
---

もっとこうしてもらえたら良かった、と思うことはありますか。

(9) 両親の別居・離婚当時を振り返ってみて、両親以外がしてくれたこういうことがよかった、逆にもっとこういった支援があったらよかった、と思うことはありますか。

#### (5) 倫理的配慮

調査実施に先立ち、対象者には本調査の目的と概要、倫理的配慮について、口頭と文書(事前説明書)で説明した。具体的には、インタビューを録音すること、録音を逐語録化したものを分析に用いるが、逐語録作成の際に個人情報を削除すること、個人情報の含まれるデータは委託元の公益社団法人商事法務研究会にて厳重に保管すること、調査協力は自由意志でありいつでも取りやめられること、などを口頭と文書両方を用いて説明し、署名による同意を得た。オンラインでインタビューを行った対象者については、必要書類を郵送し、同意書は返送してもらった。なお、人を対象とした研究を行う際には、調査対象者の人権や個人情報の保護を適切に行うために、人を対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得る必要がある。本調査の実施にあたっては、日本女子大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会で承認を得ている(課題番号第519号)。

### Ⅲ 分析方法

#### (1) 逐語録の作成

インタビューはⅡ(5)倫理的配慮に記述したように、許可を得て IC レコーダーに録音した。録音内容は社会福祉法人日本視覚障害者職能開発センター 東京ワークショップに業務委託を行い、逐語録化した。逐語録に記載された個人情報を含む固有名詞は商事法務研究会がすべて削除し、アルファベットに置き換えた。なお、逐語録化を一部業務委託することは事前説明書により調査対象者に説明され、了承を得ている。また、同センターとは、秘密保持契約を締結している。

#### (2) 調査対象者の分類

すべての逐語録の読み込みを行ったうえで、協力研究者 2 名で協議し、調査対象者 30 名を①父母の別居および離婚に対して肯定的な思いを抱いている群、②父母の別居および離婚に対して否定的な思いを抱いている群、③父母の別居および離婚に対して肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている群に分類（群分け）した。前述したとおり、このように分類し分析することで、群ごとに父母の別居および離婚に対して子どもに思いが異なるに至った背景を明らかにすることができるのではないかと考えた。

分類する際、最も重視したのは調査対象者本人の語りである。ウェブアンケートの回答において、父母の離別への現在の思いについて「肯定的」「否定的」「どちらともいえない」と回答した人がそれぞれ同数程度になるように調査対象者を調整したものの、実際にインタビューを開始すると、ウェブアンケートとは異なる気持ちを話す調査対象者が多数みられた。ウェブアンケートへの回答とインタビュー時の回答が異なることを質問したところ、「ウェブアンケートへの回答は父母の離別に対してではなく別居親に対する思いを答えていた」「一般的な離婚という出来事に対する思いを答えていた」といった声が聞かれた。こういった状況も鑑み、分類においては、ウェブアンケートの回答結果ではなく、インタビュー時の調査対象者本人の語りを重視した。インタビューガイド「(4) 両親の別居・離婚について、当時どのような気持ちでしたか」「(5) 両親の別居・離婚について、今振り返ってどのような気持ちですか。ご自身の思いはより良くなりましたか。それともより悪くなりましたか」といった質問に対し、語られた内容、特に現在どのような気持ちを抱いているかにそって分類を行った。例えば、父母の離別に対し、離別当時は肯定的とも否定的ともいえない思いだったが現在は肯定的な思いになっている調査対象者は「①父母の別居及び離婚に対して、肯定的な思いを抱いている群」に、離別当時も現在も変わらず否定的な思いを抱えている調査対象者は「②父母の別居および離婚に対して、否定的な思いを抱いている群」に、といったように分類を行っている。

その結果、①父母の別居および離婚に対して肯定的な思いを抱いている群は 16 名（男性：5 名，女性：11 名）、②父母の別居および離婚に対して否定的な思いを抱いている群は 6 名

(男性：4名、女性：2名)、③父母の別居および離婚に対して肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている群は8名(男性：6名、女性：2名)となった。

### (3) 分析方法 (M-GTA)

データの分析には、木下(2007)<sup>1</sup>による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いた。インタビュー調査などの言語データを分析するために確立されている分析方法はいくつかあるが、そのなかの主要なものとして、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)という方法がある。グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)は、「データに根ざした理論」を構築することを目的とする(岩壁, 2010)<sup>2</sup>。GTAは言語データから共通点(カテゴリー)をみつけ出し、理論を生成していくことを目指すのに適した方法論の1つである。M-GTAは、GTAが持つ特色を継承しつつ、現実に問題となっている現象において研究結果がその解決や改善に向けて実践的に活用されることが期待され、研究対象としている現象がプロセス的特性を持つ研究に適している(木下, 2007)。プロセスとは、人と人とのかかわりあい(社会的相互作用)の展開過程のことである。また、GTAは比較的包括的な理論生成を目指した方法論であるのに対して、M-GTAはある特定の現象やフィールドに根ざした理論生成を行えるよう、分析手順にも工夫が行われている。本調査は「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子はどのような体験をとおして、父母の離別にどのような思いを抱くようになるのか」、つまり子どもが父母の離別から現在に至るまでに父母や周囲の人々とどのようなかかわりあいをしてどのような思いを抱くようになったかのプロセスを明らかにすることを目的としており、この点からもM-GTAで分析することが適切であると判断した。

本調査では、「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子はどのような体験をとおして、父母の離別にどのような思いを抱くようになるのか」というテーマにおいて、さらに分析テーマを①未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス、②未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に否定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス、③未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱くようになるまでの心理的プロセス、と限定する。前述のとおり、M-GTAは包括的な理論生成を目指すのではなく、特定の現象やフィールドなど、限定的な範囲のテーマを分析するのに適した分析方法であり、このような限定的な範囲において、子どもの心理的变化や多様性を説明することができる。また、明らかになった理論は今後離別を経験する親子や支援者が活用しやすいと考え、本研究ではM-GTAを採用した。

---

<sup>1</sup> 木下康仁(2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂

<sup>2</sup> 岩壁茂(2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究：方法とプロセス 岩崎学術出版社

#### (4) M-GTA の具体的な手順説明

分析は木下（2007）にならい、以下の手順で行った。

(a) M-GTA では分析テーマと分析焦点者の 2 点を重視する。本調査の分析テーマは上述のとおりである。分析焦点者とは、調査対象者を方法論的に抽象化した人間集団のことである。分析焦点者を設定することで、研究する人間は特定の対象者のデータを分析しつつも、直接の対象者ではないが対象者と属性や経験を共有する人間集団全体の行動や認識を、相当程度説明しうる理論を生み出すよう意識づけられる。また、特定の焦点化された人間集団の視点でデータを分析することになるため、生成される理論は特定の視点に基づく一貫性を持ったものになる（山崎，2019）<sup>3</sup>。本調査においては、父母の別居・離婚を経験した子どもの視点からデータを分析することになるが、特に今回は調査対象者 30 名を 3 群に分類し、各群の分析テーマおよび分析焦点者を下記のように設定した。

まず、①父母の別居および離婚に対して肯定的な思いを抱いている群においては、分析テーマを「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス」、分析焦点者は「未成年期に父母の別居・離婚を経験し、成人後父母の離別に肯定的な思いを抱いている子ども」と設定した。つまり、①では、未成年期に父母の別居・離婚を経験し、成人後父母の離別に肯定的な思いを抱いている子どもの視点にたつて、データを分析していくことになる。

次に、②父母の別居および離婚に対して否定的な思いを抱いている群においては、分析テーマを「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に否定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス」、分析焦点者は「未成年期に父母の別居・離婚を経験し、成人後父母の離別に否定的な思いを抱いている子ども」と設定した。つまり、②では、未成年期に父母の別居・離婚を経験し、成人後父母の離別に否定的な思いを抱いている子どもの視点にたつて、データを分析していくことになる。

最後に、③父母の別居および離婚に対して肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている群においては、分析テーマを「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱くようになるまでの心理的プロセス」、分析焦点者は「未成年期に父母の別居・離婚を経験し、成人後父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている子ども」と設定した。つまり、③では、未成年期に父母の別居・離婚を経験し、成人後父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている子どもの視点にたつて、データを分析していくことになる。

---

<sup>3</sup> 山崎浩司（2019）. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA） サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）質的研究法マッピング 特徴をつかみ、活用するために（pp108-115） 新曜社

次の手順からは、群ごとに分析を行った。

(b) まず、1人分のデータを読み込み、分析テーマに関連がありそうな箇所に着目し、着目箇所を分析焦点者の視点に照らして解釈し、定義および概念名を作成していった。この際着目した箇所は具体例と呼ばれ、定義および概念名とともにワークシートと呼ばれる表に記載した。ワークシートには理論的メモ欄も設け、解釈の際に検討した内容やアイデア、疑問、対極例を記録した。この理論的メモは、その後、概念間の検討を行ってカテゴリーを生成する際に参照された。

(c) その後、1人ずつ分析作業を進め、生成された概念にあてはまる内容があれば具体例として追加し、新しい概念が生成されると新たにワークシートを作成した。定義と概念名は最適となるように見直し、具体例が十分でない時は他の概念との統合や概念不成立の可能性を検討した。

(d) 生成した概念同士は継続的に比較分析し、サブカテゴリーおよびカテゴリーを作成した。そのうえで各々の連関に着目し、理論モデルを結果図に示した。



#### IV 結果と考察

群ごとに実施した分析の結果と考察を以下に記述する。なお、結果と考察は、各群の調査対象者一覧、分析によって得られたカテゴリー間の連関を図示化した結果図、各群における心理的プロセスを文章で説明したストーリーライン、各カテゴリーと概念の内容説明、各カテゴリーの具体例を示した概念表という順で示す。

##### (1) 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス

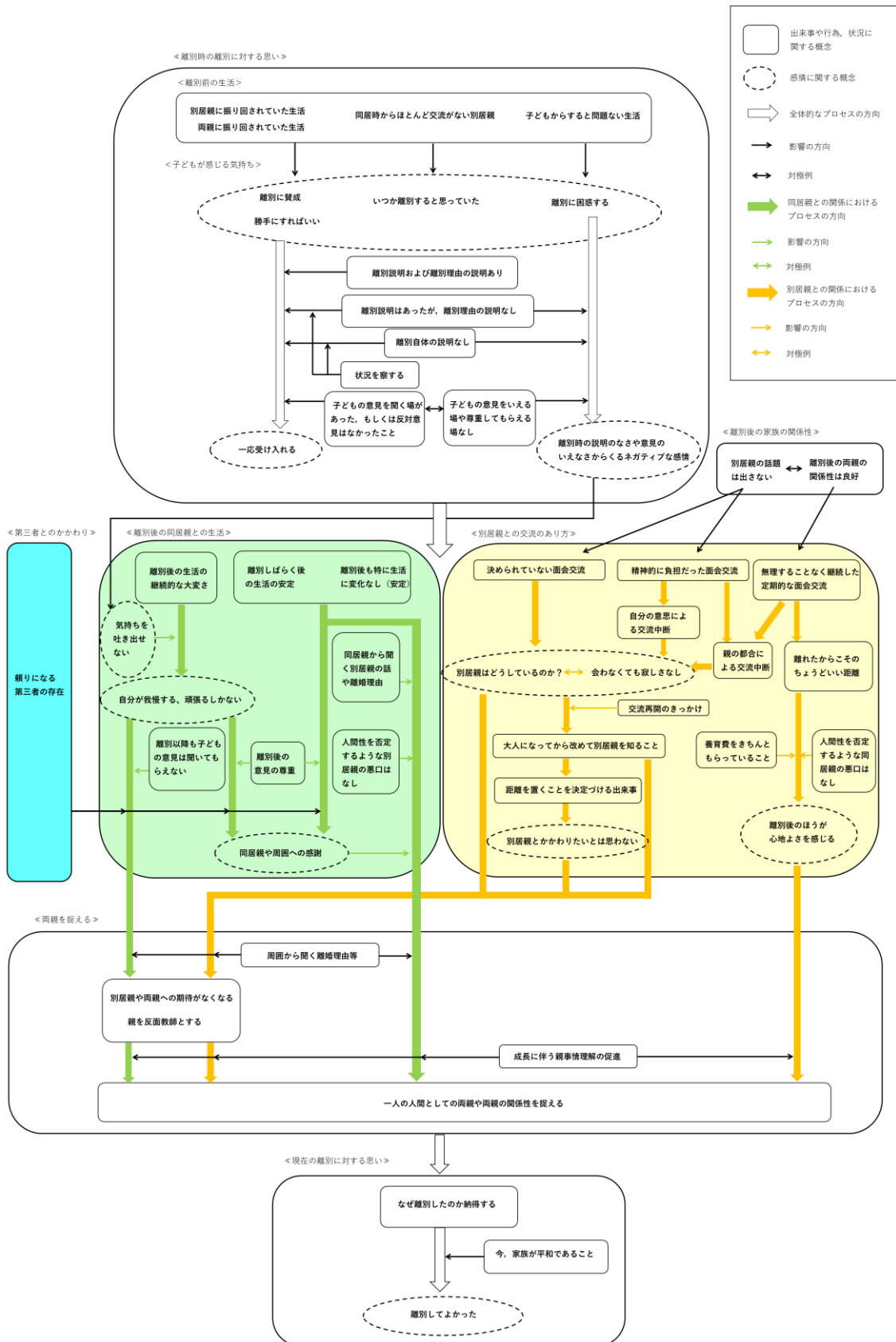
父母の別居および離婚に対して肯定的な思いを抱いている群 16 名（男性：5 名、女性：11 名）の調査対象者の一覧は表 3 のとおりである。

〔表 3〕 父母の離別に肯定的な思いを抱いている群（16 名 男性：5 名、女性：11 名）

対象者	性別	年齢	両親の離別を体験した時期	調査対象者が認識している離婚理由	同居親	面会交流と中断の有無	養育費の有無
①	女性	25	別居：12-13歳、離婚：14-15歳	最終的には母の不倫	父・母	当初からあり。母とは週1回の直接交流。父とは隔週～2、3か月に1回の直接交流。中断なし。	有
②	女性	36	別居と離婚：中学3年生	父が仕事をしない	母	当初なし。高校時に偶然会い、その後1回直接交流。社会人になる頃まで年賀状のみ出していた。その後中断。介護をきっかけに再開。	なし
③	女性	36	離婚：中学3年生、別居：16歳	父の借金、パチンコ、DV	母	引越し先等に父が押しかけるといった交流あり。3-4年程前から年1-2回直接交流。	なし
④	女性	36	別居と離婚：中学2-3年生	嫁姑関係の悪さ、母から父への不満	父	当初からあり。年3-5回。中断なし。	なし(きょうだい分かれて引き取られた)
⑤	男性	30	別居と離婚：15-16歳	不明(父の飲み歩き? 会話なし?)	母	一切なし。	不明
⑥	女性	30	別居：12歳、離婚：不明	事故による障害が父にあり、父が家族を遠ざけた	母	当初からあり。中学2年生までは半年に1回程度の直接交流。中学卒業時直接交流。高校生時は祖父母葬儀時にみかける。その後中断。27歳時に1回直接交流。その後再び中断。	有
⑦	男性	28	別居と離婚：10歳頃	父から子どもへの暴力、酒癖の悪さ	母	当初からあり。2回程度の直接交流。離別約1年後父逝去。	不明
⑧	女性	35	別居：10-11歳、離婚：15-16歳	不明(おそらく性格の不一致?)	父	一切なし。	不明
⑨	女性	31	別居と離婚：小学5年生	不明(喧嘩は何回かみたが理由はわからない)	母	当初からあり。中学生になるまで年数回の直接交流。その後中断。	不明
⑩	男性	38	別居と離婚：11-12歳	父のギャンブル依存と繰り返される転職	母	当初からあり。中学3年生までは月1回の直接交流。その後中断。19-20歳時に1回直接交流。その後再び中断。	ほとんどなし
⑪	女性	30	別居と離婚：17歳	父の借金とDV、母の金遣いの荒さ	里親一母(半年のみ。ほぼ友人宅にいた)	当初なし。26歳から父親と直接交流。高校卒業後に里親から母親の元へ戻るもすぐ自立。その後母親とは年1回ほどの直接交流。28歳から中断。	なし
⑫	男性	37	実父との別居と離婚：1-2歳 小4時に再婚した養父との別居と離婚：高校1年生	不明(喧嘩時に父が母に手を出して取り返しがつかなくなったのでは?)	母	実父とも継父とも一切なし。	不明
⑬	女性	34	別居と離婚：小学1-2年生	母の不倫	父一母(1週間)→父	当初からあり。小学4-5年生までは月1回ほどの直接交流。その後中断。	なし
⑭	女性	31	離婚：10-11歳、別居：離婚してから1年後	性格の不一致、母の精神的不調	父	当初からあり。母が遠方時は半年に1回ほどの直接交流。近くに引越してきてからは月0-1回の直接交流。中断なし。	不明(おそらくなし)
⑮	女性	39	別居と離婚：中学2年生	父の借金(パチンコ)	母	当初なし。20歳代の頃数回の直接交流。その後数か月に1回ほど父から電話がくる。	なし
⑯	男性	37	別居と離婚：高校2年生	父の借金(倒産)	母	当初なし。離別数年後約1年間の同居期間あり。同居解消後1回のみ直接交流。その後中断。	不明(おそらくなし)

調査対象者から得られたデータを M-GTA によって分析した結果、生成されたモデルを結果図として図 1 に示し、結果図から作成したストーリーラインを述べる。

〔図1〕 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス



- ストーリーライン（カテゴリーは《》、カテゴリーを構成するサブカテゴリーは<>、概念は太字ゴシックで示す。カテゴリーおよび概念の内容説明は後述する）

《離別時の離別に対する思い》は<離別前の生活>に大きく影響される。同居時から別居親に振り回されていた生活や両親に振り回されていた生活をしてきた子どもは離別に賛成であったり、勝手にすればいいという気持ちを抱きやすい。また、同居時からほとんど交流がない別居親との生活をしてきた子どもはいつか離別すると思っていたと感じる気持ち大きい。一方で、子どもからすると問題ない生活を送っていた子どもは、突然の離別に困惑する。離別の渦中において、離別説明および離別理由の説明があることや子どもの意見を聞く場があった、もしくは反対意見はなかったことで子どもは離別を一応受け入れる。また、離別説明はあったが、離別理由の説明まではなかった子ども、そもそも離別自体の説明がなかった子どもも年齢により状況を察することができている、加えて子どもの意見を聞く場があった、もしくは反対意見はなかったことで離別を一応受け入れている。

一方で、離別説明はあったが、離別理由の説明まではなかった子ども、そもそも離別自体の説明がなかった子どものなかには、状況を察することができる年齢ではなかったり、子どもの意見をいえる場や尊重してもらえる場がないことで、離別時の説明のなさや意見のいえないさからくるネガティブな感情を持つに至る子どももいる。

その後子ども達は、《離別後の同居親との生活》と《別居親との交流のあり方》を経験することになる。《離別後の同居親との生活》では、離別後も特に生活に変化はなく、安定した生活を送る子ども、離別しばらく後の生活の安定を経験する子ども、離別後の生活の継続的な大変さを経験する子どもに分かれる。離別後も特に生活に変化なしの子どもや離別しばらく後の生活の安定を経験する子どもは、離別後の意見の尊重を同居親から受けることや《第三者とのかかわり》における頼りになる第三者の存在を通して、同居親や周囲への感謝の気持ちを抱くようになる。月日が流れるなかで、同居親から別居親の話や離婚理由を聞くことがあるが、同居親の別居親の人間性を否定するような悪口はないこと、周囲からも離婚理由等を聞くこと、成長に伴う親事情理解の促進を通して、一人の人間としての両親や両親の関係性を捉えるようになる。

一方で、離別後の生活の継続的な大変さを体験する子どもは、自分の気持ちを吐き出せない、子どもは自分が我慢する、頑張るしかないという思いを抱える。それでも、離別後の意見の尊重を同居親からしてもらえたり、頼りになる第三者の存在があった子どもは同居親や周囲への感謝の気持ちを持つようになる。しかし、離別以降も子どもの意見は聞いてもらえない体験を重ねた子どもは、頼りになる第三者の存在があったとしても親への期待はなくなり、親を反面教師とするに至る。

《別居親との交流のあり方》には、《離別後の家族の関係性》が関係している。離別後の

両親の関係性は良好である場合、無理することなく継続した定期的な面会交流を子どもは経験しやすい。無理することなく継続した定期的な面会交流のなかで、離れたからこそちょうどいい距離感を感じることで、人間性を否定するような同居親の悪口を別居親から聞かないこと、養育費をきちんともらっていることを通し、子どもは離別後のほうが別居親との関係に心地よさを感じるようになる。

一方で、《離別後の家族の関係性》において、離別後の両親の不仲が継続している、自身が別居親のことを苦手に思うといった理由により、別居親の話題は出さない状況である場合、面会交流は決められていなかったり、実施されたとしても精神的に負担を感じる面会交流を子どもは経験しやすい。決められていない面会交流では、別居親はどうしているのか？と思う子どももいれば、会わなくても寂しさはないと思う子どももいる。精神的に負担だった面会交流をする子どもは自分の意思による交流中断や親の都合による交流中断を経験し、その後、別居親はどうしているのか？と思う子どももいれば、会わなくても寂しさはないと思う子どももいる。交流再開のきっかけにより、大人になってから改めて別居親を知る子どももいるが、交流を重ねるなかで別居親との距離を置くことを決定づける出来事があると、別居親とかかわりたいとは思わなくなり交流は中断される。そして、周囲からも離婚理由等を聞くことで、別居親や両親への期待がなくなり、親を反面教師とするに至る。

子どもは成長するにつれ、《両親を捉える》ようになる。別居親や両親への期待がなくなり、親を反面教師とする子どもも、そうではない子どもも、成長に伴う親事情理解の促進により、一人の人間としての両親や両親の関係性を捉える。

一人の人間としての両親や両親の関係性を捉えることができると子どもは、両親がなぜ離別したのか納得する。そして、今、家族が平和であることから考えても、離別してよかったと思うに至る。これが、《現在の離別に対する思い》である。

#### ➤ カテゴリーおよび概念の内容説明

##### ① 《離別時の離別に対する思い》

子どもが持つ、離別時の離別に対する思いを表すカテゴリーである。離別時の離別に対する思いは、＜離別前の生活＞に大きく影響される。同居時に別居親の借金やDV、ギャングル、酒乱、攻撃的な対応、仕事をせず家にお金を入れない、家に帰ってこなくなるなど別居親に振り回されていた生活を送っていたり、両親の関係性の悪さや両親の言動、両親からの虐待など、両親に振り回されていた生活を送っていたりする子どもは、両親が離別したことでホッとすると、解放された気分になるなど離別に賛成であったり、家庭への諦めの気持ちから勝手にすれればいいという思いを抱く。

また、同居時からほとんど交流がない別居親との生活をしてきた子どもは同居時の両親の関係性や家族の関係性から、いつか離別すると思っていたと感じる気持ちが多い。

一方で、**子どもからすると問題ない生活**を送っていた子どもからは、突然の離別に困惑する、両親がそろっていない状況に悲しさを感じる、離別しないでほしかったと思うなど、**離別に困惑する**語りが多く聞かれた。

次に、離別の渦中における子どもへの離別説明や子どもの意見を聞く機会についてはさまざまな状況が聞かれた。まず、両親が離別するという**離別説明および離別理由の説明がある**ことや離別時に、「どちらの親についていきたいか」「名字をどうしたいか」などの**子どもの意見を聞く場があった、もしくは（その当時の状況に特に）反対意見はなかった**子どもは離別を一応受け入れていた。また、両親が離別するという**離別説明はあったが、離別理由の説明まではなかった**子どもやそもそも**離別自体の説明がなかった**子どもも年齢により離別前の生活や離別時の両親の様子をみて**状況を察することができている**こと、加えて**子どもの意見を聞く場があった、もしくは反対意見はなかった**ことで離別を一応受け入れている。

一方で、**離別説明はあったが、離別理由の説明まではなかった**子ども、そもそも**離別自体の説明がなかった**子どものなかには、状況を察することができる年齢ではなかったり、**子どもの意見をいえる場や尊重してもらえない**ことで、**離別時の説明のなさや意見のいえないさからくるネガティブな感情**を持つに至る子どももいる。彼らは、離別時に説明がない、もしくは離別は子どもの責任ではないという説明がなかったり、意見を聞かれずに同居親が決まったことから、「離別は自分のせいなのかもしれない」「別居親は自分と一緒に暮らしたくないのだ」といったネガティブな妄想が膨らんだり、不安になったりしていた。

このように、離別前の生活状況、離別時の説明の有無やその内容および子どもの意見を聞く機会の有無により、子どもが抱く**《離別時の離別に対する思い》**はさまざまであることがわかる。こうした思いを抱きながら、子どもの離別後の生活は始まっていく。そして離別後の子どもは、**《離別後の同居親との生活》**と**《別居親との交流のあり方》**を経験していくことになる。

## ② 《離別後の同居親との生活》

《離別後の同居親との生活》とは、子どもが離別後に同居親とどのような生活をしていくかを表すカテゴリーである。《離別後の同居親との生活》では、**離別後も特に生活に変化はなく、安定した生活を送る子ども、離別しばらく後の生活の安定を経験する子ども、離別後の生活の継続的な大変さを経験する子ども**に分かれる。

別居親と同居しなくなったものの、学校や名前の変更、引っ越しなどがなく、**離別後も特に生活に変化なし**の子どもや、離別直後の混乱はあったものの、離別したことで別居親に振り回されることがなくなる、同居親の不機嫌が解消される、同居親との関係が改善される、金銭的に安定するなど、**離別しばらく後の生活の安定**を経験する子どもは、**離別後の意見の尊重**を同居親から受けることや**頼りになる第三者の存在**を通して、**同居親や周囲への感謝**

の気持ちを抱くようになる。離別後の意見の尊重とは、離別後に不安なことを相談できたり、自分の生活や人生にかかわること、例えば進路などに関して意見を述べた時にその意見を尊重してもらえたりすることを指す。月日が流れるなかで、同居親から別居親の話や離婚理由を聞くことがあるが、同居親の別居親の人間性を否定するような悪口はないこと、周囲からも離婚理由を聞くこと、そして成長に伴う親事情理解の促進を通して、一人の人間としての両親や両親の関係性を捉えるようになる。

一方で、離別後に金銭的に生活が制限される、同居親が不安定になる、家事などをしなくてはならなくなる、再婚で生活が激変するなど、離別後の生活の継続的な大変さを体験する子どもは、自分の気持ちを吐き出せない、子どもは自分が我慢する、頑張るしかないという思いを抱える。自分の気持ちを吐き出せないとは、祖父母や友人、周囲の人などに自分の気持ちをいったり、感情を吐き出すことができなかつたりすることを指す。この気持ちを吐き出せないことは、離別時の説明のなさや意見のいへなさからくるネガティブな感情を持つことが背景となっている語りが聞かれた。例えば⑥氏は、「やはり2人（両親）から明確に、こういう理由で離れるからという説明を受けなかったので、何となく気が付いたらいなくなっていて、何となく気が付いたら長く会わなくなっていてという、その何となくというところの何というのでしょうか、私のいえない、聞けないにはつながっていると思いますね。…中略…（いえない、聞けないは）家族関係に問わずということですよ。大事なときに聞けなかった、いえなかった（ということ）で後悔することというのがすごく多くて」と語っている。それでも、離別後の意見の尊重を同居親からしてもらえたり、頼りになる第三者の存在があった子どもは同居親や周囲への感謝の気持ちを持つようになる。しかし、離別以降も子どもの意見は聞いてもらえない体験を重ねた子どもは、頼りになる第三者の存在があったとしても親への期待はなくなり、親を反面教師とするに至る。

### ③ 《第三者の存在》

②でも数回記述した頼りになる第三者の存在とは、祖父母やきょうだい、里親、近所の人、学校の先生、友人、心理士など、よくしてくれ頼りになる第三者の存在があったことを指す。祖父母が経済的に助けてくれた、家事を手伝ってくれた、里親が離別後も普段と変わらない日常を送らせてくれた、学校の先生が進路の相談にのってくれた、友人が普段と変わらず接してくれ、遊んでくれたり話を聞いてくれたりしたことが支えになったなど、多くの語りが聞かれた。

### ④ 《離別後の家族の関係性》《別居親との交流のあり方》

《離別後の家族の関係性》と《別居親との交流のあり方》は密接に関係しているため、同時に説明することとする。《離別後の家族の関係性》は離別後に両親の関係性や子どもと両親の関係性がどのような状況だったかを表すカテゴリーである。《別居親との交流のあり方》とは、子どもが別居親とどのような面会交流をしていくかを表すカテゴリーである。

まず、「離別後の家族の関係性」において、子育てにおいて両親が連絡し合ったり、同居親との普段の生活の中でも別居親の話が普通に出てきたりするなど、**離別後の両親の関係性は良好**である場合、**無理することなく継続した定期的な面会交流**を子どもは経験しやすい。**無理することなく継続した定期的な面会交流**では、子どもが自分のペースで会いたい時に交流できていたこと、中学生以上などある程度高年齢になった子どもと別居親は同居親や第三者を介さずに直接連絡していたこと、同居親が面会交流後に不機嫌にならないなど行きやすい環境を作ってくれていたことなどが語られた。特に子どもが自分のペースで会いたい時に交流できていたことは多くの子どもから語られた。このような面会交流を体験することで、離別時は別居親と仲があまりよくなかった子どもでも、**離れたからこそちょうどいい距離感**を感じるようになっていった。そして、別居親から**人間性を否定するような同居親の悪口を聞かないこと、養育費をきちんともらっていること**を通し、子どもは**離別後のほうが別居親との関係に心地よさを感じるようになる**。

一方で、「離別後の家族の関係性」において、離別後の両親の不仲が継続しており子どもが同居親に気を遣っている、もしくは、暴力を受けていたなど子ども自身が別居親のことを苦手に思っているといった理由により、**別居親の話題は出さない状況**である場合、**面会交流は決められていなかったり、実施されたとしても精神的に負担を感じる面会交流**を子どもは経験しやすい。**決められていない面会交流**では、**別居親はどうしているのか？**と思う子どももいれば、**会わなくても寂しさはない**と思う子どももいる。

**精神的に負担だった面会交流**とは、連絡なく別居親が突然現れる、警察を呼ぶほどの騒ぎになる、離別前に自分に暴力をふるったり、言葉で傷つけたり、苦手意識があったりした別居親と会うことで混乱し、精神的に負担を感じるような交流を指す場合(a)と、面会交流自体は楽しかったが、その後離れないといけないという矛盾に気持ちがついていかず精神的に負担を感じる交流を指す場合(b)がある。(a)の交流を体験した子どもの中には、両親の関係性は比較的**良好**だったため、自分が会いたくないと伝えても面会交流を強いられた子どもいた。離別前別居親から暴力を受けていた⑦氏は、「なんで母親は自分たちにこんなこと(面会交流)をするのかとか、僕の場合は会わせたりするの、どちらかというをやめてほしかったので。そういうところをやっぱり、ちゃんと話し合ったほうがいいのかなんていうふうに、親と子どもが話す機会っていうのは、あったほうがいいのかなんていうふうには思いますね。…中略…僕とかはやっぱり会いたくなかったので、そういう子どももいると思うので。うーん、そこは寄り添ってあげてもいいのかなんていうふうには思いますね」と語っている。**精神的に負担だった面会交流**を経験した子どもは、その後、**自分の意思による交流中断**もしくは、どちらかの親の再婚や養育費の不払い、同居親の判断など、**親の都合による交流中断**を経験する。その後は、**別居親はどうしているのか？**と思う子どももいれば、**会わなくても寂しさはない**と思う子どももいる。

面会交流は、ばったり会った、急に介護をしなくてはならなくなった、自分が成長し大人になったことで別居親に対応できると思えるようになった、親族の葬儀があったなどの**交流再開のきっかけ**により再開することもある。再開した面会交流を通して、**大人になってから改めて別居親を知る**子どももいるが、交流を重ねるなかで別居親との**距離を置くことを決定づける出来事**があると、**別居親とかかわりたいとは思わない**ため交流は中断される。**距離を置くことを決定づける出来事**とは、人として許せない出来事や現在の生活が乱されるためもうかかわれないと思った出来事を指す。

#### ⑤ 《両親を捉える》

《両親を捉える》とは、子どもが**一人の人間としての両親や両親の関係性を捉える**ようになるまでを表すカテゴリである。子どもは、同居親との生活や別居親との面会交流、同居親から聞く話、周囲から聞く話、そして成長して親の事情がわかってくることを通して、**一人の人間としての両親や両親の関係性を捉える**ようになる。**離別後の生活の継続的な大変さ**のなかで、自分の**気持ちを吐き出せないまま、自分が我慢する、頑張るしかない**という思いを抱え、**離別以降も子どもの意見は聞いてもらえない体験を重ねた子どもや、無理することなく継続した定期的な面会交流**を体験することなく、もしくは体験したとしても中断を経験し、別居親との心理的距離が遠い子どもは、**周囲から聞く離婚理由等**の影響も受けつつ、**別居親や両親への期待がなくなり、親を反面教師とする**ようになる。このように、**別居親や両親への期待がなくなり、親を反面教師とする**子どもも、そうではない子どもも、**成長に伴う親事情理解の促進**もあり、**一人の人間としての両親や両親の関係性を捉える**に至る。これは、離別後の生活や面会交流、同居親や周囲から話を聞くこと、そして自身が成長したことなどを通して、一人の人間としての両親を理解し、両親の**関係性を捉えられる**ようになることを示している。

#### ⑥ 《現在の離別に対する思い》

《現在の離別に対する思い》とは、今現在子どもが抱く両親の離別に対する思いを表したカテゴリである。子どもは**一人の人間としての両親や両親の関係性を捉えられる**ようになると、両親が**なぜ離別したのか納得**することができる。そして、いろいろなことがあったが、**今、家族が平和である**ことから考えても、**離別してよかった**と両親の離別に肯定的な思いを抱くに至る。



〔表4〕 父母の離別に肯定的な思いを抱いている群の概念表

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	概念の定義	具体例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	総数		
カテゴリー	サブカテゴリ	離別前の生活	別居親に振り回されていた生活	同居時は別居親の借金やDV、ギャンブル、酒乱、攻撃的な対応、仕事をせず家にお金を入れない生活、家に帰ってこなくなるなど別居親に振り回されていた生活を送っていたこと	夜とかも暴力を振るったりすると、お母さんと妹はホテルとかに泊まりにいったりしてたんですけど。私だけ、お父さんと一緒に残されて、取りあえず早く逃げないと、ということで妹だけさっさと連れていってんですけど、私は間に合わなかったという感じで、いつもどうかしてお父さんと残ってたんですけど、お父さんは私に、「そのへん、お母さん探してこい」といわれて、1人で小さいなか、探しにいかされたこともあったり。(③さん)				○	○															8		
			両親に振り回されていた生活	同居時は両親の関係性の悪さや両親の言動、両親からの虐待等に振り回され、不安定な生活を送っていたこと	離婚する1年くらい前から、俺を介して喋るみたいな感じで、<ああ>それがもう面倒くさくて、<それは面倒くさいですね>面倒くさいし、家に帰りたいというの結構あって、<家に帰りたいなかった>うん。でも、バイトもできないから金がなくて、家に帰るしかないから。正直、離婚してよかったなって思いましたよ、そういうときは。(⑤さん)																					8	
			同居時からほとんど交流がない別居親	同居時は別居親との交流がほとんどなく、関係性が薄いこと	<それまで、物心ついたくらいから、あまりお家にはいらっしやなかった>ほとんど、何ていうんですかね。寝に帰ってくるだけ。<じゃ、②さんとは接触というか>一緒にご飯食べたりとかは、ほとんどなかったです。(②さん)																						4
			子どもからすると問題ない生活	子どもからすると特に問題のない安定した生活を送っていたこと	本当に仲のいいというか、何かイベントはあるし、誕生日はみんなでパーティーするし、…(中略)…別れとか喧嘩するっていうのをみたことがなかったので、(離別)本当に青天の霹靂というか。とてもいい関係だと思ってたんですけど。(⑬さん)																						4
	子どもが感じる気持ち	子どもが感じる気持ち	離別に賛成	両親が離別したことでホッとする、解放された気分になる、離婚してほしいと思っていたなど、離別に賛成であること	正直いって、すごいほっとしたのを感じています。<あつ、ほっとした>はい、もう、家でしゃべっちゃいけない、何しても怒られるっていう状態が、あつこれで終わるんだと思ったら、宿題とかをやっていて怒るのが、母は怒らなかつたんで、父が怒る人だったので、父が出ていくということは、そういうことをして怒られるということはないかなって思っていて、寂しいよりも正直いってほっとしましたね。(⑥さん)																					10	
			勝手にすれればいい	離別すると聞いても、家庭の状況に散々振り回されていたため、どうでもよい、という諦めの気持ちがあったこと	<離婚してほしいなかつたとか、そういうような気持ちとかはそんなにないですかね>ないですね。もちろん世間体とかはあったのかもしれないですけど、そもそも、それ以前の、家族の問題があったんで、もう離れようが離れまいが、結構ちょっと私的にはもうどうでもいってなっちゃってました。(⑪さん)																					2	
			いつか離別すると思っていた	同居当時の両親の関係性、家族の関係性から、いつか離婚すると思っていたり、別居に至っても仕方ないと思っていたりしたこと	母の気持ちもすごいわかるので。家にも何もしない父みたいな形で、ずっとゲームして、全部家事は母がやってみたいな、すごく嫌気が差す気持ち、すごくわかつたので、しょうがないなっていう考えもあって、<お母様は働かれてたんですけど>はい。<じゃあ、共働きなのに、家事一切をお母さんがしていて、それはお母さんは、それは怒るよなっていう気持ちはわかつた>そうですね。ずっと帰ってきてからパソコンの前に座って、ずっとゲームをしてたんで、それを私たち、子どももみてたので、お母さんがすごく苛立ってるっていうのをわかつてはいたので。(①さん)																					7	
			離別に困惑する	両親の突然の離別に困惑したり、両親がそろっていない状況に悲しさを感じたり、離別しないほうがいいかと思っていたこと	そもそも離婚っていう言葉が多分まだわかってなくて、頭が真っ白になって、まだ小さかったので、両親もそれ以上の踏み込んだ話はせず、よくわからないけど、何か頭が真っ白になったまま寝たっていう感じですね、その日の夜。<割と何らいうか、青天の霹靂というか>いきなりという形でした。(⑬さん)																					6	
	子どもが感じる気持ち	子どもが感じる気持ち	離別説明及び離別理由の説明あり	離別するという説明も、離別する理由の説明もあったこと	そんな感じではばらばらになったって感じですか。<そこで離婚>そうですね。それで、借金も、親父の借金が丸々、何も残っていないわけじゃないですか、どうしようもないやつが、これじゃもう全員終わるっていう状態になってるんで、とりあえず親父との関係は切らなあかん、戸籍上。だから、とりあえず母親を連れていって、離婚するっていう形です。親父のほうも、別にそれ自体に「あかん」みたいなことをいってなかったんで、そんな感じですかね。<籍を抜くというか、分けることについては>そうですね。生きていくために籍を抜くぐらいの感じですね。別に、仲悪かったとかはなかったんで、そういう感じですか。(⑯さん)																					3	
			離別説明はあったが、離別理由の説明なし	離別することの説明はあったが、離別理由に関する詳細な説明はなかったこと	<何か別居や離婚について説明などはありましたか>詳しくはなかったです。でも、そろそろしようと思うんだみたいなのはあって、聞きにくい雰囲気もあつたので、私は別に、その敵意な雰囲気もずっとあるのであればいいんじゃないタイプだったので、あまり、結果ぐらいしか聞かなくなつたです。(④さん)																					11	
			離別自体の説明なし	離別時に離別すること自体の説明(別々に暮らすようになる、離婚するなどの説明)がなかったこと	<お父様から説明は、⑥さんのほうにはなかった>なかつたですね、はい。<さよならとかもなく、急に>急にでしたね、はい。もう顔はみていたくないといわれたことだけ覚えてるんですけども。<その後、お母様から何か説明はありましたか>いや、母からも何もなかつたです。なので、正直いって何が起きたのかわからなくて。<うん。そのとき、どんなお気持ちだったか>そうですね、聞いても答えられないので、何が起きたのかわからない。祖父母に電話しようにも何とないので、その当時は携帯とかもないので、あつう、どう連絡をとっていいかわからないので、誰に助けを求めているのかわからなかつたですね。(⑥さん)																						2

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	総数			
離別時の 離別に対する思い		状況を察する	離別前の生活や離別時の両親の様子をみて、状況を察していたこと	そんな詳しい理由とかは特に。私も聞かなかったので。<それはどうでしたか、何か聞きたかったけど、聞かなかったか、もう別に>いや、何か、やっぱりこう、私もお母さんと気持ちが多分違かったのか、別れた理由は何となく気付くというか、わかるんで、もう多分そこで聞かなかったと思います。(⑨さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9			
		子どもの意見を聞く場があった、もしくは反対意見はなかったこと	離別時に、「どちらの親についていきたいか」「名字をどうしたいか」などの子どもの意見を聞く場があった、もしくはその当時の状況に特に反対意見はなかったこと	<離婚してほしくないとか、そういうような意見をいえたりとかはしましたが>あっ、めっちゃ聞いてくれるお母さんで、「私は離婚する。したい」といって、で、「私に付いてきてほしい」みたいな。「死んでもあんたら3人は絶対守るから離婚したい」って。で、「あんたら3人どう思う」みたいに感じて聞いてくれた。(⑩さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12		
		一応受け入れる	完全に納得するわけではないものの、両親の離別を一応受け入れること	完全に納得するわけではないものの、両親の離別を一応受け入れること	<もし、聞いてくれるような感じだったら、話しかかったとか、自分の気持ちを伝えたかったとかありますか>その当時ですかね。あったかな。何かあつたかな。今、思い出すと、どうだろうな、何か、あんまり、多分、聞こうというのはなかったかもしれないです。何か、もうどうせみて別々になるのは、結構、目に見えてわかるような雰囲気だったので、別にもう結果はわかって、聞いてもしようがないといったらあれなですかね、何かあんまり聞こうと思わなかったです、何か、なんとなく。(⑩さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	
		子どもの意見をいえる場や尊重してもらえる場なし	離別時に、子どもの意見を聞く場はなかったこと。あつたとしても尊重してもらえなかったこと	何というんですかね。親父のほうに行きたいって思っはなかったんですけど、何ですかね、付いてくるとか聞かないんだみたいな。選択肢を与えないみたいで、そういう人なんだみたいな。何ですかね、残念な人だとは思いました。<それは、お父さんにもお母さんにも、そういうふうにいるんですか>うーん、というか、この人たちのなかですべてのことが決定されて、俺の意見は何も反映されなくて終わって、でも、親父は俺と暮らしたくないんだとそんななかで処理されましたね、俺のなかで。(⑤さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4	
		離別時の説明のなさや意見のいえないさからくるネガティブな感情	離別時に説明がない、もしくは離別が子どもの責任ではないという説明がなかったり、意見を聞かれずに同居親が決まったことからネガティブな妄想が膨らんだり、不安になったりしたこと	母が出て行くっていう、その話のときに、あなたたちが悪いんじゃないだよ、お父さんとお母さんが反りが合わなかったり、何でもいんですけど、だから、お母さんは家を出て行くんだっていう、その一言は、出て行くときに欲しかったとは思いますが。<その後、ずっと自分のあれが悪かったかな、これが悪かったかなって>そうですね。頭ではわかっていても、例えば当時だったら、あのときあのお皿を片付けなかったからかなとか、あのとき駄目っていわれたものを触って、こぼしちゃったからかなとか、そのちっけなことが離婚理由なわけではないんですけど、そういうのがぐるぐる回ってしまうというか、妹と喧嘩したから駄目だったのかなとか、何となくそういう理由があると、そこは私の悪いところだから、そこを我慢しなきゃって思うと、もっとどんどん何もいえなくなってしまうって、最後の最後まで聞けなかったっていうのがすごくあります。(⑬さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4	
離別後の同居親との生活		離別しばらく後の生活の安定	離別直後の混乱はあったものの、離別したことで別居親に振り回されることがなくなる、同居親の不機嫌が解消される、同居親との関係が改善される、金銭的に安定するなど、離別後のほうが生活が安定したこと	会話ができるようになったといったらいいですかね、離婚してからというか、それまで母親との会話はなかったんで、そういう意味では戻れたっていうんですかね。親子の関係がある意味で。そういうことかなと思います。(⑬さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5		
		離別後も特に生活に変化なし(安定)	離別後も学校や名前の変更、引っ越しなどがなく、特に生活に変化はないこと	<生活自体は特に変わらず>何も変わらず、お父さんだけがなくなったという感じでした。(⑮さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8		
		同居親から聞く別居親の話や離婚理由	離別後に、別居親の話や離婚理由を同居親から聞くようになったこと	<離婚する理由みたいなって聞いてない方が結構多いんですけど、それは何かこう、聞けるような雰囲気だったのか、それとも、お母さんが勝手に言ってきたのか>僕、どっちかというマザコンなんで、お母さん大好き子なんで、よく2人でご飯食べに行ったりとか、飲みに行ったりとか、ドライブしたりとか、なんでもう、どっかという、友達みたいな感覚でいてたんで、だからいろいろしゃべってくれた。僕もしゃべりますし、向こうもしゃべったという感じですね。(⑩さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	
		人間性を否定するよう別居親の悪口はなし	同居親が別居親の人間性を否定するような悪口を話すことはなかったこと	悪口というか、こんなだったとか、高いビデオカメラを質に入れられたとか、何かそういう感じの。人間性が悪かったわけではないんですよ、お父さんの多分、性格も優しいですし、言葉はひどく暴力的なことをいうとか、そういうことをすくいうわけではない人だったんで、お母さんが精神的にダメージを与えられるようなことは、借金以外ではなかったんですよ、多分、暴力的でもないし。だからお父さんの人間性を否定するような悪口とかはなかったと思います。(⑮さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
		離別後の意見の尊重	離別後、不安なことを相談できたり、自分の生活や人生に関わることに際して意見を述べた時にその意見を尊重してもらえたこと	最終的には、やりたかったことをやらせてもらえたっていうのが、大きいかんとは思いますが。家を出て行ってお母さんのほうに行くにしろ、進学にしろ。進学も、最終的には自分で行きたいところを決めたこととをいうとか、そういうことをすくいうわけではない人だったんで、お母さんが精神的にダメージを与えられるようなことは、借金以外ではなかったんですよ、多分、暴力的でもないし。だからお父さんの人間性を否定するような悪口とかはなかったと思います。(⑮さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
		同居親や周囲への感謝	成長して両親が離婚することになった経緯や生活することの大変さを理解し、同居親や助けてくれた周囲への感謝の気持ちが湧いてくること	何か多分、おそらくその家政婦さんの存在がきつと大きかったような気が、今、考えたらして、多分、母親の代わりのような、そういう精神的に支えてくれるような大人がいたから、多分、何か大きく離婚とかによって価値観が変わったとか、そういうのがなかったかなという、今、考えたらそんな感じがします。(⑧さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	総数		
離別後の同居親との生活		離別後の生活の継続的な大変さ	離別後に金銭的に生活が制限される、同居親が不安定になる、家事などをしなくてはならなくなる、再婚で生活が激変するなど、生活が継続的に大変になること	<転校後というか、引っ越し後はいかがでしたか。生活としては>最悪でした。学校はすぐに友だちもできて、転校したときは父と母（継母）もいたので、外部からみる目は普通の転校生。母も、今思えば、…（中略）…大変だったとは思いますが、家事は一切やらないし、料理も一切やらないし、全部スバルタで私にやらせたので、もう地獄でしたね。朝起きて、きょうだいのご飯を作って、洗い物をしてみたいなのを、専業主婦を小学生のうちからやった形なので、できなければ平手が飛んでくるし、もうすごかったですね。（⑬さん）	○					○												3	
		気持ちを吐き出せない	祖父母や友人、周囲の人などに自分の気持ちをいったり、感情を吐き出すことはできないこと	やはり2人（両親）から明確に、こういう理由で離れるからという説明を受けなかったことで、何となく気が付いたらなくなっていて、何となく気が付いたら長く会わなくなっていてという、その何となくというところの何となくなのでしょう、私のいえない、聞けないにはつながっていると思います。…中略…（いえない、聞けない）家族関係に聞かずということですね。大事なときに聞けなかった、いえなかった（ということ）で後悔することというのがすごく多くて。（⑥さん）	○					○												3	
		自分が我慢する、頑張るしかない	離別後の不安定な生活のなかで、自分が我慢するしかない、頑張るしかないと思えること	家に帰れば「お母さんがいない」って妹が夜に泣くから、「大丈夫だよ、大丈夫だよ」って、私がいわないし誰も慰めないし、お父さんはそんなことしてくれないから。ただ、みただけはいい父親。普通に裕福な家庭のサラリーマンみたいなスタイルは崩さなかったんで、周りも多分、子どもたちが泣いているとは思ってないんだらうなっていうのが子ども心にわかってましたね。<外からみえる家と>そうなんです。なので、きっとこれは誰も助けてくれないなっていうのがすごくわかって。かといって母にも連絡する手段はなかったんで、電話番号を知っているわけでもないし、じゃあもう、これでとりあえずやるかみたいな。変な使命感みたいなのがあったかもしれないです。<自分が本当に何となくかしまいたいな>何となくかしまいたいな、もう誰もいないしみたいな。（⑬さん）	○					○													3
		離別以降も子どもの意見は聞いてもらえない	離別以降も、子どもの生活に影響を与える内容を決める際に、子どもの意見を聞く場はなく、いったとしても尊重してもらえなかったこと	何か（父親の）お見舞いに行くのとかが嫌で。結構泣いてた時期もあったので。何か、当時は学校に行きたくなくてたんですかね、どちらかというと。嫌な気持ちとか忘れたくて学校に行くのが好きになっていたの、逆に。学校を休んでお見舞いに行くっていうのが嫌で。何か、行きたくないっていったのはありますね。それは、ちょっと嫌なことだったかもしれないですね。…（中略）…多分、母と子どもたちで、ちょっと気持ちの違があったんだと思うんですけど。<うーん。じゃあ、もうちょっと子どもに寄り添って考えようと思ったんですけど、うーん。うーん。うーん。今も同じ気持ち>そうですね。できることならやらなくてよかったなと思います。（⑦さん）							○	○											3
第三者とのかわり	頼りになる第三者の存在	祖父母やきょうだい、里親、近所の人、学校の先生、友人、心理士など、よくしてくれ、頼りになる第三者の存在があったこと	友達とかも、転々とさせてくれるぐらいには、みんな親身になって相談を聞いてくれたりとか、家とかお風呂とか、ご飯をいただいたりとかもしてもらったんで、友達にも恵まれたなと思いますし、その当時彼女もいたんで、彼女もだいたい頑張ってくれたなと思います。母親の友達も、さっきいったように家を提供してくれているぐらいなので、よかったなと思います。僕の友達の家にも借金してるんですけど、そこからも全然変わらなくて控えてくれてとかもありますし、ばあちゃんは、「もう戻ってき、一緒に暮らしたほうがいいよ、家族は」といってくれて、まとめてくれたし。この人たちには感謝をしています。（⑮さん）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
離別後の家族の関係性		別居親の話題は出さない	別居親の話題を出したら同居親に悪いかんと思ったり、別居親の話をすると同居親と険悪になったりする、もしくは自分が別居親のことを苦手に思うため、別居親の話題は口にしないこと	<お母さんにはお父さんのこといって悪いかんとかっていう気持ちはあったけど>そうですね。それは多分、常に持っていましたね。こんだけ頑張ってくれている人に、聞いて嫌な思いをさせるのもなか、ありましたね。（②さん）		○	○		○	○	○	○	○									8	
		離別後の両親の関係性は良好	離別後の両親の関係性は良好だったこと	何だかんだ連絡とって、別に何か、繕い戻したいから連絡とってるとかじゃなくて、私たちの教育に関することだったり。仕事の愚痴とかいいあったりとか。（⑭さん）	○			○		○		○	○										7
別居親との交流のあり方		無理することなく継続した定期的な面会交流	離別後に、自分が無理することなく、定期的な面会交流が継続していたこと	私の学校行事に結構母親に出てもらってたんで、プリント渡しに行ったり。何か文化祭とか、チケットといいますが…（中略）…それ渡しに行ったりとか、夏休みに、部活終わりで暇だから行ったりとかですかね。…（中略）…特に、中断、面会交流しない時期があったというのはそんなになく今までこれら感じですか>そうですね。ちょいちょい継続的に会ってました。（⑩さん）	○			○														4	
		親の都合による交流中断	離別後面会交流は実施されていたが、どちらかの親の再婚や養育費の不払い、同居親の判断など、親の都合によって面会交流が中断すること	<高校生からは会わなくなったってことですか>何か結婚も、相手が結婚したんのと、あと、お金をあんまり入らなくなった感じがですね。養育費、何か、3万円やったと思うんですけど、それが全然入らなくなったという感じみたいですね。<では、その再婚と養育費が全然ないということをきっかけに、ちょっと会わなくなった>そうですね。（⑩さん）						○	○											4	
		離れたからこそそのちょうどいい距離感	離別後のほうが別居親とちょうどいい距離感でつきあえたこと	<先ほどお母様とも何か関係がちょっとよくなったという話でしたが、それは何かあったのですか>それは多分、私が離れたから、それまでは何か、母も長女で家のこととか手伝いをやってきたのを、私にも強いる。兄にはいわないけど、私にはいう。それで必然的に私は母のことを嫌になる。それで結構険悪な関係になってたのが、離れて、たまに会って話すぐらいの関係がすごくいいです。<なるほど。毎日のように注意されるとかではなくて>よりかは、もう離れてからのほうがすごい楽です。（④さん）							○												2

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	概念の定義	具体例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	総数		
別居親との交流のあり方		人間性を否定するような同居親の悪口はなし	別居親が同居親の人間性を否定するような悪口を話すことはなかったこと	母親と会ったときに、毎回父親の愚痴をいわれるわけでもなく、いわれたところで、そんなに真剣にいうでもなく、軽い程度だったんで。<じゃあ、そんなにすごい人格否定してとか何とかって感じでもなく>そうですね。もう、そんなのわかってたことじゃんぐらいの。<そうなんですか。じゃあ、それを聞いてすごい心が痛いとかというわけでもなくという感じなのですかね>そうですね、何かいわれない悪口をいっているわけではないので。(⑭さん)	○				○													3	
		養育費をきちんともらっていること	別居親が養育費をきちんと払ってくれていたこと	半年に1回学費が落ちるんですけども、「すごく今回いっぱい落ちて、お金ない」みたいな電話がかかってきて、学費はお父さんが出してるんだってという実感がありましたし、生活費のほうは、おそらくお母さんが出してきている話を聞いてたので、養育費、2人で生活はやってくれたのかなって。(①さん)	○					○													2
		離別後のほうが心地よさを感じる	離別後の距離感がある別居親との関係のほうが心地よさを感じる	<お母さんとともに仲はよかったですね。悪かったですね。>そうですね。それは、別居されてからちょっと関係が変わったとかはありますか>あります、あります。<いい方向に>はい。<何がきっかけで、いい方向に変わったみたいなのは>距離が開いたからですかね。(⑭さん)							○												2
		精神的に負担だった面会交流	連絡なく別居親が突然現れる、警察を呼ぶほどの騒ぎになる、離別前に自分に暴力をふるったり、言葉で傷つけたり、苦手意識があったりした別居親と会うことで混乱するなど、精神的に負担を感じる面会交流を体験すること	急に私の中学校の卒業式に突然現れました。「来たっ」と思った。「二度と顔もみたくない」とか言って、口もきかないぐらいの勢いで出ていった人が、すごい笑顔で現れて、一緒に写真とかを撮るので、私はすごい混乱したのを覚えています。<何というか、顔もみたくないといわれて出ていかれた後も、半年に一週ぐらいは会っていたけど、顔もみたくないというのがすごく傷というか、ちょっと気持ちに残っちゃっていたということですね>そうですね。やはり、中学校2年生で父の家に行ったのは最後なのですけれども、そのときも全身に蕁麻疹が出てしまって、病院に緊急で運ばれるぐらいちょっと、多分精神的に負担だったみたいで。病院に行ったら蕁麻疹は取まってしまったので、食べ物とかではないねということ。(⑥さん)						○	○	○	○										5
		自分の意思による交流中断	別居親への苦手意識などから、自分の意思で面会交流を中断すること	私の年齢的にもかなり微妙な思春期の時期に差しかかって、よりやっぱりお父さんに対しての苦手意識が強くなって、自然にやっぱ会うの嫌やなってなっちゃって、会わなくなって。…(中略)…中学生ぐらいからはもう全然今まで会ってないです。(⑨さん)						○					○								2
		決められていない面会交流	離別後の面会交流は特に決められていなかったこと	<面会交流自体はもうない。一切、離婚した後、お父さんと会ったことはいませんか>ないです。<1回もない>ないです。<手紙もないし、電話もない>ないです。(⑤さん)	○						○					○							7
		別居親はどうしているのか？	離別後に別居親はどうしているのか、ふと気になること	高校1年生、だから離婚した翌年の父の日ぐらいにプレゼントを持って、わざわざ家に行った記憶があります。でも、どこに住んでいるのか、いまいまいちよくわかんなかったんで、父の実家に住んでいると思込んでいて…(中略)…持っていきましたね、確か。…(中略)…でも、そこに住んでなかったんですよね。たどり着かなかったかな、自転車で行って。…(中略)…多分、父の日のいるんな、近づいてきたらあるじゃないですか、催し。あの段階でとかだと思ってる。<父の日やなみたいなの>そうですね。ちょうど父の日と誕生日が近かったのもあって、父の。<そうなんですか。なんかお父さんが、どうしてんのかなみたいなの>そうですね。(②さん)							○	○					○						5
		会わなくても寂しさなし	別居親と会わなくても、面会交流を中断しても、特に寂しさなどはなかったこと	<でも、別に会わなくなったとしても、寂しいとはそんなに思わなかったということ>まったくないです。別に今も会いたいともないですし、子どもできても、別にみせたいとか、抱っこしてほしいというのもないです。(⑩さん)						○					○	○	○						8
		交流再開のきっかけ	ばったり会った、急に介護をしなくてはならなくなった、自分が別居親に対応できると思えるようになった、親族の葬儀があったなど交流再開のきっかけがあったこと	妹に、「ずっとお父さんと会わへんの」って、結構前からいわれてたんですけど、私はずっと拒んで、3、4年前ぐらいから、年1、2回ならいいかなって言うぐらいで、会うようになりました。<年1、2回ならいいかなって言うようになったのは、何かあったのですか>「何もいうてこへんし、何もしてこへん」って妹がいてたんで、妹……。お父さんがそんなんしてきたところで、お父さんももう60ぐらいになってるんで、「今やったらやり返せるから大丈夫」って妹がいてたんで、いいかなと思うようになりました。(③さん)							○	○											7
		大人になってから改めて別居親を知ること	大人になってからの面会交流や介護を通して、別居親を改めて知ること	大人になっても別に、好きかっていわれたら、好きじゃないけど、憎めん奴やなという感じですかね。<ああ、なるほど。そういうふうには思われるように。それは介護とかを通して交流が増えたから>そうですね、そうですね。<憎めないという感じではある>そうですね。というか、「とことん周りの人に恵まれている奴やないかい」と思いながら、「いろんな人に助けられて生活して」と思いながら。(②さん)	○							○											
	距離を置くことを決定づける出来事	今はもう積極的な交流をしなくなった親との間で、人として許せない出来事や現在の生活が乱れるためもうかわれないと思った出来事があったこと	私が、全部こっちに来ちゃうと困るから、あんまりかわらないようにしているといったのは、15年ぐらい前に父親が路上で倒れたことがあって、そのときに親族が近くにいないので手術ができなくて、緊急の。そのときに父親が私の連絡先をいってらしくて、そのときに10年ぶりぐらいに電話が知らないとこからかかってきて。…(中略)…そのとき私が仕事を休んで何回も行ったたりして、父親の実家にも連絡をして。そのときには(父の)お兄さんに来てもらって、入院のセットも何も無い状態で雇ったり、お金にルーズなもので保険証がないという感じから、保険証を取得するのに納めていない国民健康保険だとか、そういうのを知らない土地で何十年ぶりに会った伯父と一緒に、電車やバスに乗って役所を回ってというのもあった。(⑮さん)																			4	

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	総数				
別居親との交流のあり方		別居親とかかわりたいとは思わない	距離を置くことを決定づける出来事を経て、別居親とかかわりたいとは思わなくなり、面会交流を中断すること	(結婚の顔合わせの際に、参加すると約束していたのに) 顔合せの本当に数日前ぐらいに、突如「行きたくない」っていわれて、それで理由を聞いたときに、いろいろと家庭が不安定だったんで、そういうのが恥ずかしいとかではなく、「そういう冠婚葬祭とか、家族がらみの行事に行くのが面倒くさい」といわれてしまって。それを今から結婚する娘に対してそんなこといえる親がいるんだっていうふうに、本当にそこですごいあきれてしまって、じゃあもういいですって、そこから連絡はもう一切しませんがというふうになって、もう絶縁状態です。それが本当にもう大きい出来事です。(⑩さん)											○	○					○	○	4		
両親を捉える		周囲から聞く離婚理由等	両親からではなく、祖父母や周囲の大人から離婚の理由や離婚理由、別居親のことを聞くこと	じいちゃん、ばあちゃんと同じく同居してましたので、そのへんから聞いたりだとか。<お母さんが何かでつかい喧嘩しているらしいとか、手が出たらしいとか> 伝え聞いた感じですね。(⑫さん)																				5	
		別居親や両親への期待がなくなる	成長して当時の状況を理解したり、離別後の同居親の態度、面会交流や周囲からの話などを通して別居親や両親への期待がなくなっていくこと	<そのときまでは、お母さんといいたいという気持ちも強かったのですか> 強かったですね。…(中略) …病気があったんですけど、ふたを開けたら、私に大量の生命保険がかかっている、6個か7個かかっていたんですね。で、受取人が全部母になっていて、私はそれを全然知らなかったのですけれども。うーん、何というのでしょうか、それはそれですごい不思議に思っ、ショックはショックだったんですけども。逆に、それで母への何というのでしょうか、すごい執着ではないですけども、愛してくれ、愛してほしい、愛してほしい欲がようやく落ち着きましたね、それをみて。(⑥さん)			○	○		○	○														10
		親を反面教師とする	暴力、借金、虐待、飲み歩くなどをしてきた親を反面教師として、自分はそうならないようにしようと考えること	何か、そのまま父の影響で自分もどんどん悪い方向に進んでいかなかった。ちゃんとよくないこと(暴力)はよくないっていうふうになったのが、多分その離婚がきっかけだと思いますか。何でしょうね、反面教師じゃないですけど。何かそういうのはよくないというふうで考えるようになったので。その後としてはよかったのかなっていうふうで思いますね。(⑦さん)							○	○													5
		成長に伴う親事情理解の促進	成長し大人になることで、離別した両親の事情等をより理解できるようになること	「お父さんは頼りない」みたいな感じだし、結局、おばあちゃんのお愚痴もあつたんですけど。「結局おばあちゃんだよな」みたいな。「母の家のことはあまり重視してないし、自分の家のことばかり重視するしね」みたいな感じの愚痴を(母が) 聞いてるんですが、私としては「お父さんのほうが」という、気持ちというより見方があったので、(母が) 聞いてても、「ふうん」みたいな感じで聞き流してるところはありました。今思うと、確かにそういう祖母と同じく同居してたりというのは、そういう気持ちにもなるよねとは思います。(④さん)	○	○		○	○	○	○														12
		一人の人間としての両親や両親の関係を捉える	離別後の生活や面会交流、同居親や周囲から話を聞くこと、そして自身が成長したことなどを通して、一人の人間としての親を理解したり、両親の関係を捉えられるようになったりしていること	実は、自分が結婚をして子どもを産むまでは、ずっと母のことは嫌だったんですよ。何となくは理解できてたけど、結局、子どもを置いて出ていったひどいお母さんみたいな。どうせ私のことは愛してなかったんでしょ、要らなかったんでしょっていうのが強かったんですけど、1人目を産んだときに…(中略) …当時を振り返ることができて、今思えば、私のなかでは優しいお父さんだったけど、例えばどこか出かければ、競馬の時間になるから早く帰るぞとか、土日はテレビでゴルフをみるか、朝からゴルフに行っちゃって、やっぱり今思うと、母を放ったらかしにしていた父しか思い出せないんですよ。…(中略) …お母さんがすごく我慢してたり、女としての幸せがなかったんだろうなというのがわかる分、自分のお母さんとしては「何でよ」とか「もう一度会って話してみたらいいな」という思いがありつつ、同じ女としては、「そりゃあ離婚して逃げたくなるよね」とか「きつとお母さんもどっかでは会いたいと思ってたんだろうな」とか、そういう一歩踏み込んだ感情に思いを馳せるというか、そうすることはできるようになりました。(⑬さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
現在の離別に対する思い		なぜ離別したのか納得する	一人の人間としての両親や両親の関係を捉え、なぜ離別したのか納得すること	幼い頃の両親のあの状態がずっと続いてたとしたらというのを考えると、いやー、確実にいい方向には向かわないだろうなみたいな感じの思いがあるから、おそらく、今、振り返って、あー、もう別々になってよかったんだっていう感じがします。(⑧さん)	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	
		今、家族が平和であること	いろいろなことがあったが、今は一人ひとりの家族が安定して生活できていること	別れてからのほうが、今お互い伸び伸びと楽しくやっているので、今も仲が悪いわけではなく、そんな頻りに連絡をとりあったりっていうことはないですけど。なので今思えば、「あれでよかったんじゃないかな」って思います。<ご両親のことを考えると、たぶんそうだと思うんだけど、ご自身の気持ち的にも、まあ、それでよかったかなっていう感じなんです> はい。いららしている母をみているのもちょっと嫌だったっていうのもあって、生活するなかにも何もしない父がいるっていうのもすごく嫌でした。(①さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
		離別してよかった	両親の関係性や当時の状況を理解し、離婚してよかったのだと、離婚を肯定的に捉えるようになること	<ご両親の別居とか離婚がよかったなと思っ、一番の理由というのは何か> さっきの俯瞰でみての話とつながるんですけど、性格形成のときに、これ以上壊れていく家族をみせられてもね、きついなんでっていうのがあって、ばつと別れて、こっちで、逆に前向きに頑張っていく感じになるじゃないですか、これからまた土台を固めていくみたいな。そのほうが前向きやから、子どもにとっちはいいかなと思うんですよ。だから、離婚してよかったと思います。(⑯さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(2) 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に否定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス

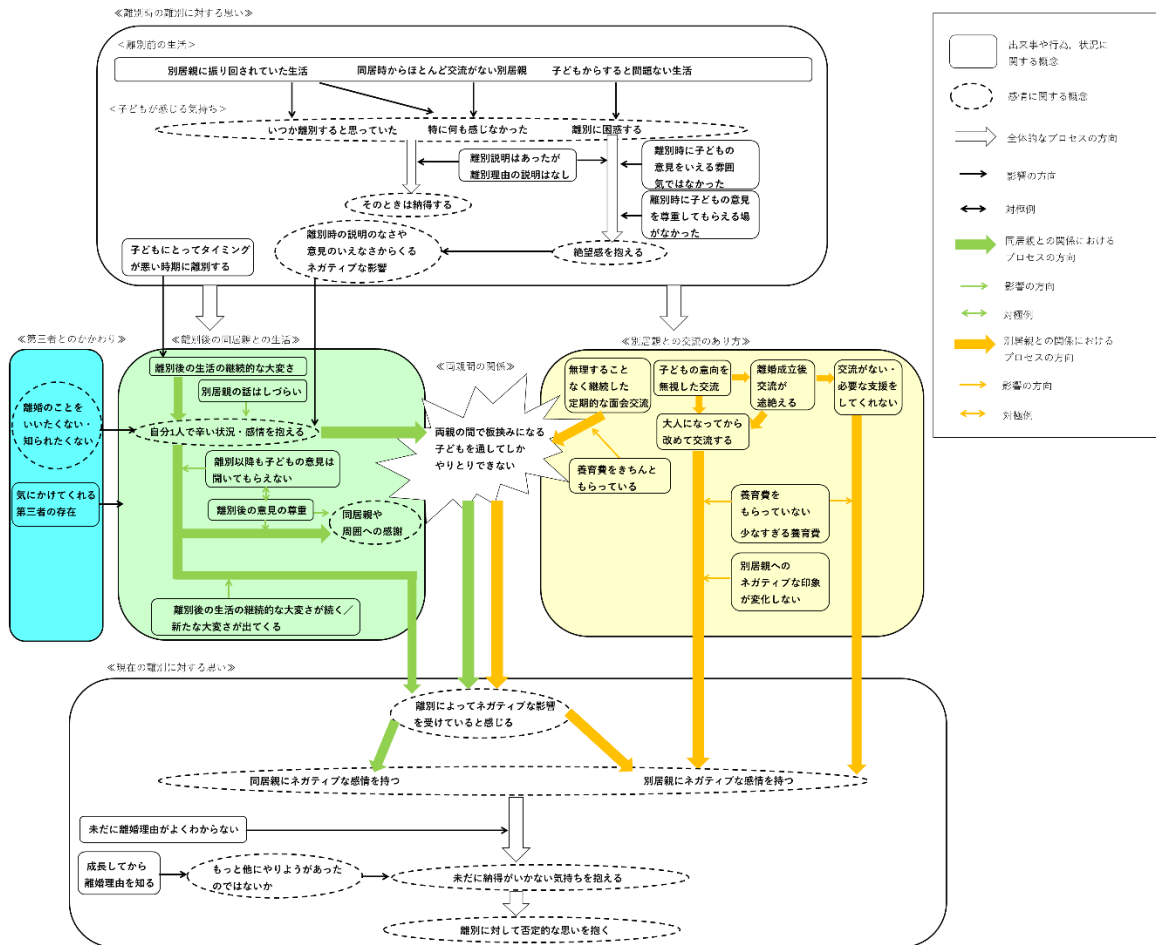
父母の別居および離婚に対して否定的な思いを抱いている群6名（男性：4名、女性：2名）の調査対象者の一覧は表5のとおりである。

〔表5〕 父母の離別に否定的な思いを抱いている群（6名 男性：4名、女性：2名）

対象者	性別	年齢	両親の離別を体験した時期	調査対象者が認識している離婚理由	同居親	面会交流と中断の有無	養育費の有無
⑰	男性	30	別居：11歳、離婚：14歳	不明（母の金遣いの荒さ？ 父の前家庭とのトラブル？）	母	離婚までは直接交流あり。離婚後中断。介護をきっかけに再開。	有（継続的でない）
⑱	女性	31	別居と離婚：中学2年生	父の独立による引越	母	年1回誕生日プレゼントが届く。大学および結婚時に1回ずつ直接交流。その後直接交流はないが、写真共有アプリをとおしてたまに交流あり。	有
⑲	男性	33	別居と離婚：10-11歳	父の開業に伴い夫婦喧嘩が増えた	母	当初からあり。18歳まで月1回の直接交流。長期休暇時は宿泊あり。中断なし。	有
⑳	女性	37	別居：7-8歳、離婚：不明（おそらく大学生の頃）	金銭感覚のズレ、父の子育て不協力和不倫	母	当初なし。10歳と12歳頃に直接交流あり、その後は交流なし。	有（裁判で決定した額よりは低い）
㉑	男性	34	別居と離婚：6-7歳	父の家事育児不協力和それによる母の精神的不調	母	当初からあり。高校生頃まで月2-3回母も含めて直接交流と、長期休暇時に父子のみで直接交流（宿泊あり）。大学生以降は年に数回の直接交流。中断なし。	有
㉒	男性	37	別居と離婚：6歳	父の借金、金銭トラブル	母	別居～離婚までの数か月、月1-2回電話。離婚後交流なし。	なし

調査対象者から得られたデータを M-GTA によって分析した結果、生成されたモデルを結果図として図2に示し、結果図から作成したストーリーラインを述べる。

〔図2〕 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に否定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス



➤ ストーリーライン（カテゴリーは《》、カテゴリーを構成するサブカテゴリーは<>、概念は太字ゴシックで示す。カテゴリーおよび概念の内容説明は後述する）

<離別前の生活>として、**別居親に振り回されていた生活**を送っていた子や、**同居時からほとんど交流がない別居親**であると認知していた子は、離婚に対して**いつか離婚する**と**思っていたり**、**特に何も感じなかった**という経験をしていることが多い。一方で、離別前に**子どもからすると問題ない生活**を送っていた子は、**離別に困惑する**経験をしている。

離別にあたっては、**離別説明はあったが離別理由の説明はない**場合が多い。**離別に困惑**していた子は、**離別時に子どもの意見をいえる雰囲気ではなかった**、あるいは**離別時に子どもの意見を尊重してもらえなかった**ことにより、さらに**絶望感を抱える**ようになる。また、**離別時の説明のなさや意見のいえなさからくるネガティブな影響**を長期的に感じるようになる子もいる。一方で、**いつか離婚すると思っていた**、**特に何も感じなかった**子は、離別に対して**特段の拒否感情はなく**、**そのときは納得**して離別を受け入れる。**子どもにとってタイミングが悪い時期に離別する**場合は、その後の進路や生活に**悪影響を及ぼす**ことが多

い。

《離別後の同居親との生活》において、皆**離別後の生活の継続的な大変さ**を経験する。別居親の話は**しづらい状況や離婚のことをいたくない・知られたくない**という気持ちから、**自分 1 人で辛い状況・感情を抱えること**になる。離別以降も**子どもの意見は聞いてもらえない状況が続くと、離婚によってネガティブな影響を受けていると感じるようになる。**

離別後に**意見を尊重**してもらえる機会が蓄積されると、**【同居親や周囲への感謝】**に至る。しかし、その場合も**離別後の生活の継続的な大変さが続く／新たな大変さが出てくる**という状況が解消されないため、**離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**。また、《第三者とのかかわり》においては**気にかけてくれる第三者の存在**に支えられていた人もいるが、**離婚のことをいたくない・知られたくない**という気持ちから、離別や家族関係の悩み、自分の思いを吐露するには至らない。

《別居親との交流のあり方》では、**無理することなく継続した定期的な面会交流が続く、子どもの意向を無視した交流が続く、交流がない・必要な支援をしてくれないの 3 パターン**がある。また、別居当初は交流があったが**離婚成立後交流が途絶える**経験をしている子もいる。**交流がない・必要な支援をしてくれない場合、養育費をもらっていない、取り決めよりも明らかに少なすぎる養育費しかもらっていない**といった理由により**別居親にネガティブな印象を持つ**。大人になってから改めて交流する経験をしている子については、養育費が充分でなかった（**養育費をもらっていない・少なすぎる養育費**）ことや、再会した別居親への**ネガティブな印象が変化しないことにより、別居親にネガティブな印象を持つようになる**。一方で、**無理することなく継続した定期的な面会交流が続いた子は、養育費をきちんともらっている**こともあり、別居親との交流自体に**ポジティブな感情を持つ**。しかし、面会交流やその際のやり取りを通して、**両親の間で板挟みになる状況や、両親が子どもを通してしかやり取りできない状況を繰り返し経験し、それらが改善しないために離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**。さらに、**両親の間で板挟みになる・子どもを通してしかやり取りできない状況を改善できない両親（同居親・別居親それぞれ）に対して、ネガティブな感情を持つようになる。**

このように、子は同居親と別居親のいずれか、あるいは両方に**ネガティブな感情を持つようになり、さらに未だに離婚理由がよくわからなかったり、成長してから離婚理由を知ること**はできたもののその離婚理由に納得できない（**もっと他にやりようがあったのではないか**）と感じてしまうことにより、離別に対して**未だに納得がいかない気持ちを抱える**。それにより、**離別に対して否定的な思いを抱くに至る。**

➤ カテゴリーおよび概念の内容説明

① 《離別時の離別に対する思い》



子どもが持つ、離別時の離別に対する思いを表すカテゴリーである。＜離別前の生活＞では、暴力や借金があり、子どもや家族全体が別居親からネガティブな影響を受けていた状況を表す**別居親に振り回されていた生活**、仕事が忙しい・生活時間帯がずれているなどの理由により別居親と交流がない状況を表す**同居時からほとんど交流がない別居親**、両親間の夫婦仲がどうであったかはさておき、子ども自身は同居親や別居親に大きな不満はなく生活にも支障がなかった状況を表す**子どもからすると問題のない生活**の3つの概念が得られた。なお、これらの概念は明確に線引きできるものではなく、別居親が家にいる時間が少なく、ほとんど交流はない状況だけでも**子どもからすると問題ない生活**で、子ども自身も別居親のことを好きである場合などもあった。

＜離別に対して子どもが感じる気持ち＞は、＜離別前の生活＞をどう認知していたかに影響を受ける。**いつか離別すると思っていた**は、別居親の暴力や両親間の喧嘩を目の当たりにして、いつか決定的な別れの瞬間がくるだろうということを子どもが予感していたことを表す概念である。また、それほど明確に予感していなかったが、離別すると聞いても特に何も感じない、否定的な感情も肯定的な感情も強くわからず、しいていえば「へえ、そうなんだ」と思うくらいであった状況を表す**特に何も感じなかった**という概念も得られた。**離別に困惑する**という概念は、離別に対して驚いたりショックを受けたりとても悲しんだり、離別に対してネガティブな感情を抱いたことを示す概念である。この中には「何か取り返しのつかないことが起こっている」「すごいショック」といった語りが含まれており、子どもからすると、離別は青天の霹靂のように感じられていた。また、離別時の子どもの年齢によっても、どこまで両親の不仲を深刻なものとして捉えているかが異なっていた。一般的に年齢が高い子のほうが、両親間の不仲から離別の可能性を予期していることが多く、年齢が低い子の場合、両親の不仲を感じ取っていても「離婚って何かよくわからない」「離婚するほどまでとは思っていなかった」など、離別の現実的な可能性は予測しておらず、その分困惑の度合いが大きいことが多いようであった。

**離別時に子どもの意見をいえる雰囲気ではなかった**は、離別説明の場が非常に重い雰囲気であったなどの理由により、子どもが意見表明をしたり質問をしたりしにくい状況であったことを表している。特に年少の子の場合、その場の雰囲気に圧倒されて心配や不安を適切に言語化できなかつたり、離別することでどのようなことが起こるのか想像がつかないゆえに質問ができなかつたりすることもある。**離別時に子どもの意見を尊重してもらえなかった**は、少なくともどちらか一方の親に「離婚してほしくない」などの思いや意見は伝えられたが、親がとりあってくれない・話をきちんと聴いてくれないと感じられる状況を表している。そして離別に対して子ども自身は何もできない状況に対して、**絶望感を感じる**ほどに追いつめられていた。このように、一生懸命訴えてもどうせ聞いてもらえない、いっても無駄だ、という経験が刻み込まれることにより、その後の人生においても「肝心な時に感情をぶつけられない」「自分の意見を引っ込めてしまう」など**離別時の説明のなさや意見のいへなさからくるネガティブな影響**を感じ続けていることもあった。

一方で、ある程度年長で離別を予測していた場合や離別に対して特段の困惑を感じなかった場合など、いったん離別を受け入れていた子もいた。この状況を表しているのが**そのときは納得する**という概念である。しかし、その後の生活のなかで大変な状況が続くことによって、後々離別に対して否定的な思いを抱くことにつながっていく。

**子どもにとってタイミングが悪い時期に離別する**は、離別のタイミングが子どもに及ぼす悪影響を表す概念である。受験など進路の大切な時期に離婚の話が出てきて、両親の喧嘩に気を取られて受験勉強ができずに進路（ひいてはその後の人生）に悪影響が及ぶ場合や、幼少期に離別による絶望感を味わったことで「素直に成長できなかった」「絶望感がずっと残ったまま大人になった」と感じている場合などが含まれている。

## ② <第三者のかかわり>

これは親戚や友達、先生、コミュニティなどと、子どもを取り巻く周囲とのかかわりを示すカテゴリーである。父母の離別に対して否定的な思いを抱くに至った群では**離別のことをいたくない・知られたくない**という気持ちを強く持っている人が多く含まれていた。本研究対象者は10年以上前に離別を経験している人が多いためか、「当時は、離婚はそんなにカジュアルじゃなかった」「ほかの家族と違うっていう気持ちがずっとあった」などと語られることが多く、離別に対する社会の偏見を敏感に察知していた。さらに周囲から「親が離婚しているからかわいそう」と思われないようにするため、離別のことを隠し通そうとしている子もいた。祖父母や仲のいい友達、友達の家族など**気にかけてくれる第三者の存在**に支えられているという語りも得られたが、その第三者に家族関係の悩みを話したという経験や、それによって救われたという経験は語られなかった。

## ③ <離別後の同居親との生活>

このカテゴリーは、離別後の同居親との生活の状況を表している。**離別後の生活の継続的な大変さ**は、離別後経済的に厳しい状況が続いた、離別時に感じた寂しさや不安、絶望感が解消されずそれらを抱えたまま日常生活を過ごさざるを得なかった、父母の離別をきっかけに同居している家族の関係も不安定になった、といった状況を表している。上述のとおり「大変さ」といってもその内情は多様だが、少なくとも離別前の生活と比べても何かしら子どもにマイナスの影響が及び、それが長期間続いていた。**別居親の話はしづら**いは、離別や別居親の話がタブーになってしまう状況などを表している。こういった状況も影響して、**自分1人で辛い状況・感情を抱える**ようになっていた。親が子どもへの配慮をしてくれないので1人で頑張らざるを得ない場合もあれば、同居親も大変なことがわかっているため「自分1人で何とか頑張ろう」と頑張っている場合もあった。

同居親との生活においては、離別以降も親の意見が優先となってしまう状況を表す**離別以降も子どもの意見は聞いてもらえない**という概念と、現実的にできないことは多々ある

ものの親が子どもの意見を尊重しようという態度を示してくれる**離別後の意見の尊重**という概念がある。後者のように意見を尊重してもらえる体験が蓄積されていくと、子どもは**同居親や周囲への感謝**の気持ちを抱くようになっていた。一方で、生活上の大変さは解消されずに続いている場合が多くみられた。**離別後の生活の継続的な大変さが続く／新たな大変さが出てくる**は、子ども自身が感じる大変さが長期間継続していたり、成長することで新しい問題が出てきたりする（別居親の介護を担わされるなど）ことを示している。この影響もあり、**離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**に至っていた。

#### ④ <別居親との交流のあり方>

このカテゴリーは、別居親との交流のあり方を示している。**無理することなく継続した定期的な面会交流**は、子ども自身が楽しいと自然に感じられる交流が定期的に継続していたことを示す概念である。この場合、養育費はきちんと支払われている（**養育費をきちんともらっている**）ことが多く、子どもと別居親のいい関係が保たれていた。

**子どもの意向を無視した交流**は、別居親のしたいことが優先され、子どもからすると楽しくない／しんどい思いをする交流を表している。**離婚成立後交流が途絶える**に示されるように、別居時は何かしら交流があったものの、離婚が成立したと思われる時期から交流が0になる経験をしている子もいた。**交流がない・必要な支援をしてくれない**は、離別後交流がほぼない状態で、子どもにとって必要なタイミングで必要な支援をしてくれなかったことを表している。ただ交流がないだけではなく、求めたときに支援が得られなかったことにより、さらに別居親へのネガティブな印象が強まっていた。このプロセスには養育費がない・少なすぎる（**養育費をもらっていない・少なすぎる養育費**）ことも影響を与えていた。**大人になってから改めて交流する**は、別居親の介護等の理由で、大人になってから交流が再開することを示した概念である。しかし、この場合も子どもの意向は汲み取られず、別居親側のペースで物事が進むことによって、別居親へのネガティブな印象は変わらず（**別居親へのネガティブな印象が変化しない**）、**別居親へネガティブな感情を持つ**に至っていた。

#### ⑤ <両親間の関係>

離別後の両親の関係を示すカテゴリーである。**両親の間で板挟みになる・子どもを通してしかやり取りできない**は、離別後も両親間の葛藤に子どもが巻き込まれ続けてしまう状況を表している。滞っている養育費を催促してくるよう頼まれるなど、両親間のメッセンジャーのような役割を担わざるを得ない状況が続くことによって、子どもはだんだんと**離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**ようになり、ひいては同居親、別居親双方にネガティブな感情を持つようになっていた。

#### ⑥ <離別に対する現在の思い>

離別に対する子どもの現在の思いを示すカテゴリーである。親への思いとしては、**同居親にネガティブな感情を持つ、別居親にネガティブな感情を持つ**という概念が得られた。ここ

でいう「ネガティブな感情」は、「もうできるだけかわりたくない」と親を忌避するようなものから、親子として日常的に交流しているものの、ふとした瞬間に親の悪い面ばかりが目についてしまいイライラしてしまうといったものまでを含んでいる。本群に含まれる対象者は、同居親に対しては感謝を感じている人もいたが、別居親に対しては皆何かしらのネガティブな感情を持っていた。

離別理由については、**未だに離婚理由がよくわからない、成長してから離婚理由を知るの2パターンがあった。**成長してから離婚理由を知った場合でも、それで納得できずにもっと**他にやりようがあったのではないか**と感じてしまうことによって、離別に対しては**未だに納得がいかない気持ちを抱えていた。**そして、離別に納得できておらず、かつ離別によって生活が大変な状況が長期的に続いたことによって（人によっては現在も大変さが続いていることによって）**離別に対して否定的な思いを抱くに至っていた。**

〔表6〕 父母の離別に否定的な思いを抱いている群の概念表

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	概念の定義	具体例	⑰	⑱	⑳	㉑	㉒	総数	
離別時の 離別に対する思い	離別前の 生活	別居親に振り回されていた生活	同居時は別居親の暴力（精神的なものを含む）、身勝手なふるまいなど別居親に振り回されていた生活を送っていたこと	まあ、物心がついたときからなのですが、何か保育園で両親の絵とか描くじゃないですか。そのときのテーマが父親の似顔絵を描かなければいけなくて、ちょうどそれが父親の誕生日だったのですよ。それを描いて出したら、目の前で破られて。<えっ、目の前で破られて>そうそう、こんなガラクタ要らねえよみたいな感じで破られて、何かもうそこからすぐ父親が。<嫌いになってしまった>はい。<それは嫌いになりますね>そこから父親との関係性が悪化してしまっただけという感じですね。（⑱さん）	○	○			○	3	
		同居時からほとんど交流がない別居親	同居時は別居親との交流がほとんどなく、関係性が薄いこと	やっぱり自分の幼い頃に父がいなくなったので、もうあまり自分の人生のなかで父の存在というのがなくなっていたから、どうでもよくなったというか、今いなければ、それを振り返ってもしようがないというふうに、関心がわかなくなりました。（⑳さん）				○	○	○	3
		子どもからすると問題ない生活	子どもからすると特に問題のない安定した生活を送っていたこと	そういう家族のイベントみたいなものはほとんどなかったですし、なので仲がいいという認識はあまりなかったですけれども、ただ、もっと仲が悪いというんですか、一緒に住まないぐらい仲が悪いという状況であることを、その場で初めて理解したという感じですね。（㉑さん）			○		○		2
	子どもが 感じる気 持ち	いつか離別すると思っていた	同居当時の両親の関係性、家族の関係性から、いつか離婚すると思っていたり、別居に至っても仕方ないと思っていたりしたこと	離婚した当時は、とうとうこういふふうになってしまったかぐらいに思っていました。もともと、あまり仲はそこまでよくはなかったようにみえていたんで、運かれ早かれ、こういふふうになっちゃうのかなと思っていました。（⑰さん）	○	○	○				3
		特に何も感じなかった	離別すると聞いても、特段肯定的な感情も否定的な感情もわかかったこと	僕、まだ6歳やったんで、正直離れ離れになるっていわれて、えーっとは思ったんですけど、すごい悲しみみたいな感じはなかったですね、そんなときは。（㉒さん）	○			○		○	3
		離別に困惑する	両親の突然の離別に困惑したり、両親がそろっていない状況に悲しさを感じたり、離別しないでよかったと思っていたこと	ただ、ただ悲しかったですね。とても悲しくて、泣いたというのを覚えていますね。<そうなんです。会えないことはないけれども、今までよりは頻度も減るようなことを>はい、変わっちゃうようなことを。今までは、当然その制約みたいなのは何もなかったのですけれども、これからはいつもと同じような感じで会うことができなくなっているということで、とても悲しくなりました。（㉑さん）		○	○		○		3
	離別時に 子どもの意見 をいえる 雰囲気では なかった	離別説明はあったが、離別理由の説明はなし	父母が離れて暮らすことやどちらかが出ていくことなど、離別することの説明はあったが、離別理由に関する詳細な説明はなかったこと。離別に関してもあいまいな説明のみだった場合もある	経緯は大人になってから聞いて、当時はよくある、別れること、離れることになるから、お父さんとお母さん、どっちと一緒に住みたいという、もう、いきなりいわれたんで。何でこうなったかという説明なかった。（㉒さん）	○	○	○	○	○	○	6
		離別時に子どもの意見をいえる雰囲気ではなかった	離別説明の場の雰囲気重い、親が意見を聞いてくれるような雰囲気ではないなどの理由により、離別に関して意見をいえなかったこと。子どもの発達段階の影響もあり、離別の影響を見通せなかったり、言語化ができなかったりする場合もある	その時点で、離婚ということが一体何なのかというのがまずわかっていないですし。会えない、会う以外の思いつくことが、変な話ですけども、生活上の例えばお金の心配であるとか、例えば懇談会があるのでお父さん来てくださいとか、例えば運動会があるのでお父さん来てくださいとか、そういうイベントってあると思うのですけれども、そういうお父さんがいるイベントとか、これからの生活でお父さんがいないことで困ることというのがまず理解できなかったんで、そういう部分を聞くことはなかったですね。（中略）厳かというんですか、すごく重たい雰囲気だったので、何かいわれても安心感を感じないというんですか、そういうのはありました。（㉑さん）	○			○	○		3
		離別時に子どもの意見を尊重してもらえる場がなかった	離別しないでほしいなどの意見は伝えたものの、親がそれを尊重してくれない、向き合ってくれないと感じていたこと	特に自分は父が好きだったので、離婚はしてほしくなかったのですけれども、ただ母が、もうあの人は、何というのですかね、話合いができないから、もう無理なのだの一点張り、子どもの自分が離婚をしてほしくないという話をしても、一切受け付けてくれないような態度だったり、話の持っていく方を母はしていました。（⑱さん）					○		1
		そのときは納得する	完全に納得するわけではないものの、そのときは両親の離別を受け入れること	当時は父親に脅えてたところがあったんで、あまりかかわりたくないと思っていたので、特に説明がなくても平和が訪れるならいいのかなみたいな、そんなふうには思っていました。（⑰さん）	○	○		○		○	4
	絶望感を抱える	離別してほしくないという思いにもかかわらず離別が避けられないことを知り、絶望感を抱えること	絶望感ではないですが、やはり自分がまだ小学生のときは、そこまで周りに親が離婚している家庭も少なかったと思うのですけれども、やはりちょっとその学校の友達とかに知られたくないという思いが一番ありまして、何かそこがちょっと周りにばれるのではないかなというように、何か恐怖というか、そういうもので、日々、学校に行っていたというのは記憶していますね。（⑱さん）					○		2	

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	総数
離別時の 離別に対する思い		離別時の説明のなさや意見のいへなさからくるネガティブな影響	離別時に説明がない、もしくは離別は子どもの責任ではないという説明がなかったり、意見を聞かずに同居親が決まったことからネガティブな妄想が膨らんだり、不安になったりしたこと。成長するにつれて、離別によるネガティブな影響を受けていると感じようになることもある	やはり母が父を拒否していたというのを察して、ちょっと自分も、何というのですかね、自分の意見、離婚してほしくないというような自分の意見をいう、素直に成長できなかったなというのがすごいありますね、大人になってからも。＜素直に成長できなかった＞相手の顔色をうかがうのが強くて、自分の意見はなかなかいうことが苦手というか、自分の意見をいえないに育ってしまったというのがありますね。通らないのではないかとこのもあって、自分はこう願っているのだけれど、それは絶対になかないものだよという、何か刷り込みが頭のなかにあるので、何か周りに協調してしまっていることが多いですね、何事も。そこらへんを何か深掘りしていったときに、やはり小さい頃からそういうふうにしてきた癖が、ずっとついてきちゃっているのかなというのを、大人になって思うようになりました。(⑰さん)	○		○	○	○		4
		子どもにとってタイミングが悪い時期に離別する	幼くて離別についてちゃんと理解できない、受験と離別が重なるなど、離別時期の影響によって悪影響が大きくなったと感じられていること	高校受験で志望校を丸ごと変えなければいけなくなってしまったので。＜そうだったのですか＞そうですね。それが一番大きい要因です。＜それは、ちょっと費用とかの問題でということですか＞そうですね。公立を受けたりですか、あとは、ちょっとそういう部分もあったりですか、ので、変えなければいけない。＜変えなければいけなくなったというのが、一番影響があったということですね＞そうですね。というのと、両親が毎日喧嘩しているのうさくて、全然勉強できなくて、ちょっと成績も下がってしまったというも結構ありますね。(⑱さん)			○	○	○		3
離別後の 同居親との生活		離別後の生活の継続的な大変さ	離別後経済的に厳しい状況が続く、留守番が多くなる、離別時に感じた寂しさや不安を抱え続ける、離別をきっかけに同居家族との関係も不安定になる、など、離別したことで生活上に何らかの大変さが現れ、それが継続的に続いていくこと	家族がバラバラになってしまうという、そういうショックの強さみたいな、インパクトというのがすごかったですね。それがすごく嫌な気持ちという、悲しい気持ちになって、寂しい気持ちになってみたいなのは思ったところがあったので、そういうのは離婚ということによって受けた一番大きなダメージですね。あとは、やはり小さい頃の寂しさみたいなのはありますね。先ほどいったように、家に帰っても誰もいないのが普通になってしまったということ。それもだんだん慣れてきたら、我慢できると思いますか、小さい頃と捉え方が変わってきたので、ある程度大きくなったら、別に帰っても誰もいないことが悲しいわけではないのですけれども、やはり最初の頃というのはやはり悲しかったですね。なんとなく家に誰もいないというのは、すごく寂しい気持ちでした。(⑳さん)	○	○	○	○	○	○	6
		別居親の話はしづらい	離別後の生活で別居親の話がまったく出ないなど、離別や別居親の話をしづらい雰囲気は漂っていること	私自身はあまり父の存在が自分のなかになかったから、あえてその話をする意味もないというか、母親がきつと嫌がるというのわかっていたし、なのでそれはしなかったです。(㉑さん)					○	○	2
		自分1人で辛い状況・感情を抱える	離別やそれに伴う生活上の辛い状況や感情を、誰にもいえずに1人で抱えること	金銭面の、生活もそうですし、小学校、その震災で引越して母親の実家に行ったんですけど、よくある転校生いじめに遭ったんですけどね、でも、母親みて、めっちゃ大変な思いしてるんみてると、仕事詰めでね。で、その、いじめられてるのも、まず、絶対いいたくないです、子どもながらも。そんな記憶はありますね。もう、困らしたくないし、で、その、引きこもりもなくて、耐えられる小学生やったんで、もう、家帰ったら何事もなく過ごしてたんですけど、やっぱり母親だけやったら、はけ口じゃないですけど、その相談したいところとか、やっぱり我慢しちゃうんで、余計、頑張ってる姿みちゃってるんでね。迷惑かけたくないっていうのもあるし、学校も楽しくない状態で行ってるっていう態度も、なかなかみせれなかったんで。だから、やっぱり、ひとり親になると、そういう大変さが出てくるんで、子どもって、めっちゃやめますね、今、思えば。だから大人になっても、すごい気遣いじゃないですけど、顔色をよくみたり。(㉒さん)	○	○	○	○	○	○	6
		離別以降も子どもの意見は聞いてもらえない	離別以降も、子どもの生活に影響を与える内容を決める際に、子どもの意見を聞く場はなく、いったとしても尊重してもらえなかったこと	母親も、いったつもりはないけど金ほらうみたいなの、そんなスタンスで。あと、自分の子どもは基本的に消耗品というか、ひどいいい方をする、ATMではないですけど、そういう目的で子どもを生んだみたいなんで、だから、あまり母親のなかでは、ひどいことをしたというふうには思っていないですね、多分未だに。(㉓さん)	○		○				2
		離別後の意見の尊重	離別後、不安なことを相談できたり、自分の生活や人生にかかわることに関して意見を述べた時にその意見を尊重してもらえたこと	ずっとスポーツできたんで、体育教師の免許とるために、教職のある大学を選んで行って、私立しか駄目やったんですけど(中略)でも全然喜んでくれて、奨学金借りましたけど、学費って何百万かかるじゃないですか、大学って。年間の。下宿、アパート暮らしやったんで、そっちに奨学金使っていく感じで、ほぼ学費なんかも母親が用意してくれて、それはすごいなと思って、多分、お金ずっとためてて、だから、そこらへんで、高校ぐらいからその我慢させられたっていう記憶ないです。(㉔さん)		○		○			3
		同居親や周囲への感謝	成長して両親が離婚することになった経緯や生活することの大変さを理解し、同居親や助けてくれた周囲への感謝の気持ちが湧いてくること	小学校高学年ぐらいから活発なんで、サッカーやってたんもそうですし、キャッチボールとかも母親が相手してくれてたんですよ。だから多分合わせてくれてたんですよ、ほかの友達やったら、父親で激しく遊べるんですけど、それを母親が、下手くそながらにやってくれてた記憶すごいあるんですよ。中学校行っても、陸上部入ってたんですけど、練習とかも付き合ってくれたり、父親代わりじゃないですけど、多分、あったんでしょうね、やってあげなっていうの。それがうれしかったですね。うれしいし、ようやってくれてたなあと思います。(㉕さん)					○	○	2

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	総数
離別後の同居親との生活		離別後の生活の継続的な大変さが続く／新たな大変さが出てくる	離別による生活への悪影響が数年以上にわたって続いたり、成長につれて新たな大変さが出てきたりすること	姉がかなりショックで精神的におかしくなっていたのとか、結構私もそれで苦労した、家族全員が苦労したんです。それがあったから、そう思うと、根本的には父親が原因ではあったので、そのことに対して、今となっては惜しいとか恨む気持ちもあるけども、子どものときにはそれは触れちゃいけないとか、考えてもいけないというふうに思っていたので。(㉒さん)	○	○	○	○	○	○	6
第三者とのかわり		離婚のことをいいたくない・知られたくない	離別したことを知られることで、周囲からの今までと異なるようにみられるのではないかと感じ、離別をできるだけ隠そうとすること。社会からの偏見を感じとっていることもある	マイナスイメージ、ちょっと自分も、その小学校3、4年生のときは、結構明るいタイプだったのですが、そこから一気に、何というか、「あいつんち、離婚してるんだぜ」というふういうわさとかが広まる、ばれるのじゃないかというのがすごい恐怖でした。(㉑さん)			○			○	2
		気にかけてくれる第三者の存在	祖父母や近所の人、学校の先生、友人、友人家族など、よくしてくれる第三者の存在があったこと。しかし、離別に関する悩みや家族に関する悩みを打ち明けるには至っていない	おじいちゃんとおばあちゃんはずっと。母親の代わりにおばあちゃんが料理してご飯食べさせてくれて、家事もやって、おじいちゃんは父親の代わりのように遊びに連れていってくれてとか、いろんなことを教えてくれてという役割をしてくれてたので、それは祖父母のいない普通の母子家庭に比べたら、そこは幸せだったと思います。＜自分の辛い気持ちみたいなを話す相手はいましたか＞それは誰にも話せなかったですね。＜おじいちゃんやおばあちゃんにも話せなかった＞それは悲しませちゃうと思ったし、ほかのまったく他人とかにも何かそれで自分が不利というか、ほかよりも劣っているというところをさらけ出すのも何か嫌だったし、そこは話さなかった。(㉒さん)			○	○	○	○	4
両親間の関係		両親の間で板挟みになる／子どもを通してしかやりとりできない	両親の葛藤が高い状態が続き、子どもが板挟みになったり、子どもを介してしか話ができない状況が長く続いていること	ただですね、父が養育費はちゃんと払ってくれてはいたのですけれども、やはり遅れがちになってきたときとか時期がありまして、そのときに母親から、兄弟のなかで自分だけ、ちょっと父と仲がよかったというのもあったので、母親からではなくて、私から父に対して催促をかけるようなことを命じられたのが何度か。＜それが嫌だったとか、そういうことですね＞そうですね、当時は拒否していたのですが、何かそこを強制させて、やらされていました。＜それはかなりいいにいですよね、お父さんに対しては＞そうですね。＜だけれど、ちょっといわないと、絶対いってこいみたいな感じでお母様にはいわれていたという感じですか＞そうですね、何で俺だけなんだかといってたのですが、あんたしかいえないからとか、いろいろな理由をつけて押しつけていました。(㉑さん)			○		○		2
別居親との交流のあり方		無理することなく継続した定期的な面会交流	離別後に、自分が無理することなく、定期的な面会交流が継続していたこと	いろいろなところに連れていったりはしてもらったので、父との関係は良好だったわけで、そこまで何かマイナスな記憶というのはないですね。＜マイナスな記憶はなし＞はい。＜何か交流にいくときに、お母様との関係がちょっとぎく／やくするとか、そういうこともなかったわけですか＞そういうのはなかったですね。＜ではお母様も、もう行っておいでみたいな感じで＞まあ、そうですね。(㉑さん)			○		○		2
		子どもの意向を無視した交流	面会交流が子どもの意向に沿ったものではなく、親のタイミングやしたいことに付き合わされているような交流だったこと	父親が山が好きで登山が好きだから、それに付き合わされて、何回か山は登ったりとかはしました。多分それが面会交流にあたる。＜それは年1回とか、年2、3回ぐらい＞年に2、3回るときもあれば、毎月登らされているという。＜毎月登らされている。毎月登るのは大変でしたね＞はい。＜㉑さんは別に登山が好きなのではない＞あまり好きじゃないですね。事故に遭ってそのまま事故死とかも嫌だったので、どちらかというと嫌いです。＜嫌だった。だけど、お父さんが来いというから、しょうがないから行ってあげたみたいな＞後々何かあるかわからないので怖かったというのが、当時ありました。(㉑さん)	○	○					3
		離婚成立後交流が途絶える	別居期間中は交流があったものの、離婚が成立したと思われる以降は交流が途絶えること	電話のみでしたね。＜電話はどれぐらいあったんですか＞でも、めっちゃ少なかったです。最初は引越して、別居してから月に1、2回あって、3か月、電話だけしてたのは。3か月後ぐらいには、もう全然なくなりましたね。母親が拒否してたのかわかんないですけど、僕自身もしゃべりたい、1か月目ぐらいはお父さんと電話せえへんみたいな聞いてたんですけど、母親に。でも、3か月、4か月たったら、もう、そういう習慣もなく、なくなりましたね、電話も。(㉒さん)	○					○	2
		交流がない・必要な支援をしてくれない	離別以降別居親とほとんど交流がなく、必要なときに必要な支援もしてくれなかったこと	それ（養育費）はとも少ない金額だし、何も。それで払っているって自分で満足されてほしくないなとは思って、それも嫌でしたね、そんな少ない金額が来るっていうことが。＜少ない金額でそういう気持ちになられるぐらいだったら、払わないでくれたほうがいいという感じ＞それはありました。＜ちゃんと払うんだったら、払ってほしかったということですね。わかりました。ご両親の関係性は、もう別居してからは本当に少ないというかまったくくないです。そうですね。でも、やっぱり姉が大変なときとかも、電話しても出てくれないとかいうのは聞いていたので、あまりなかったと思います。(㉒さん)				○		○	2
		養育費をきちんともらっている	別居親が養育費をきちんと払ってくれていたこと	しっかりお金をもらえないと僕は生活していけないというのがあったので、ちゃんとそこはしていたので安心したというか、よかったというのがありますね。＜いつぐらいでしたか、その養育費のことを聞かれたのって＞えーと、考えたのは高校生ぐらいですかね。大学へ行くのでという段階で、そういうことになったときに、やはりお金で要るねということをようやく自覚するようになって、それで初めて聞きましたね。＜そうなんですか。もしたら、ちゃんともらっているから大丈夫と＞はい、そうです。(㉑さん)			○		○		2
		大人になってから改めて交流する	大人になってから別居親と交流する機会ができること	もう私はiPhoneに変えたかったので、当時ガラケーだったので、それを変えたくて手続したいというふうに伝えたという感じ。当時は未成年だったので、親の同意書とかが必要で、それで手続と一緒にしてもらったという記憶があります。(㉑さん)	○	○					2

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	総数	
別居親との交流のあり方		養育費をもらっていない／少なすぎる養育費	養育費をもらっていないか、取り決めより明らかに少なすぎる額であったこと	もう、この人は、もうこんな、あてにできひんってなって、母親からも、多分、母親から、(養育費は) 要らなくなっていったらしい。<そうなんですか>くれないというよりは、多分、母親から、もう、いいっていうこといったらしいです。(略) いやいやいや、何でと思いましたね、その、聞いたときは。こんだだけ大変な思いしてんのに、何で数万でももっとかへんかったんとは、もう、いいましたね。自分が大変な思いしてるのに、向こうの悪い、向こうのお金関係でトラブルで別れてんのに、何で生活費全部お母さんが負担せなあかんのって、ちょっと、喧嘩になるぐらいまでいいましたね。(㉒さん)			○		○		○	3
		別居親へのネガティブな印象が変化しない	成長してから別居親と交流する機会があっても、以前から抱いていたネガティブな印象が変化せず、変わらず別居親にネガティブな感情を抱くこと	<(介護によって) お父さんへの意識がちょっと変わったとか、もうちょっと会話が深まって少しお父さんと仲良くなったとか、そういうようなことはありますか>それはあまりないですよ。ただ、病気になって弱っているから、そこまで怖くはなくなったかなというのがあります。結局、口喧嘩とかすると大体負けちゃうんで、あまり会話しないようにはしているのです。<なるほど。かなり口が達者なお父さん>口が達者というか、子どもの頃、暴力はなかったけど、言葉の暴力的なもの結構多かったから、精神的には結構追いつめられているような状態ではあります。(⑰さん)	○	○						2
現在の離別に対する思い		離別によってネガティブな影響を受けていると感じる	離別によって自分の人生にネガティブな影響があると感じていること	今は自分の人生観というか、それにすべて影響されているなって。年をとるたびにそれは大きくなっていて、離婚してなければよかったって今となっては思っています。(中略) 子どものうちって何も考えず、ほかのいろんな人生の初めてのことでただ忙しくてそんなこと考える暇はなくなるけども、本当に辛くなってくると、自分の経験上は、だんだん大きくなって自分と周りを社会的な役割と比較したときに、自分の立ち位置がどうかとか、何かマウントをとられたりとかするときに立ち返ると、そういうことがベースだったからだと思ってしまうので。無邪気に笑える幼いうちはいいと思うんです。大人になって自分で生きてくときにどうかというところが影響が出てくると思うから、遠い先まで考えなきゃいけないと思います。(㉑さん)	○	○	○	○	○	○	○	6
		同居親にネガティブな感情を持つ	離別後の自分と同居親との関係や、両親の関係性を通して同居親に対してネガティブな感情を持つようになること	母は言動が、お母さんとのほうの生活が長いのですが、いっていることが二転三転する。昨日と今日とで、いうことが180度変わるというのがよくあるんですけどもね。最近、父親もそういうのが嫌だったのかなんて思ったりします。まあ、私も嫌ですけども。いっていることが変わられると、昨日はこういってたのに、今日はまったく違うことをい出すと、すごく喧嘩になりますね(略) おかしいなと思っていても、何がおかしいかをちゃんとといえないというのが、多分小さいときにはあったと思うんですね。子どものほうでちゃんといえないという、それが今になると、何がおかしいかがちゃんといえるようになったので、そういうのを今改めてみると、腹が立つというのはありますね。(㉑さん)	○		○	○	○			4
		別居親にネガティブな感情を持つ	離別後の両親の関係性や別居親の態度、成長してから知る別居親の状況などを通して、別居親に対してネガティブな感情を持つようになること	父に対しては、そうですね、やっぱり何か人生うまくいかなかったりときには考えてしまいます。何かいろいろ突き詰めると、原因はあの人だと思ってしまうりもします。<お父様にどんなことをいいたいかありますか>うーん、そうですね、晩年は反省してほしい、後悔してほしいといいたいです。(㉑さん)	○	○	○	○	○	○	○	6
		未だに離婚理由がよくわからない	未だに離婚の理由がよくわからないままであること	やっぱり離婚にあたる説明というか経緯は、ただ出ていっていかそんな感じだったんで、どうして出ていっていかというふうな理由をちゃんと説明してほしい。じゃないと、何が原因だったかというのが、結局、わからないというのは、(家族)個人個人で変なふうで考えて、そこからまた変な方向にいつっちゃうような感じもしちゃった。(⑰さん)	○							1
		成長してから離婚理由を知る	離婚理由を知らずに成長し、大きくなってから親のどちらか(多くは同居親)に初めて離婚理由を聞いたこと	大学ぐらいに下宿で離れ離れになって、就職が決まる前ぐらいに話してみようかなっていうことで、何で別れたかを聞いたら、大きな借金はないんですけど、借金ができて、それで母親、共働きが大変になって、で、母親も一生懸命働いて、何とか払い終えて、借金がなくなった後に、今度は母親のお金を、何か、こう、せびるじゃないけど、になってからお金に関してのトラブルで、もう離婚に至ったという形らしいんです。<ああ、そうなんですか。それは、じゃあ、大学にいかれたぐらいの年代で初めて聞かれた>初めて、そうですね、正直あんまり深く聞きづらいのもあって、理由を。ちょっと、ずうっと先延ばしにして、で、姉としゃべったときに、1回ちょっと聞きたいな。あっ、姉も知らなくて、1回ちょっと話してみたいなあとということ。(㉒さん)						○	○	2
		もっと他にやりようがあったのではないか	親の離婚理由を聞いても納得ができず、もっと他の選択肢があり得たのではないかと思ってしまうこと	そうですね、本当に暴力とかで父親を嫌いになったの離婚のほうが、よほど楽だったなと今は思いますね。もう少し話し合いとかで、何とか保てたのではないかなと。(⑱さん)			○			○		2



カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	総数
現在の離別に対する思い		未だに納得がいかない気持ちを抱える	離別によりネガティブな影響を受けていると感じ、現在も離別に対して納得できない気持ちを抱え続けていること	<ご両親の離婚に対する思いみたいなものは、今どう思われているとかはありますか>いいようには思っていないですね。プラスには捉えていなくて、今もなんとなく厳しくあたってしまうというか、やはりそういうのってありますね。何気ないところでも、母親自身に対して厳しくあたってしまうというか、何かこう根底にそういう、この人は離婚して、迷惑をかけられたっていうんですかね。そういう感情がどこかにあって、それでやはり日々の何気ないところで厳しくあたるといのはやはりありますね。(㉑さん)	○	○	○	○	○	○	6
		離別に対して否定的な思いを抱く	いろいろなことを考えたうえで、やはり離別は自分にとってよくなかったと思っていること	今は自分の人生観というか、それにすべて影響されているなって。年をとるたびにそれは大きくなっていて、離婚してなければよかったって今となっては思っています。<じゃあ、ちょっと悪くなっているということですか>はい。<その悪くなっているの一番影響、インパクトを与えているのは何ですか>自分のこれまでの恋愛も結婚感も、あと、社会に出てみていろいろ成功している人とかをみたときには、家庭が平和だったり円満だったりということが結構多かったりすると、自分には最初からその土台が欠損してたんだというふうに思ってしまうって、うまくいかなかったりしても、やっぱり自分はそういう育ちだからなって思ってしまうことが多々あります。(㉒さん)	○	○	○	○	○	○	6

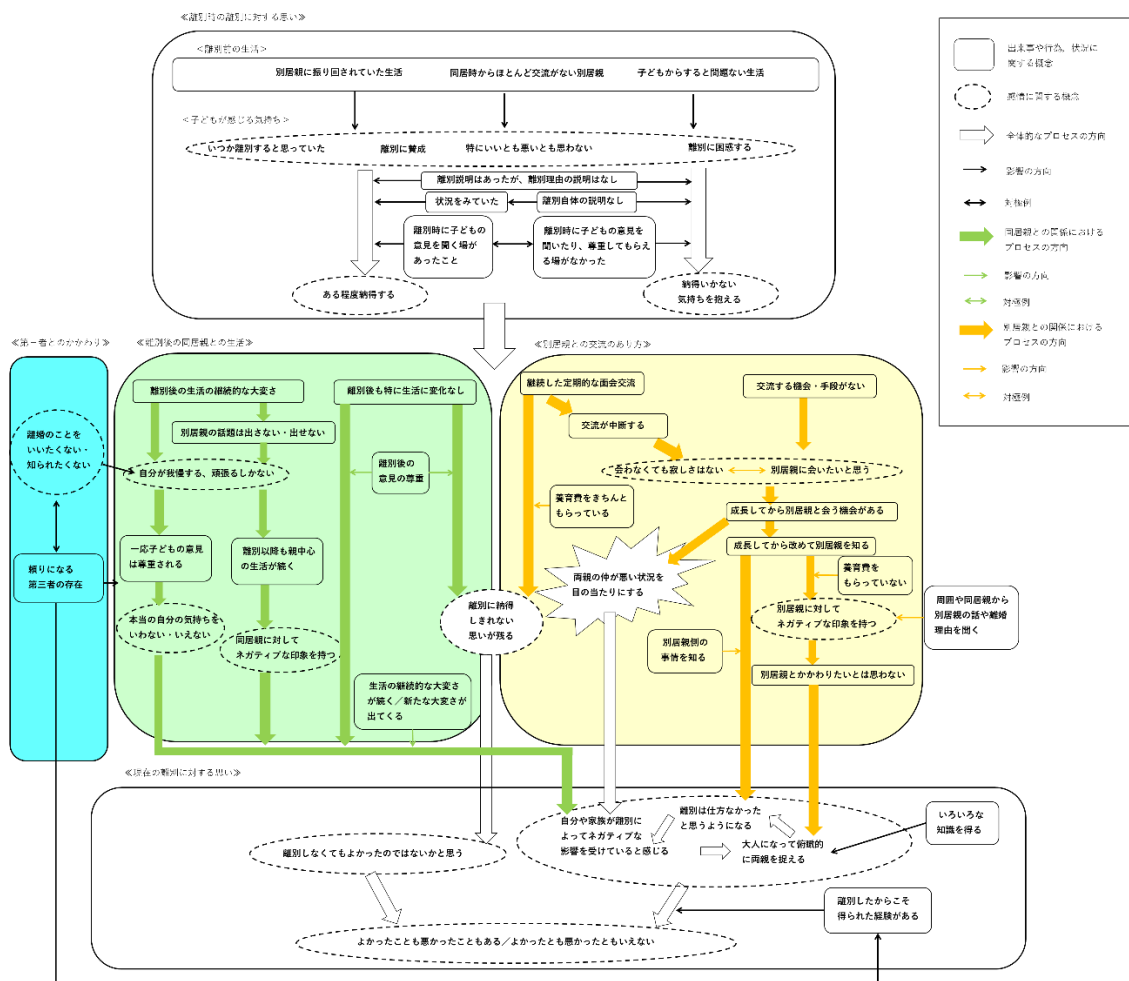
- (3) 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱くようになるまでの心理的プロセス
- 父母の別居および離婚に対して肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている群 8 名 (男性：6 名、女性：2 名) の調査対象者の一覧は表 7 のとおりである。

〔表 7〕 父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている群 (8 名 男性：6 名、女性：2 名)

対象者	性別	年齢	両親の離別を体験した時期	調査対象者が認識している離婚理由	同居親	面会交流と中断の有無	養育費の有無
㉓	女性	39	別居と離婚：6歳	父の飲酒、暴力	母	なし。10歳で偶然会った。	なし
㉔	男性	21	別居：中学2年生、離婚・不明（別居時に離婚するかもとは聞いていた）	父が母の浮気を疑う、嫁姑関係の悪さ	母	当初からあり。月1回の直接交流に1回参加した後は中断、その後就職時に1回直接交流。	有
㉕	女性	37	別居：中学2年生、離婚：15-16歳	母の多忙	父-母	当初からあり。母とは隔週程度でメールや電話。高校の頃に1度直接交流。大学から母と同居。父とは1-2カ月に1回メールや電話。数年に1回直接交流あり。中断なし。	有
㉖	男性	31	別居と離婚：7歳	母の不倫	母-児童養護施設	当初からなし。20歳になり、自分で会いにいった。	なし
㉗	男性	21	別居と離婚：10歳	不明（喧嘩後父が出ていった）	母	当初はあり。2か月間週1回の直接交流。その後中断。高校時に父と通学路で会った。	不明
㉘	男性	24	別居と離婚：高校1年生	父が仕事をしない	母	当初はあり。月1回の直接交流が1年ほど続くが中断。20歳で一度直接交流。その後、インタビューを受けることをきっかけに直接交流。	有
㉙	男性	36	別居と離婚：小学6年生	最終的には父の不倫	母	当初からあり。20歳前後まで年数回は母も含めて直接交流。中断を経て30歳頃に電話、30代半ばに直接交流。	不明（おそらくなし）
㉚	男性	36	別居と離婚：6歳	母の蒸発	父方祖父母-父-一人暮らし-父-母	小学生の頃は父と週1回の直接交流。母とは離別後交流はなかったが14歳頃に母から電話があり、その後週1回～月1回電話。20歳までは年1回の直接交流も有。20代後半の頃母親と一時的に同居。	なし

調査対象者から得られたデータを M-GTA によって分析した結果、生成されたモデルを結果図として図 3 に示し、結果図から作成したストーリーラインを述べる。

〔図3〕 未成年期に父母の別居・離婚を経験した子が父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱くようになるまでの心理的プロセス



➤ ストーリーライン（カテゴリーは《》、カテゴリーを構成するサブカテゴリーは<>、概念は太字ゴシックで示す。カテゴリーおよび概念の内容説明は後述する）

＜離別前の生活＞として、別居親に振り回されていた生活を送っていた子や、同居時からほとんど交流がない別居親であると認知していた子は、いつか離婚すると思っていたり、離別に賛成していたり、特にいいとも悪いとも思わなかったりすることが多い。一方で、離別に子どもからすると問題ない生活を送っていた子は、離別に困惑することが多い。

離別に困惑する経験をしていた子のなかで、離別説明はあったが離別理由の説明はない場合、離別自体の説明がない場合、離別時に子どもの意見を聞いたり、尊重してもらえる場がなかった場合には、子どもは離別に対して納得いかない気持ちを抱える。

一方で、離別説明はあったが離別理由の説明はない、離別自体の説明がない場合であっても、両親の喧嘩や、出ていく決定的な瞬間などの状況をみていた場合は、ある程度納得して

離別を受け入れる。また、**離別時に子どもの意見を聞く場があったこと**によっても、納得感が高まることが多い。

《離別後の同居親との生活》においては、**離別後の生活の継続的な大変さ**を経験していた場合と、**離別後も特に生活に変化がない場合**の2パターンがある。離別後の生活の継続的な大変さを経験している場合、**別居親の話題は出さない・出せないこと**によって、あるいはほかの人に**離婚のことをいいたくない・知られたくないこと**によって**自分が我慢する・頑張るしかない**と思い、大変さを1人で抱える。同居親がある程度子ども大変さを慮ってくれたり、子どもの意見を尊重しようとする様子を見せてくれたりなど、**一応子どもの意見は尊重される場合**でも、同居親の大変さを気遣い、**本当の自分の気持ちをいわない・いえな**いという選択をして、自分1人で頑張っている。また、子どもの頑張りが勞われず、子どもの意思も尊重されずに**離別以降も親中心の生活が続く**場合には、**同居親に対してネガティブな印象を持つ**ようになる。生活上の大変さが解消されない、あるいは新たな大変さが出てくる（**生活の継続的な大変さが続く／新たな大変さが出てくる**）ことによって、**自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**ようになる。

離別後も生活に変化なしのパターンでは、離別前と比べて、経済的にも感情的にも大変さが増すことはない。また、親が子どもの意見を尊重してくれる（**離別後の意見の尊重**）ことも多い。そのように、自分自身の生活はいったん安定していたものの、その後の生活のなかで**新たな大変さが出てくる**ことによって、あるいは離別による悪影響を顕著に被っている家族メンバーがいることによって、**自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**ようになる。

また、離別後も生活に変化なしのパターンで、かつ《別居親との交流のあり方》においても**継続した定期的な面会交流**が続けられ、**養育費をきちんともらっていた**場合に、「なぜ両親はわざわざ離婚という選択をしたのだろう」という疑問が続き（**離別に納得しきれない思いが残る**）、**離別しなくてもよかったのではないか**と思うようになる。この場合、離別によって特段の悪影響があったわけではないが、両親の離別に納得はできておらず、離別してよかったと思えた経験もないため、離別に対して**よかったとも悪かったともいえない**という思いを抱く。

《別居親との交流のあり方》では、**継続した定期的な面会交流、交流する機会・手段がない**のパターンがある。**継続した定期的な面会交流**があっても、自分の意思や親の都合によって**交流が中断**することも多い。**交流が中断する、交流する機会・手段がない**場合には、別居親に対して**会いたいと思う子もいれば、会わなくても寂しさはないと感じている子もいる**。これらの子たちは、**成長してから別居親と会う機会**があり、それによって**成長してから改めて別居親を知ることが**できる。子どもの別居親に対する印象や感情は、別居親との再会したときの状況によってさまざまである。再会して別居親に対して**ネガティブな印象を持った**

場合には別居親とかかわりたいとは思わないと感じ、以降積極的な交流はしないようになる。周囲や同居親から別居親の話や離婚理由を聞く、養育費をもらっていないという状況も、別居親へのネガティブな印象に影響を与える。一方で、別居親との再会によって別居親側の事情を知ることができると、離別は仕方なかったと思うようになることもある。しかし、別居親との再会で両親の仲が悪い状況を目の当たりにするという経験をし、その印象が強烈に残ると、自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じるようになる。

《離別に対する現在の思い》は、《離別後の同居親との生活》《別居親との交流のあり方》《第三者とのかかわり》にそれぞれ影響を受ける。この思いは、大きく分けて離別しなくてもよかったのではないかと思う人と、自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる・大人になって俯瞰的に両親を捉える・離別は仕方なかったと思うようになるの3つの思いをぐるぐると循環している人に分けられる。前者については前述のとおりである。後者の人たちは、その時々状況によって離別に対する考え方が異なりつつ、自分なりの気持ちの置き所を模索している。また、離別によってネガティブな影響を受けていると感じる一方で、離別したからこそ得られた経験もあると感じられることで、離別したことでよかったことも悪かったこともあると感じ、父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱くようになる。この離別したからこそ得られた経験があると思えるようになる背景には頼りになる第三者の存在があり、その第三者に支えられたり励まされたりしたことで、離別後の経験を肯定的に捉えることもできるようになっていると考えられる。

## ▶ カテゴリーおよび概念の内容説明

### ① 《離別時の離別に対する思い》

子どもが持つ、離別時の離別に対する思いを表すカテゴリーである。＜離別前の生活＞では、暴力や借金があり、子どもや家族全体が別居親からネガティブな影響を受けていた状況を表す別居親に振り回されていた生活、仕事が忙しい・生活時間帯がずれているなどの理由により別居親と交流がない状況を表す同居時からほとんど交流がない別居親、両親間の夫婦仲がどうであったかはさておき、子ども自身は同居親や別居親に大きな不満はなく生活にも支障がなかった状況を表す子どもからすると問題のない生活の3つの概念が得られた。

＜離別に対して子どもが感じる気持ち＞は、＜離別前の生活＞をどう認知していたかに影響を受ける。いつか離別すると思っていたは、別居親の暴力や両親間の喧嘩を目の当たりにして、いつか決定的な別れの瞬間がくるだろうことを子どもが予感していたことを表す概念である。子ども自身も別居親に対してネガティブな思いを持っている場合などは離別に賛成している場合もあった。特にいいとも悪いとも思わないは、離別をポジティブにもネガティブにも思わないというだけでなく「両親間の葛藤だから自分は関係ない」「巻き込まないでほしい」といった突き放すような意味合いも含んだ概念である。特に中学生・高校生の時期など、年齢が高くなって離別を経験した場合に多くみられていた。離別に困惑するという概念は、離別に対して驚いたりショックを受けたりとても悲しんだり、離別に対して

ネガティブな感情を抱いたことを示す概念である。特に、離別することについては説明があったが離別理由の説明がない（**離別説明はあったが、離別理由の説明はなし**）ことにより、「何で家族がバラバラにならないといけないんだろう」と理不尽に思ったり、離別することについて明確に言葉で説明されないままである場合（**離別自体の説明なし**）、子どもの訴えをまったく取り合ってもらえなかったり意見を聞く場自体がなかったりする場合（**離別時に子どもの意見を聞いたり、尊重してもらえなかった**）には、子どもは離別に対して**納得がいけない気持ちを抱える**ようになっていた。子どもの意見としては、「離別してほしくなかった」「お父さんと住みたいと訴えたのにお母さんと住むことになった」といった語りが得られた。

### ② <第三者とのかかわり>

これは親戚や友達、先生、コミュニティなどと、子どもを取り巻く周囲とのかかわりを示すカテゴリーである。この群では**離別のことをいたくない・知られたくない**という気持ちを強く持っている人が一定数含まれていた。離別に対する社会の偏見や「親が離婚しているからかわいそう」と思われないようにという意識が働き、できるだけ離別のことをいわないようにしている子もいた。

祖父母や仲のいい友達、学校や養護施設の先生など**頼りになる第三者の存在**に支えられているという語りも得られた。家族関係のことも含めて、第三者に悩みを打ち明けることができ、それに支えられたという人もいれば、離別に伴う悩みはあくまでも人に話さず、自分1人で抱えているという人もいた。

### ③ <離別後の同居親との生活>

このカテゴリーは、離別後の同居親との生活の状況を表している。**離別後の生活の継続的な大変さ**は、離別後経済的に厳しい状況が続いた、同居親が不安定になってしまった、虐待を受けた、といった状況を表している。**別居親の話題は出さない・出せない**には、離別や別居親の話がタブーになってしまう状況だけでなく、同居家族の間で「別居親の話をしないようにしましょう」と決めるなど、自主的に別居親の話をしないことも含まれている。この場合、自分が望むと望まないとにかかわらず、別居親の話はしにくい状況になるため、結果として**自分が我慢する・頑張るしかない**と思い、1人で大変な状況を抱えて頑張っていた。**一応子どもの意見は尊重される**は同居親のできる範囲では子どもの意見が尊重されるが、子ども自身の負担も少なくない（家計や学費の一部を子ども自身で担うため、日夜アルバイトに励まざるを得ないなど）状況を示している。この場合、子どもは同居親の配慮は感じるものの、現実的な負担が続いており、**本当の自分の気持ちをいわない・いえない**ようになっていた。この場合自主的に「いわない」選択をしている場合もあれば、いうと家族が不安定になるなどの理由により「いえない」と感じている場合もあった。一方で、**離別以降も親中心の生活が続く**は、子どもの意思がまったく尊重されず、親の意向が優先となって物事が決められていく状況を表している。この状態が続くことで、子どもは**同居親に対してネガティブな印象**

**を持つ**ようになっていた。「もうこの人は変わらない」と同居親に見切りをつけていると思われる場合もあれば、「いつかはわかってくれるのではないか」と同居親への期待を持ち続けていると思われる場合もあった。

一方で**離別後も特に生活に変化なし**の状況の人もいた。この場合、離別によって特段苦勞することはなく、今までと大きく変わらない暮らしをできていると感じられていた。また、親が子どものことを尊重してくれる（**離別後の意見の尊重**）と感じている人も多かった。離別後の生活に変化がない状況であっても、成長につれて**新たな大変さが出てくる**こともあった。例えば、経済的理由により大学をあきらめざるを得なくなった、などの経験により、「離別していなければもっと別の進路もあり得たのでは」と感じることで、離別によるネガティブな影響を受けていると思うようになっていた。

**離別に納得しきれない思いが残る**は、離別によって生活上の特段の変化・苦勞はなく、同居親との関係も別居親との関係も変わらず良好であるゆえに「なぜ離別しなければいけないのか」「生活や関係が変わらないのであれば離別しないでもよかったのではないか」という気持ちを示す概念である。離別したことでネガティブな変化はなかったが、ポジティブな変化を感じられたわけでもなく、両親間の関係が修復不可能なほど悪いわけでもないと感じているため、離別に対して納得できていない思いが強く残っていると考えられる。

#### ④ 《別居親との交流のあり方》

**継続した定期的な面会交流**は子どもにとって無理なく過ごせる交流の機会が続いたことを表している。**養育費をきちんともらっている**ことによっても、別居親へのいい印象は保たれているようであった。しかし、途中で**交流が中断する**ことも多くみられた。交流中断の理由として、自分が忙しくなったり会いたくなくなったりするなど自分から中断する場合もあれば、同居親からもう会わないようにといわれるなど、親都合で中断する場合もあった。中断の理由は何であれ、その後**会わなくても寂しさはない**と感じる子もいれば**別居親に会いたいと思う**子もいた。

**交流する機会・手段がない**は、面会交流についての取り決めがなされないまま離婚した、離婚後同居親が勝手に引っ越した、などの理由により別居親との交流の機会が失われたことを示す概念である。この場合も、特段**会わなくても寂しさはない**と感じる子もいれば**別居親に会いたいと思う**子もいた。

**交流が中断する、交流する機会・手段がない**場合でも、多くの人は**成長してから別居親と会う機会**を経験していた。そして、その時の様子や再会後に交流が続くことで**成長してから改めて別居親を知る**ようになっていた。このとき別居親の常識はずれな言動をみるなど、ネガティブな側面をみた場合には**別居親に対してネガティブな印象を持つ**ようになっていた。養育費がなかったことを知る（**養育費をもらっていない**）、同居親を含む周囲の人から別居

親のネガティブな側面を聞かされる（**周囲や同居親から別居親の話や離婚理由を聞く**）といった状況があると、別居親へのネガティブな印象がさらに強まっていた。それによって**別居親とかかわりたいとは思わない**ようになる人もいた。

一方で、**成長してから改めて別居親を知ることができた**場合で、別居親にネガティブな印象を抱かず、別居親と良い関係を築けるようになった人もいた。なぜ離別したのかわからなかった場合でも、別居親が理由を話してくれたことで**別居親側の事情を知る**ことができ、離別に対する思いが変化する（**離別は仕方なかったと思うようになる**）こともあった。

#### ⑤ <離別に対する現在の思い>

大きく 2 つのパターンがある。1 つは**離別しなくてもよかったのではないかと思う**ために、**離別してよかったとも悪かったともいえない**と感じているパターンである。離別に対して納得しきれない思いが残る一方で、離別によって特段不利益を被ったわけでもないのに、**よかったとも悪かったともいえない**と思うに至っていると考えられる。

もう 1 つは、**自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる、大人になって俯瞰的に両親を捉える、離別は仕方なかったと思うようになる**の 3 つの思いを循環しているパターンである。**自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**は、離別によって自分自身が、あるいは家族メンバーの誰かが、ネガティブな影響を受け続けていると感じていることを表している。ネガティブな影響としては、離別したことで金銭的な負担が続いている（奨学金の返済、同居親の生活費などを自分で担っている）ことや、離別をきっかけに家族メンバーが精神的不調に陥り自殺未遂を繰り返しその対応に追われていたこと、虐待を受けたこと、希望の進路に進めなかったこと、などがあつた。**大人になって俯瞰的に両親を捉える**は親をいい面も悪い面もある 1 人の人間として捉えようとしていることを示す概念である。特に親のネガティブな側面を冷静にみつめなおすことで、親に振り回されすぎずにいられるようになると考えられた。本や TV、他の人の話などから**いろいろな知識を得る**ことも、両親を俯瞰的に捉える動きに影響を与えていた。**離別は仕方なかったと思うようになる**は、別居親側の事情を知ったり、親を俯瞰的に捉えるようになったりしたことで、離別自体は避けられないことだった・両親にとって離別はよかったと思えるようになることである。しかし、**大人になって俯瞰的に両親を捉える、離別は仕方なかったと思うようになる**と同時に**自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる**ことも多々あるため、一概に離別を肯定的に捉えることはできず、**よかったことも悪かったこともある／よかったとも悪かったともいえない**と思うようになっていた。また、「離別により経済的に自立しようと頑張ったために今の自分がある」「虐待を受けて児童養護施設に行ったから出会えた人・できた経験がある」など、**離別したからこそ得られた経験がある**場合には、離別の肯定的な側面にも着目していた。しかし、よかったことがあつたからといってネガティブな経験が消えるわけではないため、**よかったことも悪かったこともある／よかったとも悪かったともいえない**という思いを抱くようになっていたと考えら



れた。

〔表8〕 父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱いている群の概念表

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	23	24	25	26	27	28	29	30	総数	
離別前の生活	別居親に振り回されていた生活	同居時は別居親の暴力（精神的なものを含む）、身勝手なふるまいなど別居親に振り回されていた生活を送っていたこと	自分が悪いことをしていないのに叩かれたりしてたんですね。小学校になってからは、そうないんですけど、だから保育園とか保育園行く前とかだったら、お姉ちゃんと一緒に縄で縛られてたりとかしてたり、だから、あーそうなんだっていうぐらいにしか感じてなかったです。お互いそれぐらいの感じです。＜誰もそれぐらい＞姉です。＜お姉ちゃんもそれぐらいの気持ちで＞そうです。＜では、そんなにきみしいとかいうわけじゃなくて＞なかったですね。どちらかというと、もう母親は家にいないことが多かったんで、でも、いつもだったら帰ってくるぐらいの時間になっても帰ってこないね、そうだねみたい。大おばさんもまだお仕事されてたので、大おばさんが帰ってきてても、まだ帰ってこない、父親が帰ってきても帰ってこないってなって、で、父親と母親の部屋に離婚届が置いてあったの。（㉑さん）	○	○								5	
		同居時からほとんど交流がない別居親	同居時は別居親との交流がほとんどなく、関係性が薄いこと	性格合わなかった、僕もあんまり、まあ僕に興味ないっていうと変ですけど。必要最低限のことしか、例えばどっかに遊びに行くとか、子ども思いの人ではなかったですね、今考えれば。なんで、別に最低限の、今どんな感じぐらいのことを1週間に1回しゃべるかしやべらんかぐらいだったんで。そんなに仲はよくなかったんで、はい。＜へー。その、一緒に暮らしている間も＞はい。まあ、生活がえらかったんで。向こうは夜勤のトラックの運転手だったんで。＜あー、はいはい＞僕たちと生活が真逆だったんで。会う機会もそんななかったんで、はい。そんな感じですかね。（㉒さん）						○	○		2	
		子どもからすると問題ない生活	子どもからすると特に問題のない安定した生活を送っていたこと	中学の3年生の頃に、まあ、ちょっと、私たちは別居というのを知らなかったというか、母、うちは共働きで、母は結構仕事が忙しくて、なかなか家に帰ってこれなかったりして、会社に泊り込んでいたりとかすることもあって、そういうのが結構忙しい時期が続いたので、私はちょっと別居って思っていなかったんですけど、徐々そこから別居になって、中3のときは母親のほうが帰ってきていなかったんで、多分そういうのが続いて、ちょっと別居になっていったような感じだと思います。（㉓さん）			○	○	○					3
	いつか離別すると思っていた	同居当時の両親の関係性、家族の関係性から、いつか離婚すると思っていたり、別居に至っても仕方ないと思っていたりしたこと	しゃべってるところも、あんまりみずだったんで。まあ、ぎすぎすしてると僕たちは思っていましたね。＜そうなんですね。ありがとございます。じゃあ、別居、離婚されることになったのは、高校1年生のとき＞はい。＜いつぐらいですか＞高校1年の5月、6月ぐらいですね。＜ああ、そうなんですね＞はい。＜ありがとございます。その、別居とか離婚されるにあたって親御さんから何か説明とかはありましたか＞軽くはありましたが、まあ、薄々はわかってたんで。ああ、そうかっていう感じでしたね、僕は。（㉔さん）			○			○	○				4
		離別に賛成	離別してほしいと思っていたり、離別することで安心したりすること	もともと私自身が父親と仲が悪かったっていうのがあったので、それに関しては、ちょっといい方は悪いんですけども、せいせいしたというのはあって、ただ、今になって考えると、ちょっと残念なっていう気持ちはあります。＜そうなんですか。その当時としては、結構せいせいしたというか、苦手なお父さんとちょっと距離を置けるみたいなのがよかった＞そうですね。ちょっと距離を置けたというのはありがたかった、ちょっと助かったというのがありますね。（㉕さん）	○	○								2
		特にいいとも悪いとも思わない	離別すると聞いても、特段肯定的な感情も否定的な感情もなかったこと	まあ、ぎすぎすしてて、普段から仲もよくはなく。これといって家族でどっかに行っただけという記憶もないので。まあ別に、そうなのって。何も躊躇はしなかったですね。＜あー、へー、そうなんですか。じゃあ、ああ、そうなのって感じですか、そうですね。＜何でしょう、肯定的とか否定的とか、どちらでもないとか＞そうですね、はい。どちらでもないですね、別に。はい。（㉖さん）							○	○	○	3
		離別に困惑する	両親の突然の離別に困惑したり、両親がそろっていない状況に悲しさを感じたり、離別しないでもよかったと思っていたこと	例えば母親が父親を悪くいう、父親が母親を悪くいうとか、そういうことが一切なかった。あの人がこうしたから私たちは離れるのよとか、そういう説明が一切子どもにはなくて、だから子どもとしては、好きな父親と急に離れる、急にというか、うずうず感じてはいても、実際に離れる日は本当に急だったんで。今日、これから出ていくよみたいな、靴1つで出ていくよみたいな感じじゃないですけど。だから、何ていうんでしょうね、大人風にいえば、置いてけぼり状態だったということです。蚊帳の外。（略）理由がわからないから、私としては葛藤というか、理由がわからないのに好きなほうと離れるから、それが嫌だったという。そこしかいてないんですけど。（㉗さん）					○	○	○			3
	子どもが感じる気持ち	離別説明はあったが、離別理由の説明はなし	離別することの説明はあったが、離別理由に関する詳細な説明はなかったこと	そのとき（離別当時）は、何か一緒に暮らせなくなったみたいなのをいわれて。協議離婚とかそういう難しい言葉は全部省いて、後で要らないといわれたぐらいの感じのことを中学生ぐらいのときに母からいわれて、思春期だったのですごくショックを受けて、要らないといわれてもなくて。（㉘さん）	○	○	○	○			○	○		6
		離別自体の説明なし	両親が離れて暮らすことや、どちらかが出ていくことなど、離別自体に関する説明がなかったこと	そもそもなんでですけど、聞いてもないですね。何となくこう自然に、直接、離婚したとはいわずに、自然な空気ではそういうふうになった、そういうことになったんだなというふうな感じでした。＜何も説明はされてないけれども、空気で何となくもう離婚したということがわかった。それは何でわかったんですか＞そうですね、そのときですが、父親の話をしようとするとなんかすげえ威圧感で、そういうのはやめろというふうなことを何度も何度もいわれました。（㉙さん）							○	○		2

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	23	24	25	26	27	28	29	30	総数	
離別時の 離別に対する思い		状況をみていた	離別に至るまでの喧嘩や、決定的な瞬間をみていて状況を把握していたこと	父親の携帯を勝手にみて、女性とのやりとりをみつけたっていう、それがとどめです。(略) 喧嘩してるわとか、もう、一言でしたね。もうさすがにいい逃れできなかったんでしょね、母親が一言、「出ていけ」って。それだけです。<そうなんです。で、お父さん出ていて、で、それもみて>はい。あーっていう、そういうことかかって。<そうなんです。何か特にそれについて説明はなかったってことなんです、何か説明>僕もその場にいたんで、僕も結局みたので、携帯。(23さん)						○	○		3	
		離別時に子どもの意見を聞いたり、尊重してもらえなかった	離別時に、子どもの意見を聞く場はなかったこと。あったとしても尊重してもらえなかったこと	もう、幼少期はほぼ母の意思で、お父さんのほうについていきたいとかいっても母が親権をとるっていうのがあたり前の世の中なので、そんなの選べないし。というか、私自身も、何だろ、相談員が母のほうへいけばいいでしょうぐらいな感じで片づけられてしまうので、ほぼ私の意思は聞かれていないし、名字を変えることも私の意思も聞かずに自動的に母の姓になっちゃったので、幼少期はほぼ聞かれていないですね、反映されていないです。大人になってきたら、何か会いたかったとか、意見はいえるようになった感じですね。寂しかったとか。(23さん)	○			○					2	
		離別時に子どもの意見を聞く場があったこと	離別時に、どちらと住みたいか、苗字や転校についての希望など、子どもの意見を聞く場があったこと	私としては、正直なところ別居することになって、住む場所ももちろん変わったんですけども、なるべく当時住んでいた地元の学校に行きたいっていう意見はありました。<そうなんです。それについてはいかがでしたか。何かどんなふうにいわれたとか、対応されたとか>それについては、もちろん快くOKしてくれました。<そうなんです。じゃあ、別居されることになった家もそこまで遠くないとか、同じ校区に通えるぐらいのところなのですか>はい、一応別の市に移ったんですけども、それでも全然通える範囲ではありました。(24さん)		○					○		○	3
		ある程度納得する	両親の離別をある程度納得して受け入れること。人によって、発達段階によって、納得度合いに差はある	暴力とかすごかったので、逆にほっとしたというか。私とか妹もいつたれるかわからないので、ちょっとほっとしたというのがありますね。<じゃ、ちょっと幼い心にも、お父さんに対する何か恐怖心というか、そういうのはあったという感じなのですか>そうですね、何か常に暴力から逃げる方法とか、何か暴れたらどうやって家から逃げるかとか、そんなことしか考えていなかったです。<わかりました。何というか、お父さんがいなくなって寂しいとか、ちょっと行かないでとか、そういうような気持ちはそんなに持っていなかったということですね>そうですね。後々小学校へ上がってきて、周りのお父さんと比べて寂しいなどと思うことはありましたけれども、その時点ではよかったなみたいな、もう暴力はふるわれないみたいな。(23さん)	○	○				○	○			5
		納得いかない気持ちを抱える	離別に対する困惑やショックが大きく、離別を受け入れられずに納得いかない気持ちをしばらく抱えていること	その離婚、何で離婚したんだろうっていうところは、ちょっとそのときは幼かったのでどうでもよかったんですけど、ただやはりショックだったっていうのは、本当に大きいです。<ショックだった>その幼いからなんだとは思いますが、やはり家庭には母親もいて、父親もいてというふうには、そういうのがあたり前だと思ってたんで、まさか母親だけになるとはっていう、あまり仲良くできなかったのかなっていうふうには思ってたことはありました。(27さん)							○	○	○	3
離別後の 同居親との生活		離別後の生活の継続的な大変さ	離別後経済的に厳しい状況が続く、留守番が多くなる、離別時に感じた寂しさや不安を抱え続ける、離別をきっかけに同居家族との関係も不安定になる、など、離別したことで生活上に何らかの大変さが現れ、それが継続的に続いていくこと	母がやはりキーキーキーキー怒っていたし、会うとまた裏切られたとか。何でしょう、負のオーラというか、雰囲気が悪くなるからいい出せなかったというのがありますね。<お母様は、先ほどもキーキーとおっしゃっていましたが、割とやはりキーキーと>押ししていく。<お仕事が大変だったからですかね>やはり、おばあちゃんから、出戻りの娘といわれて。<えっ、おばあちゃんから>それで、叔母も結構否定的だったので、孤立無援みたいなのがあって、金のかかる孫を連れてきてみたい。まあわかるんですけど。というので、ずっと肩身の狭い思いをして。<ああ、そうだったんですね>うん。結構おばあちゃんが女帝で、牛耳っていたので。うん、そうですね。(23さん)	○					○	○	○		5
		別居親の話題は出さない・出せない	離別後の生活で、別居親の話題がタブー扱いになっているため話せなかったり、子どもが自主的に話さないようにしていたりすること	本当にタブー扱いでして、そのとき学校で使っている日用品、大体フルネームで書いてありますけど、その名字の部分を修正液だったり、マッキーペンだったりでガッツと消したり、徹底的に元お父さんの関連物はなかったことにして、到底話せるような雰囲気じゃなかったです。<では27さんの持ち物で、お父さんの名字のところを消したことでですか>はい。すべて消されました。わかりづらいかもしれませんが、その当時モダテクションっていうゲームで、自分でキャラクターを作って遊ぶゲーム、それでも元夫の関係を全員削除されてましたね。いつの間にか。<勝手に>はい。(27さん)	○					○	○		4	
		自分が我慢する、頑張るしかない	助けになってくれる人がおらず、自分が我慢して頑張ればその場が収まると思い、1人で辛い状況や感情を抱えること。あえて助けを求めずに1人で頑張っている場合もある	例えば夏休みとか、小学校2年生の夏休み、長期休暇のときに、母親が朝から仕事に行く、父親(継父)はちょっと遅めの出勤だったりして、弟は保育園、母親は仕事のときに保育園に連れていく。つまり、私と今の父親が1対1になる時間ができるんですよ。もう地獄ですよ。「お母さんいかないで」って、もちろん、そんなこといたら、後からボコボコにされるので、心のなかで「お母さんいかないで、何で助けてくれないの」、ずっと忿鬱しているとか、念を送るというか、してました。(26さん)	○						○	○	○	4
		一応子どもの意見は尊重される	同居親が子どもの意見を尊重してくれようとするが、生活上の制約などもあり、子どもへの負担も少なからず残り続けること	<学費とかのことも親御さんからいわれたわけではなく>学費は自分で。<はい>まあ、払ってはいわれてないんですけど。<はい>ちょっと、してほしいみたいな感じやったんで。<ああ、そうなんです>じゃあ、自分の分は自分で払うわっていったんは覚えていますね。(28さん)	○							○		2

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	概念の定義	具体例	⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚										総数							
					㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚								
離別後の同居親との生活		離別以降も親中心の生活が続く	離別以降も子どもの意見を聴いてくれるような雰囲気はなく、親中心の生活が続いていること	ととにかくお母さんに自分の意見を尊重されたっていうような気持ちはあまりないって感じですか>はい。ないですし、あちらもそもそも眼中になかったと思います。<眼中になかった>はい。<眼中になかったっていうのは、あまり気にしてなかったっていう>はい。父親との関係に関しまして、そういった息子だったり、家族だったり、迷惑もおかまいたしに、本当に自分が嫌だからっていうふうにあたってましたね。(㉗さん)	○																4	
		本当の自分の気持ちをいわない・いえない	離別後の大変さや、それにまつわる気持ちを誰にもいわずに・いえずに1人で抱えていること	<その、ご自身のそういった気持ちを、お母様とかにいったこととかはありますか>うーん、何かちらっと、「最速離婚しちゃうから、私、いいわ」とか言って、普通にいて、「スピード離婚しちゃうから私はいいよ」とかって、冗談ではいっていますけど。何か、出戻りでまたぎやあぎやあ始めるとかはいってないですね。<お母さんたちの、10歳のときにみたそういうのがあるとか、そういうこともまだいってない>うん、いってない。<そういう違和感がある、ということはいってない>いってないですね。(㉓さん)	○		○	○	○	○											5	
		同居親に対してネガティブな感情を持つ	離別後の生活を通して同居親の身勝手さに気づき、ネガティブな感情を抱くようになること	助けてほしかったです。明らかに、子どもがボコボコになっているのはわかっているんです、母親も。でも別れない。つまり、あれだけ子どもを引き取るっていったけど、子どもと今の父親、不倫相手を天秤にかけたときに、天秤にかければ、今の父親のほうが比重は重い。大事なんです。愛する人なんです。だったら、子どもなくてもよかったやん。だったら2人で愛し合って、子ども2人作ってるんだから、それでいいやんという思いもあり、だから助けてほしかった。大人になってからの総合的なまとめでいえば、あなたたちは子どもの幸せを……、あなたたちにとつての子どもの幸せって何だったんだ。(㉖さん)	○			○	○													4
		離別後も特に生活に変化なし	離別後も離別前と比べて特段生活の変化はなかったこと	別に離婚したからといって、誰かのそんな、おじいちゃんやおばあちゃんとか、おばさん、おじさんとか連絡をとらなくなるとか、一切なかったんですね。そのへんがもう全然変わらなくて、きちっと母親自体も連絡はとりあっていたので、何か本当に周りも、別にする必要なかったのにな、みたいなことはいってましたね。(㉕さん)		○	○														○	3
		離別後の意見の尊重	離別後に、同居親と一緒に住んでいる家族が子どもの意見を尊重してくれたこと	(父方祖父母は) 戦争経験者の方だったのですごい厳しく育てられたんですけど。でもその分、礼儀作法とかちゃんと仕込まれたんで、全然、僕は。父親も父親で、好きにしたらいいんじゃないのみたいな、最初はいろいろいってましたけど、学校に行かなかったことに関してとかもそうですけど。(㉑さん)		○	○														○	3
		離別に納得しきれない思いが残る	離別しなくてもよかったのではないかと、離別に納得しきれない思いが残ること	やっぱり母と父は連絡自体はとってくれていたんですよ。妹とか私の進路とかのことについて。なので、まったく離婚したからといって、そこからもうすぐに、絶縁という感じじゃなかったんで、自分的にはそんな、離婚しちゃっているんですけど、別にしなくてもよかったんじゃないかなって。結局連絡とかもとって、お金の問題とかも両親で話し合っていたみたいで、別に紙を出さなくても、うちはよかったんじゃないかなっていうのはあったんですけど。そうですね。なので気持ちがよくも悪くもなってはいないんですかね。(㉕さん)					○													1
		生活の継続的な大変さが続く/新たな大変さが出てくる	離別による生活への悪影響が数年以上にわたって続いたり、成長につれて新たな大変さが出てきたりすること	母親は、うーん。母親が父親と別れてから、母親がパニック障害になって、ODとかしたりとか、そんなのがあったんで、で、それを僕も同じことをしてしまったし、まあ自殺未遂もしたし、4階から飛び降りて、それで車椅子やったんですよ。(㉕さん)	○	○			○	○	○	○										
第三者とのかわり		離婚のことをいいたくない・知られたくない	離別したことを知られることで、周囲から今までと異なるようにみられるのではないかと感じ、離別をできるだけ隠そうとすること。社会からの偏見を感じとっていることもある	私自身も離婚しましたというのは公にいったことはないで、そこまで何かしてもらった覚えはないです。<そうなんですかね。先ほど確かにおっしゃってましたけれども、それはあえていいたくないというか、いわないほうがいいかなというふうにも思われた>そうですね。友達も何人かいたので、そういったことがばれるのはちょっと私としても嫌だなと思ったので。<そうなんですかね。何かばれるのが嫌だなと思える理由とかって何かありますか>何でしょう、離婚したんだっていう感じの目でみられるのが嫌だったというのがあったので、できれば、離婚はしちゃったんだけど、そういったことはあまり話さずに、そのままいいかなって感じなんです。<何かそれによって周りからのみ目が変わったりとか>そうですね、はい。接し方が変わるのが嫌だったので。(㉔さん)	○	○															3	
		頼りになる第三者の存在		小学校の先生が、結構思慮深い方で、普通、離婚した家庭の子どもって腫れ物に触るような感じで扱ってくる時代だったので、今ほど多くはなかったんで、普通の子と同じように扱ってくれたのが。いじめられても、「違うよ」といって、「多様性」って言って、ちゃんと扱ってくれていたのがうれしかったですね。校長先生もいい人で、片親だからこの職業に就けないとか、思考が偏っているとかっていわないでくれたのはありがたかったです。片親だと、どうしても不良になるとか、何かいろいろあるんですけども、いわれたりするのですけれども、何か自分のせいではないのに、そうやって決めつけてレッテルというか、価値観、不良になるという価値観ではなくて、いろいろな可能性のある子だからみたいな感じで扱ってくれたのはありがたかったですね。(㉓さん)	○		○	○	○	○	○	○	○	○								7

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	概念の定義	具体例	23	24	25	26	27	28	29	30	総数	
別居親との交流のあり方		継続した定期的な面会交流	離別後に、自分が無理することなく、定期的な面会交流が継続していたこと	多分2週間に1回ぐらいは、天気とか気温のこととか、そういうことで、気軽なことで連絡はしてはいて、でもやっぱり、もう母は東京に出ちゃっていたので、会うってなると、なかなか会えないですかね。＜2週間に一遍ぐらいは、電話とかメールはしていたけれど、会うとなると、どれぐらいの頻度でしたか＞そのとき、母が1年に1回、地元のように戻ってこれるときに会っていたというぐらいで、1年に1回あるかないかという感じですかね。(25さん)			○			○	○		4	
		交流が中断する	離別後面会交流は実施されていたが、親の都合や自分の都合によって面会交流が中断すること	週1で会うことが、大体2か月ぐらい続きました。＜週1が2か月＞はい。＜その後、どんどん減っていったということですか＞これはもう目にみえて、ぶつと切れました。＜週1回が2か月あって、その後、もう一切会わなくなった＞はい。＜それは何かきっかけがあったんですか＞きっかけですか、これは直接理由なのかわかりませんが、元い始めてから2か月ぐらい経ったときに、夏休みだからちょっと1泊2日でどっか旅行行かないかというふうに、元父親のほうから誘いがありまして、その話を進めていたところ、いざその日に近づいてきたときに、もう会うなというふうに、母親のほうからいわれました。＜お母さんから会うなというふうな話があったというふうな話ですか＞それからめっきり会わなくなりました。(27さん)		○				○	○		4	
		交流する機会・手段がない	面会交流について取り決めがされていない、遠方への転居などの理由により、別居親と交流する機会や手段がなかったこと	というか、夜逃げをしたから、住所とかも知らなくて、年賀状とか、そういうやりとりも一切できない。だから、父親としても、例えば養育費代わりにお年玉をあげたりしてあげたいとしても、何もできなかったんですね。…消えちゃったから。で、母方の親戚からは、年賀状のやりとりというか、うちの娘とか何ていうんでしょうか、親戚からすると、うちの姪っ子が本当に申し訳なかったみたい。親戚が、姉妹が結構多くて、そこからは何回も葉書とか年賀状とかが来たことがあるんですけど。＜お父さん方のほうに＞はい。だから、引越したとかっていうのは、教えてなかったというか、そこは知らなくて、便りが無いのは元気な証拠というふうな思っていたといわれました。(26さん)	○				○				○	3
		会わなくても寂しさはない	別居親と交流がなくなっても特に寂しさを感じなかったこと	まあ、せつかく向こうがねえ、いってきてくれるから会おうかぐらいの程度なので。＜はいはい＞若干、無理してたのかなと今、ふと振り返って思いますね。＜へー。じゃあ、わざわざ月1回も会うほどでもない＞会うほどでもないかなと、はい。(28さん)		○					○	○		4
		別居親に会いたいと思う	別居親と会いたいと思っていたこと	(母と)2人で外に出ながら、実は、実のお父さんに会いたんだったという話をして、そのとき住所っていうか、「今、どこに住んでいるかは知らないよ」っていうのはいわれて、素気なくあしらわれたんですけど(略)そのときは東京まで行くお金もなかったんで、施設のルールで携帯電話とかは持てなかったんで、パソコンもなければ携帯電話もない状態、行くのはリスクー過ぎるということで、結局、いろいろ責任はあるけど自由になれる、成人を迎えたら行こうということで。(26さん)	○					○	○			3
		成長してから別居親と会う機会がある	成長してから別居親と交流する機会ができること	最後に会ったのが、私が専門学校を卒業して、今就職してるんですけども、学校卒業を機に私も県外に就職が決まったので、県外に出る前に1回だけちょっと会おうってことで、今年の3月に1回会いました。＜そうなんですかね。そのときはいかがですか。どんな感じだったとか＞そうですね、久しぶりに会えたというのもあったので、わりと新鮮な気分でした。そのときは。＜そうなんですかね。新鮮な気分、そんなに反抗期も薄れ、嫌だった気持ちみたいなものもなく＞なくて、普通に単純に久しぶりに会えたねっていう感じで、重い感じじゃなくて、楽しく話ができたと感じます。(24さん)	○	○			○	○	○	○	○	7
		成長してから改めて別居親を知る	別居親との交流がない／中断していたが、成長してから別居親と交流する機会があり、それによって小さい時には知らなかった別居親側の事情などを知ることができること	俺は、自分はすばつといえるタイプだったんで、今さら母親づらされても困る、対応に困る。母親としてみてほしいっていつてくるんだしたら、俺はもう二度と連絡とりたくねえ、という。＜そういつてた＞「わかったわ」みたいな。そこからはそう母親づらしてこなかったんですけど(略)こう自分から僕たちのこと捨てといて、すり寄ってくるのは何か違うんじゃないかっていうので、それはそこがずっとあったんで、それをいきなりこうやられたりすると、やっぱりこうおかしいなっていう。＜では、根底にというか、いろいろお話しはもちろんであけるけど、何ていうか、ずっとこう小さいときに受けた傷つきみたいなものがあって＞そうそう、そういうのが癒えるわけじゃないよって。＜もちろん、それはそうですね。それはそうですね。それはそうですね。それはそうですね。あれですけど。そうだと思います、本当に。なので、何か正しい反応だと思います＞そのままもう母親づらなくて、お友達みたいな感じだったら、まだよかったほうな、いい方向に進んだかもしれないです。(30さん)		○				○	○	○	○	6
		養育費をきちんともらっている	養育費をきちんともらっていること	＜養育費は受けとってらっしゃったかとかいうことはわかりますか＞お母さん曰く、一応ちゃんと払ってるらしいです。私自身がみているわけでもないの。一応聞いてみたら、ちゃんと払ってるよというのを聞きました。(24さん)		○					○			2
	両親の仲が悪い状況を目の当たりにする	離別後に両親の仲の悪い状況、大喧嘩している様子やあからさまに他人行儀している様子を目にすること	向こうから歩いてきたのが父親で、母がぼつが悪い顔をしていて、父もちょっとぼつが悪い顔をしていて、ちょっと表現はあれなんですけれども、男と女みたいな感じになっていて、ちょっと子ども心にごく衝撃だったのを覚えていて。今でも覚えていて、あつ、他人なんだって。私にとっては父と母のだけれども、父親と母にとってはもう他人なんだみたいな感覚になったのはすごく覚えていて。何か2人の会話がよそよそしいし、それが最後に会ったときですね。それ以降はもう全然会っていないですね。(23さん)	○						○			2	

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	②③	②④	②⑤	②⑥	②⑦	②⑧	②⑨	②⑩	総数	
別居親との交流のあり方		別居親側の事情を知る	離別に關する別居親側の事情を知ること	私、20歳のときに実の父親に会いに行ったんです。1人で。そこに住んでるかもわからないし、電話番号も何も知らない状態だったんですけど、会いたいという気持ちがずっと強くて、20歳で一応成人もしたから、母親のほうも止める術はないとか、勝手にしたらっていうことで。戸籍簿本みれば、実家のほうの住所はわかるんで、それで行ってみたら、実家に祖父、祖母、父親がいたという。＜そなんですすね＞7歳で離婚して、その13年間でしたから、当時の離婚の話を知ることができて、そこで初めて（離別理由が母の）不倫だったっていうのを知れたんですが、そういう時系列があって。（②⑤さん）									2	
		別居親に対してネガティブな印象を持つ	別居親との交流を経て、別居親に対してネガティブな印象を持つこと	要するに僕ら捨てられちゃったわけじゃないですか、子どもとしては、なので、そんな感じですね。あなたの境遇もわかるけどみたいな。＜もう大人になってるから、そういわざるを得ないっていうか、そんな感じですよ＞そうですね。だから、最終的にはもう下の名前で呼んでたんですけど、たまに、お母さんって呼んでよかいてくるけど、えっという、僕はちゃんと母親から電話かかってきたら相手してあげてたほうなんです。でも、姉にはそんなにやっぱりいい切れないみたい、その母方のしがらみを全部お姉ちゃんに押しつけた形になるから（略）俺は別におじいちゃん、おばあちゃんからちゃんと、厳しかったけどちゃんと優しく育ててもらったので、そんなのはなかったけど、あんたが辛かった思いは全部うちの姉ちゃんがかぶってるんだけどみたいな。（③⑩さん）									3	
		別居親とかかわりたいとは思わない	別居親へのネガティブな印象により、別居親と積極的に交流したいとは思わなくなる。できるだけかわりたくないという場合から、積極的に会おうとは思わないという場合まで、幅がある	やっぱり考えることがわからなかったんで、おかしなことばかりやってたんで、父親は、それに対して、もうふざけるなって。＜それは離婚の後＞離婚の後です。＜そなんですすね＞うん。＜差し支えなければ、どんなこととか、どんなことだったんですか、何かよくわからないっていうか、お父さんのやっていることっていうのは＞うーんとかね、もうすべてがもう、気に入らなかつたんで、うん。仕事にしろ、まあ、普段の行動です。＜その気に入らないっていうのは、何かちょっと一貫性がないというか、何か、何でそんなことするの＞一本筋が通ってなかったんで、何でこれするんやろうとか、何でこれ、せえへんのやろうとか、何で何でっていうのが、子どもじゃないけど、大きく今でもわからないぐらいなので、うーん。だから、今はもう全然会いたいとも思わないですね、うん。（②⑨さん）									2	
		養育費をもらっていない	養育費をもらっていないこと	だから、もう、今までの養育費とか、そういう問題はうちはなかったんで、今までお正月とか、もらってないお年玉のぶん頂戴みたくに僕はせびってます。僕はせびれるタイプの人間だったんで。（③⑩さん）										4
		周囲や同居親から別居親の話や離婚理由を聞く	祖父母などの周囲の大人や同居親から離婚のことや離婚理由、別居親のことを聞くこと	中学生ぐらいのときに、電話をかけてくるのがすごく多くて、高校生、晩年ぐらいになるともうかかってこなくなつて、母が「多分父親じゃないか」という話になって。昔は、ナンバーディスプレイというのがなかったの、番号が出ないんですよ。おそらくそうではないかという話を聞いて、大人になってから、実は私が小学校とか中学校へ行っている間にふらっと現れたって、父親が家に訪ねてきたって聞いていて。＜ええっ＞「ええっ」とかいて、「娘に会いなさいよ」とって叔母がいて、「いや、いいんだよ僕は」とかいいながら去っていく、という話を大人になってから、20歳を超えてから聞きました。（②⑨さん）										4
現在の離別に対する思い		離別しなくてもよかったのではないかなと思う	離別してもあまり父母それぞれとの関係性が変わらなかったため、あえて離別という選択肢をとらなくてもよかったのではないかなと思うこと	でも、やっぱり、離婚しているんで、私はお父さんの家に泊まるんですけど、母は泊まれないですね。だから別にホテルとか借りたりしていただんですけど、そこで離婚してなければ、普通に母と一緒にみんなで会えたのになつていう、何かもどかしさみたいなものがあります。そこが、もう離婚の特徴みたいな、行けなくなつたみたい。（②⑤さん）									1	
		自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる	自分や家族メンバーの誰かが離別による悪影響を受けていると感じること。悪影響には、経済的な負担や、離別による家族関係の悪化、精神的負担、虐待などが含まれる	＜やっぱりその、別れて住んだことによって、結構その＞はい、負担はありましたね。負担っていうか、そうですね、ちょっとはありましたね。＜やっぱり家賃とか＞家賃とか、あと多分、最悪自分は、離婚しないのなら、私学に行っても学費は多分、出してくれてたんじゃないかなと、2人で生活してれば。生活費も入れることはなかったんじゃないかなと、はい。＜あー、なるほど。そうしたら、バイトするにしても自分のことに基本使えるっていう＞そうそう、そんなに、がつつ週5ぐらい入らなくても、週2、週3ぐらい、自分の好きな小遣稼ぎ程度になるんじゃないかなとは思って、ちょっと待つてほしかったんですけど、はい。＜ああ、そなんですすね。それは、いつぐらいから思ってたとか、ありますか＞高校のときぐらいからですね。口にはしなかったんですけど、もうちょっと辛抱してくれよと思いましたが。まあまあ、しゃあなかったですね。（②⑨さん）									7	
		大人になって俯瞰的に両親を捉える	成長し大人になることで、両親それぞれの性格や事情等をより理解できるようになること	非常に踏み込んだことをいうと、そもそもの話、両方とも結婚するべきではなかったっていうふうにも思ってますけど。＜では、ご両親の性格とか、人となりとか、一人の人間としてみるようになってきて、そう考えるとやはり合わなかつたんじゃないかなと思われっていうことですかね＞はい、そうですね。母のほうに非常に強い性格の方でして、自分の意見を絶対に曲げないタイプの人間でして、なおかつ不良気質なところもございまして、前のお父さんも今のお父さんも両方とも、そういう危ない雰囲気の方でもありました。（②⑦さん）									7	
		離別は仕方なかったと思うようになる	さまざまな状況を知り、両親にとって離別が仕方なかった、離別を避けられなかったと思えるようになること	どっちにしても、多分そんなにうまいこといく夫婦じゃなかつたと思うんで、今、振り返れば、はい。多分16歳のときにしなくても、また高校を卒業してからとか、そういう多分、感じてやってたと思います。＜ああ、そなんですすね＞はい。＜どこらへんが合わなかつたとかあるんですか、お父さんとお母さんで＞性格ですかね、はい。そんな感じじゃないですかね、はい。＜どんな性格というか、すみません＞どんな性格、大雑把と細かい。きれいい好きと。母はきれいい好きで。父はそんなに。大雑把。で、そういう細かいことの性格の、うーん多分、考え方が違うとかでそうなつてましたね。（②⑨さん）									7	

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念の定義	具体例	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	総数
現在の離別に対する思い		いろいろな知識を得る	成長とともにいろいろな知識を得て、両親の離別を違う側面からも捉えられるようになること	本ばかり読んでいたので、理屈っぽい子になってしまうんですけども。そうですね、何かいろんな話が、小説とかでも不仲とか出てくると思うので。新潮文庫とか岩波文庫とか読んでいたような人だったので、昔から多分永遠のテーマだったのだらうなと思うんですけども。ああいえばこういうみたいな知識がどんどん蓄えられていったので、それで多分いい返せるようになったような気がします。<でも、いい返せてちゃんと会話がいっぱい続いていることで、お母様も今では、何とというか、あの人も愛していた人だからっていえるようになったとか、そういう感じなのですかね>うーん、少なからず、私がいうことによって意識が変わっていつているのかなというの少しはありますけれども、多分このまま、何だろ、父が100%悪いみたいな言動を繰り返すことは、何もなかったら多分今でも100%父が悪いになっていたと思うんですけども、だんだん娘2人にいわれて、考えが変わってきているなというのはありますね。(㉓さん)	○			○					2
		離別したからこそ得られた経験がある	離別したからこそ得られた経験があり、その経験が現在の自分にもいい影響を与えていると思うこと	ただ、その人生を考えるって、虐待を受けたからこそ児童福祉に興味を持ったり、結局、私、児童福祉の仕事に就けなかったんですけど、児童福祉に興味を持って大学にいて、卒論も書かせてもらったりとか、自分が卒業した高校に行ったのも、施設でいろいろな人に出会って、いろいろな経験……。親が離婚して虐待を受けた、そういうすべての人生の、それがあったからこそ、今の自分があるのかなっていうような見方を、中学生ぐらいからしていたので、何ていうんでしょうね、どうなってたんだろとは思いつつも、そっちだったら、今いるこの人たちと出会うことはなかったんだよねじゃないですか。(㉔さん)	○			○			○	3	
		よかったことも悪かったこともある/よかったことも悪かったともいえない	両親の関係性や当時の状況、離別後の自分の人生を考え、離別に対して肯定的とも否定的ともいえない	離婚しなかったらっていうのを考えたことないですね。離婚しているから今があるわけだから、そんなを想像する余裕もなかったですね、考えるっていう。だから、やっぱりいい面もあれば悪い面もありました。ありますよ。<そうなんだ。ありがとうございます。そういった何かいい面と悪い面、何か歳を重ねるにつれて、どっちが多くみえるようになったとかは>やっぱ、そのときそのときの出来事によって違いますね。<はい、はい。そのときいいことがあったら、いい面もみえるし>そう。例えばこういう話をできるっていう機会がもたらえていたことは、いい面やと思うし、もしこれが離婚しなかったら、こういうことはなかったわけやから。(㉕さん)	○	○	○	○	○	○	○	○	8

## V 総合考察

### 1 各プロセスの共通点・相違点

本節では、結果と考察で示した3つのプロセスの特徴を記述し、その共通点と相違点について検討していく。そして、各プロセスを比較検討することで、父母の離別に対して子どもに思いが異なるに至る背景を明らかにしていきたい。

#### (1) 各プロセスの特徴

本項では、まず本研究で得られた各プロセスの特徴についてまとめる。

最初に、父母の離別に肯定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス（以下、『肯定的』プロセス）と呼び、「肯定的」プロセスに属する人を「肯定的群」と呼ぶ）の特徴をあげる。「肯定的」プロセスの特徴として、離別前より離別後の生活のほうが安定する（離別後しばらくしてから安定する人も含む）、離別前とあまり変化がない（変わらず安定している）経験をしていた人が多いことがあげられる。別居親との面会交流においても、離別後のほうがいい関係を築けている人が一定数いたことも特徴である。離別後も生活の大変さが継続した場合や、別居親と距離を置くことを選択した場合でも、頼りになる第三者の存在に支えられ、親への期待がなくなり、親を俯瞰的に捉えるようになっている。これらのプロセスを通して、父母が離別に至った理由に深く納得しており、現在家族が平和に暮らせていることもあり、「離別してよかった」と離別に対して肯定的な思いを抱くに至る。

次に、父母の離別に否定的な思いを抱くようになるまでの心理的プロセス（以下、『否定的』プロセス）と呼び、「否定的」プロセスに属する人を「否定的群」と呼ぶ）の特徴をあげる。「否定的」プロセスでは、皆、離別前より離別後の生活のほうが大変になるという経験をしている。離別による悩みを打ち明けられる人がおらず、大変さを1人で抱え続けることで、離別によってネガティブな影響を受けていると感じている。両親間で板挟みになる状況が続いていた人がいたことも、「否定的」プロセスの特徴である。これらのことから、親（少なくとも一方の親）をネガティブに捉え、離別に対して納得がいかない気持ちを抱えている。それによって、離別に対して否定的な思いを抱くに至る。

最後に、父母の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱くようになるまでの心理的プロセス（以下、『どちらともいえない』プロセス）と呼び、「どちらともいえない」プロセスに属する人を「どちらともいえない群」と呼ぶ）の特徴をあげる。「どちらともいえない」プロセスでは、離別前と離別後で生活はよくも悪くも変わらなかったが、なぜ両親が離別したのか納得できていないために「どちらともいえない」人と、自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じる気持ち・両親を俯瞰的に捉えようとする気持ち・離別は仕方なかったと思う気持ち、の3つを循環している状態であるため「どちらともいえない」人がいる。前者においては両親の離別に納得できない気持ちが強いため、後者においては、離別は避けられなかったと思う一方で離別後の悪影響（自分だけでなく家族への



悪影響も含む)も大きかったと感じられているため、離別に対して「どちらともいえない」(肯定的とも否定的ともいえない)思いを抱くに至る。

次項からは、これら3つのプロセスを比較検討した結果、父母の離別に対して子どもに思いが異なるに至る背景に影響を及ぼしていると考えられる重要な論点について考察していく。そのなかで、各プロセスの共通点と相違点、父母の離別が子どもに悪影響を及ぼさないために必要な事項についても記述する。

## (2) 離別前の生活の影響

離別前の生活を子どもがどのように捉えていたかは、離別時に子どもが感じる気持ちに大きな影響を及ぼす。この部分は「肯定的」プロセス、「否定的」プロセス、「どちらともいえない」プロセスに概ね共通している。

離別前の生活は、別居親／両親に振り回されていた生活、同居時からほとんど交流がない別居親、子どもからすると問題のない生活、に大別される。

別居親／両親に振り回されていた生活では、子どもは、別居親の借金や暴力・酒乱・両親の関係の悪さ・両親からの虐待などの悪影響を被っており、「別居親がいること／両親が揃っていることによってこの大変な状況が続いている」と感じている。そのため「毎日離婚してほしい離婚してほしいってお母さんにいってました」(肯定的③さん)と子どものほうが積極的に離婚を望んでいたことや、「いろいろ殴られたりしてたのもあったと思うんですけど…(中略)…(離別することを聞いて)えーっとは思ったんですけど、すごい悲しいみたいな感じはなかったですね、そのときは」(否定的②さん)と特に離別に反対する気持ちは起きなかったことが語られている。

また、同居時からほとんど交流がない別居親であった場合も「何かこうそんなにあんまりお父さんと何やろう、仲良く過ごしたみたいな記憶があんまりなくて、何か別にいなくなるっていうのを聞いても、そんなに。ああ、そうなんやっていうぐらいで」(肯定的⑨さん)というように、特段ショックや反対する気持ちも起きずに離別を受け入れている。

一方で、子どもからすると問題のない生活であった場合、子どもは離別に対して困惑することが多い。「妹だけは先に寝かされていて、普段起きてはいけない時間に私だけ起きてるから、何でかなと思ってたら、食卓で、お父さん、お母さんと私の3人で、お母さんが家を出ていくっていう話を聞きました。…(中略)…そもそも離婚っていう言葉が多分まだわかっていなくて、頭が真っ白になって、まだ小さかったので、両親もそれ以上の踏み込んだ話はせず、よくわからないけど、何か頭が真っ白になったまま寝たっていう感じですね、その日の夜。…(中略)…その次の日にはもう母が出て行ったので。なので、本当に何が何だかわからないまま、父との生活が、どんと始まったという形で」(肯定的⑬さん)というよう

に、突然離別についての説明があり、状況をのみこめず困惑した状態のまま、離別後の生活が始まることもある。このように、離別前の生活が安定していて、子どもからすると問題のない生活である場合、離別についてより丁寧に説明していくことが必要になる。この点は、次項（(3) 離別に関する説明）で改めて述べる。

離別前の生活をどのように捉えていたのかは、子どもの発達段階によっても大きく異なる。DVや虐待といった暴力があり、別居親から子どもへの悪影響が甚大な場合には、幼少期であっても子どもは離別して「ほっとする」ことが多い。しかし、借金や性格の不一致といった理由で離別に至る場合、幼少期の子（主に小学校低学年頃までに離別を経験した子）は両親間の不和をそこまで深刻なものとして認知しておらず、離別に非常に困惑したという経験が多く語られている。一方で、中学生・高校生の時期に離別を経験した子で、両親間の不和が長く続いていた場合には、喧嘩内容や不和の原因も概ね察知しており、いずれ離別するだろうことを予測していることが多い。発達段階の影響は、次項以降で改めて検討する。

### (3) 離別に関する説明

離別に関する説明があるかないか、ある場合、どのように説明されるかによっても、子どもの離別に関する気持ちや納得感に影響を及ぼす。この部分も、3プロセスに概ね共通しているが、一部異なる部分もみられた。

まず、離別に関する説明がない場合である。子どもが大きく、両親間の喧嘩や不和の原因を察知していたり、離別に至る決定的な瞬間をみていたりした場合には、説明がなくてもある程度納得して離別を受け入れることもある。一方で、何も説明のないまま別居親が去っていくなど、何が起きているのかわからないまま困惑しているという経験をしている人もいる。⑥さん（肯定的）は、離別時の様子について「ある日突然、まあ、母には説明があったのかもしれないのですが、私には特に何もないうまま、そのまま出ていってしまいました。（中略）（母に父のことを）聞いても答えてもらえないので、何が起きたのかわからない。祖父母に電話しようにも何というのでしょうか、その当時は携帯とかもないので、あとう、どう連絡をとっていいかもわからないので、誰に助けを求めていいのかもわからなかったですね。それこそきょうだいとか親戚も近くにいなかったの、はい。それなので、何をどうしたらいいのだろうっていうのをずうっと悩んでいました」と語っている。この場合、子どもの困惑や悩みは大きく、自分なりに何とか状況を把握しようと頑張るものの、聞いても答えてもらえない・何が起きているのか理解できないために、「自分が悪かったから離婚したのかも」と自分を責めるようになるなど、後々の人生にも悪影響を及ぼすことが多い。

離別することに関する説明（父母が離れて暮らすことや、引っ越し場合にはその説明など）はあるが、離別理由までの説明はない場合も多い。子どもが大きく、両親間の喧嘩や不和の原因を察知している場合には、ある程度納得して離別を受け入れるが、子どもが年少であったり、離別前の生活が安定していたりする場合には、「何で離別しなければならないの？」

という困惑が大きくなりやすい。例えば、⑱さん（否定的）は、「特に自分は父が好きだったので、離婚はしてほしくなかったのですけれども、ただ母が、もうあの人は、何というのですかね、話し合いができないから、もう無理なのだの一点張りで、子どもの自分が離婚をしてほしくないという話をしても、一切受け付けてくれないような態度だったり、話の持っていく方を母はしていました」と語っている。離別理由がわからないために離別に納得できないと感じていた子は、⑱さんのように頑張って自分の意見を伝えようと試みるが、それがうまくいかないことにより、絶望感に至ったり、離別によるネガティブな影響を長期的に感じたりするようになる。

離別に関して納得できるような説明がなかったことによる悪影響は、㉓さん（肯定的）も語っている。「親の離婚の原因っていうのはちゃんとわかってたほうが、子どもは未来的にはいいなと思います。…（中略）…小学生でも、ある程度は理解しているんだよって、わかってないふりしてるのは親だけだよっていう。わからない言葉だったとしても、真剣に説明をしてくれてるっていう事実はきっと残るから、そのけじめ。けじめというか区切りというか、だらだらだらだら相手を思い続けなきゃいけないのって、すごい疲れるんですよ。今も会いたいな会いたいなって思うけど、結局会おうと思えば、戸籍を調べて、産みの親までいけるじゃないですか。でも、やっぱりいけないのは、結局そこに答えがないから。会って、「いやいや、原因はあんたが嫌いだったのよ」なんていわれたら、もう立ち直れないと思って、今さら聞きたくないみたい。そういう妄想ばかり膨らんじゃう。…（中略）…明るい未来の想像には一切つながらないけど、会いたい、知りたいっていう思いだけは残ってしまうので、これは自分がおばあちゃんになるまで残り続けるんだろうなっていう。この呪縛を解いてあげられる立場なら、解いてあげてほしいなと思います」という語りからは、子どもが必要としているときに必要なケア（説明やその後のフォローなど）が得られなかったこと、その苦しみが今でも「呪縛」のように㉓さんを苦しめ続けていることがうかがえる。㉓さんは、父母以外の人から離別理由を聞くこととなったが、その説明はやはり親自身からほしかったという。「母が出ていくっていう、その話のときに、あなたたちが悪いんじゃないんだよ、お父さんとお母さんが反りが合わなかったり、何でもいいんですけど、だから、お母さんは家を出ていくんだよっていう、その一言は、出ていくときに欲しかったなと思いますね」と語り、「子どもは悪くない」という言葉がなかったからこそ、延々と「自分がお皿を片づけなかったから」「妹と喧嘩しちゃったから」お母さんが出ていってしまったのかも…と自分を責め続け、それによってさらに聞きたいことを聞けなくなってしまったという。そして、そのいえなかった思いが㉓さんのなかでくすぶり続け、今でも呪縛のように残っていることが語られていた。

このように、離別に関して適切な説明がない場合、その後の子どもの人生に長期的にネガティブな影響を及ぼし得る。この点は次項（(4) 子どもの意思確認・意見表明）で改めて述べる。

一方で、離別理由や今後の生活の見通しまで含めて離別の説明があった場合は、子どもはある程度納得して離別を受け入れる。このような説明の仕方は、「肯定的」プロセスでのみ語られている。なぜ離別するのか、これからどうなるのかといったことまであわせて説明があり、かつ子どもの意見を聞く場も設けられることにより、子どもの離別への納得感が高まっていく。その時は完全に納得できなくても、聞いたら親は説明してくれると思えることで、聞きたいときに離別について質問することができ、より納得感が高まると考えられる。

なお、本研究対象者から語られた説明の場の形態として、父母同席で説明があった場合、父母それぞれから説明があった場合、父母のどちら一方（多くは同居親）から説明があった場合、第三者から聞いた場合があった。一方で、子どもにとっては離別説明の場やその後の生活において子どもの意見をいやすい雰囲気も非常に重要である。そのような雰囲気が形成されるよう、親自身が余裕を持って子どもと対話できるような説明の場の形態をとることが大切であると考えられる。

さらに、離別後の生活において離別理由や別居親の話がどの程度できるかも子どもの納得感に影響を及ぼす。否定的群、どちらともいえない群はもちろんのこと、肯定的群であっても、聞きたいのに別居親の話ができなかったことにより、1人で悩みを抱えることが多くみられている。離別や別居親の話題をタブーにしないことで、子どもは成長に応じて離別理由を理解し、離別に納得できるようになることが多い。

また、次項（(4) 子どもの意思確認・意見表明）でも述べるが、離別の説明は一度きりで終わらせるのではなく、子どもの発達段階や理解度、納得度にあわせて何度も繰り返し説明していくこと、その時々で子どもの疑問にきちんと答えていくことも大切である。

#### (4) 子どもの意思確認・意見表明（納得感）

子どもの意思確認（父母どちらと住みたいか、学校をどうするか、苗字をどうするか、など）は、どのプロセスにおいても、行われている場合もあれば、行われていない場合もある。

前項（(3) 離別に関する説明）で述べたとおり、離別することについて何らかの説明があった場合には、その場で、あるいはその後の生活のなかで、子どもの意思確認がされることも多い。親が選択肢を与えて聞いてくれた、個別に話す時間をとってくれた、かなえられる希望はかなえてくれ、どうしてもかなえられない希望については理由をつけて説明してくれた、といった経験は、子どもにも「親がしてくれてよかったこと」として残っているようであった。親が子どもの意見に真摯に耳を傾けようとする姿勢は子どもにも伝わっており、そのような姿勢があると、子どもは意思や意見を伝えやすくなっていた。

一方で、離別に関する説明自体がない場合、説明はあったが決定事項を伝えられるだけで、子どもへの意思確認はない場合もある。子どもにとって納得できるような離別理由がない

／説明されていない場合には「離婚してほしくない」「(お母さんと住むよういわれたが)お父さんと住みたい」と、子どもなりに懸命に意見を主張する場合もあるが、多くの場合、それは聞き入れられず、子どもは辛い思いを抱えることになる。

このように意見が聞き入れられずに辛い思いを経験した人として、㉔さん(どちらともいえない)の例を紹介する。㉔さんは離別当時、離別することは聞かされたものの、その理由(母の不倫)については説明がなく、納得できない思いを抱えていたという。どうしても離別するなら父と一緒に住みたいことも主張したが、母も㉔さんを引き取ることを譲らず、話し合いは平行線をたどり、最終的に父が折れる形で㉔さんは母に引き取られることになった。その当時の状況について、㉔さんは「みんながバラバラになるのが嫌だったというのと、あとは父親がいろいろと、キャンプに一緒に行ったり、行事に行ったり、買い物に行ったり、父親と過ごす時間が長かったので、あとは父方の祖父母が、例えばスイミングの、習い事の送り迎えとかしてくれたりとか、そういう父方の祖父母や、父親と離れるというのがすごい嫌だった。何でお父さんと離れなくちゃいけないの。でも、当然、小学校1年生の子どもに、「私が不倫しました」なんていうことはないでしょうし、不倫なんていわれてもわかんないですしね、子どもには。なので、何ていうんでしょう、父親も私を悲しませないために、いい嘘をついたというんですかね。アメリカに行かなくちゃいけなくなったからっていう」と語っている。最終的に父方祖父から「残念だけど父とは暮らせない」といわれたこと、父から「アメリカに行くから会えなくなるけど、いい子にしていたら会いに行く」という嘘の説明を受けたことにより、㉔さんは状況を変えられないことを知り、納得いかない気持ちを抱えつつも離別後の生活が始まることとなった。㉔さんのように、納得いく説明がない場合には、「とにかく説明がほしかった」「その年齢の子どもにわかるように(嘘をつくのではなく)説明してほしかった」という声が多かった。

また、離別に関する説明の場、子どもの意見を聞く場の雰囲気も重要である。㉑さん(否定的)は、6~7歳の頃の、離別の説明を受けた場の雰囲気の重々しさが未だに印象に残っているという。「なんとなくすごく、何か心のなかが揺れ動くといいますか、胃が締まるといいますか、すごく変な緊張感といいますか、そういうのを感じましたね。(中略)厳かというんですか、すごく重々しい雰囲気だったので、何かいわれても安心感を感じないというんですか、そういうのはありました」(㉑さん)と語っている。辛うじて、別居親とも今後会えるのかたずねることはできたものの、「会えるよ」といわれても安心できず、ショックと悲しさで圧倒され、他に聞きたいことも思い浮かばなかったという。また、㉑さんは、当時の悲しさや絶望感は癒される機会がないまま現在に至っていると感じている。その後継続して面会交流はあり、父母と子ども全員で会う機会もあったものの、いつまで経っても子どもを通してしかやりとりできない両親をみることにより、当初の悲しさ・絶望感が、徐々に両親への怒り・ネガティブな感情へと変化していった。そのような自分の傷つきの癒されなさ、両親へのネガティブな感情から、離婚に対して否定的な思いを抱いていることを語っていた。

㊦さんの例は、説明の場の雰囲気とあわせて、小学校低学年という発達段階による影響もあったと考えられる。(2)(3)でも述べたとおり、子どもの発達段階に合わせた説明や、フォローも重要である。年少の子どもの場合、離別に対するショックや困惑をうまく言葉で表現できなかったり、㊦さんのようにその場の雰囲気に圧倒されてしまったりすることも多い。さらに、子どもは両親の様子をよくみていて、「この話は聞いちゃいけない」と忖度して、自分1人で悩みや疑問を抱え込んでいることも多い。㊦さんは「表現に気を付けなければいけないですけども、ちゃんと包み隠さず、ちゃんというということと、時間をとって定期的に気持ちの面を聞くというのは大事なのかなと思いますね。聞いているつもりでも聞いていないというのがあると思うので、定期的に、特に小さいうちは気持ちの面で、直接そのことを聞くというのは、嫌なことを何回もしつこく聞くのってよくないかなと思うのですけれども、日々の生活のなかで心情的に変化がないのかどうかみたいところは、逐一チェックしていたほうがいいのかと思いますね。どこでわだかまりを持っているかというのは、小さい時ってそれがわだかまりというのがわからないので、大きくなって初めて、わだかまりかと思うのですけれども、わだかまりを何十年後に気付いても解消できないので、そのときどきでないと、わだかまりは解消できないので、極力そのとき気付いてあげられるように、いろいろしてあげなければいけないのかなあと思いますね」(否定的㊦さん)とも語っている。大人側から子どもに「聞きたいことはある？」とたずねる、発達段階にあわせて丁寧に何度も説明をする、繰り返し話せる場を作る、といったフォローが大切であり、そのようなフォローがあることによって子どもの傷が癒され得ると考えられる。前項((3)離別に関する説明)の㊧さんの語りにもあったように、「離別は子どものせいではない」ことがきちんと子どもに伝わっていない場合、それは呪縛のように子どもを苦しめ続ける可能性もある。丁寧に何度も説明する、話しやすい場を作ると同時に、「離別は子どものせいではない」ことを、親が子どもにしっかり何度も伝えていくことも大切である。

## (5) 離別後の生活

(1)で述べたとおり、離別後の生活がどうであったかは、現在の離別に対する思いに大きな影響を与えている。

離別前の生活と比べて離別後の生活のほうが安定した、当初は大変だったがしばらくして生活が安定した、という語りは肯定的群で多くみられている。この「安定」には、別居親の暴力から解放された、経済的に安定した、両親の喧嘩をみなくてよくなった、離別後親が元気になった、などの内容が含まれている。離別前と比べて離別後のほうが子どもにとって落ち着いた生活を送れていると感じられることによって、離別に対する肯定的な思いにつながっていくといえる。

離別前と比べて生活状況が悪化した、生活で大変な状況が継続した、という語りは、否定的群、どちらともいえない群で多くみられている。この大変な状況には、経済的な大変さ、

進路に影響が出る、虐待を受ける、いじめにあう、離別の影響を受けて不安定になった家族の行動に振り回される、離別による感情を誰にも打ち明けられない、などが含まれている。特に、離別と受験の時期が重なったり、経済状況の悪化により希望進路を変更せざるを得なくなったりした場合には、その後の人生全体への悪影響と感じられることが多いようである。このように、離別前と比べて、離別後の生活状況が悪化したり、その状況が長く続いたりする場合には、離別による影響をネガティブに評価するようになる。「肯定的」プロセスのなかにも生活が大変な状況が継続したと語る人がいたが、彼らは頼りになる第三者の存在に支えられ、親への期待がなくなること、どこかのタイミングで離別に納得できるようになることによって、離別を肯定的に捉えるようになっていた。

離別前と比べて生活に変化がなかった、という語りは、「肯定的」プロセスと「どちらともいえない」プロセスでみられている。しかし「肯定的」プロセスでは、生活に変化がなかったことを肯定的に捉えるような語り（「変化しなかったからよかった」など）が多かったのに対し、「どちらともいえない」プロセスでは変化がないことを必ずしも肯定的に捉えていないと思われる語りもあった。㊦さん（どちらともいえない）の例を紹介する。㊦さんは「離婚したからといって、そこからもうすぐに、絶縁という感じじゃあなかったもので、自分的にはそんな、離婚しちゃっているんですけど、別にしなくてもよかったんじゃないかなって。結局連絡とかもとって、お金の問題とかも両親で話しあっていたみたいで、別に紙（離婚届）を出さなくても、うちはよかったんじゃないかなってというのはあったんですけど。そうですね。なので気持ちがよくも悪くもなってはいないんですかね」と語り、両親との関係性も含めて離別後の生活に変化がなかったことにより、なぜわざわざ離別したのか、と離別に対して納得できない思いが残っているようであった。

## (6) 面会交流

別居親との面会交流の体験も子どもによってさまざまである。どのプロセスにおいても面会交流があった場合と交流自体がなかった場合が聞かれた。ここでは、各プロセスで出てきた面会交流があった場合の内容から、【子どもにとって無理なく継続する面会交流】と【子どもにとって負担となる面会交流】とは何かについて考察する。

### 【子どもにとって無理なく継続する面会交流】

まず、特筆すべきは、各プロセスすべてに無理なく継続する面会交流を経験した子どもがいたことである。無理することなく継続した定期的な面会交流では、(a)子どもは自分のペースで会いたいと思う時に交流できていたこと、(b)ある程度高年齢になった子どもと別居親は誰も介さずに直接連絡していたこと、(c)子ども自身が楽しいと自然に感じられる交流であったこと、(d)同居親が面会交流後に不機嫌にならないなど行きやすい環境を作ってくれていたことなどが語られている。

#### (a)子どもが自分のペースで会いたい時に交流できていたこと

「(面会交流は)離婚してすぐとかはあまりなくて、でも、お盆の時期とか年末年始のお正月の時とかは母方の家族とも会うというのをずっとしてるので、それには行ってました。そのときに行くという感じで。そういう集まりのときに行って会う。墓参りとかに行って会うみたいなのはありましたね。でも、それも年に多分3回か4、5回で、高校のときもそんなに頻繁に行ってなくて、大学になって私が下宿し始めて、そのときもそんなにないんですけど、実家に帰るときに、父のところに戻る時に母のところにも帰るというのをやって、その辺ぐらいから多分、母とも打ち解けてではないけど、ちょっとずつ気まづさはなくなっていった気がします。…(中略)…私はそうだった(回数は少なめだった)んですけど、妹は頻繁に行ってました。妹は父に怒られたら母のところに行ってというので、最終的には母と一緒に暮らすことになったんですけど、その辺の行き来が結構、頻繁に妹はありました(肯定的④さん)」

こういった語りからはきょうだいによっても交流したい頻度が異なり、子どもが自分のペースで会いたい頻度に親が柔軟に対応していたことがわかる。

このように、無理なく面会交流を継続してきた子どもは、自分のペースで会いたい時に交流ができていたと考えられる。

#### (b)ある程度高年齢になった子どもと別居親は誰も介さずに直接連絡していたこと

「携帯とか、家の電話とかで、連絡は、とりあえず(とっていました)。週に1回ぐらいは会っていた気がします、確か(肯定的①さん、離別当時12-13歳)」「父親は介さずに、母と。当時携帯持たせてもらってたんで、それでやりとりして、行くわ、みたいな(肯定的⑭さん、離別当時11-12歳)」「多分2週間に1回ぐらいは、天気とか気温のこととか、そういうことで、気軽なことで連絡はしてはしまして、でもやっぱり、もう母は遠方に住んでいたんで、会うってなると、なかなか会えないですかね。<2週間に一遍ぐらいは、電話とかメールはしていたけれど、会うとなると、どれぐらいの頻度でしたか>そのとき、母が1年に1回、地元の方に戻ってこれるときに会っていたというぐらいで、1年に1回あるかないかという感じですかね(どちらともいえない⑳さん、離別当時15-16歳)」

こういった語りからは、思春期以降などある程度高年齢になった子どもと別居親は誰も介さずに直接連絡していたことがわかる。誰かを介さずに直接やりとりできることは、(a)子どもが自分のペースで会いたい時に交流するためにも必要なことだと考えられる。一方で、直接のやりとりは、親からの自由なアプローチもできるということであり、親が頻繁に連絡をとり、子どもが負担に感じるという可能性もあることは考えておく必要があるだろう。本調査から、「無理なく継続する面会交流を経験したと考えられる子どもはこういった経験をした」ということはいえるが、「同じような要素を揃えれば、誰もが無理なく継続する面会交流を経験できる」ということは難しい。小さい頃は同居親や第三者が間に入って面会交流の調整を行い、高年齢になってきたので直接連絡に移行する場合でも、高年齢時に離別し面会交流が始まる場合でも、自分の連絡先を伝えて直接連絡したいかまず子どもの意見を聞くということは大切なことだろうと考える。



### (c)子ども自身が楽しいと自然に感じられる交流であったこと

「中学校の時とかは別に普通に毎月ご飯食べにいったり、あと、お小遣いくれたりしてたんで、1 か月 2000 円とか 1000 円とか、なんで、いい人やなという感じですね、そのときは（肯定的⑩さん）」「やはり夏休みとかに山とか川とかに連れていってくれたことですね。それは、やはり思い出として今もあるので、いい経験になったのではないのかと思っています。＜それは、お父様ですかね＞はい、そうです。＜一緒に何か＞キャンプとか。＜宿泊もして一緒に遊ぶ機会があったというのはとてもよかった＞それは、よかったのかなと思います（否定的⑳さん）」

こういった語りからは、子ども自身が楽しいと自然に感じられる交流の大切さが伝わってくる。また、肯定的群で別居親が母親だった①さんや⑭さんからは、別居親が日常生活の買い物にまめにつきあってくれたことや文化祭などの学校行事に来てくれたことなどもあげられた。このことから、子ども自身が楽しいと感じられる他、子どもの生活に寄り添った面会交流の内容は子どもの助けになると考えられた。

### (d)同居親が面会交流後に不機嫌にならないなど行きやすい環境を作ってくれていたこと

5人きょうだい2人と3人に分かれて両親と同居した④さん（④さんは父親と同居）は次のように語っている。「行きやすい環境作りみたいなのは、あったほうがいいと思います。向こうに行っても何か後ろめたくないとかというのは、あったほうがいいと思います。父はあまり何もいわなかったんで、私は行けてました。…（中略）…母のほうは態度に出てたんだと思うんですけど、小さい頃は。…（中略）…＜弟さんや妹さんが、お母さんの家からこっちのお父さんの家に来ようとするときには、ちょっと何か＞ちょっとあったと思います。ちょっといい顔して帰ってきたから、ちょっと機嫌悪かったり、みたいなのは、ちらっと聞いた気がするんですね、小さい時に。＜ごきょうだいから＞はい。そういうところ、今もたまに気をつかって、お父さんの家で楽しかった話とかはしないようにはしています、お母さんの家で（肯定的④さん）」また、⑭さん、⑲さんは次のように語っている。「多分父親的には、離婚をしたけど子どもたちの母親であることは変わらないみたいな、確かそういうスタンスだったと思いますね（肯定的⑭さん）」「いろいろなところに連れていったりはしてもらったので、父との関係は良好だったわけで、そこまで何かマイナスな記憶というのはないですね。＜マイナスな記憶はなし＞はい。＜何か交流に行くときに、お母様との関係がちょっとぎくしゃくするとか、そういうこともなかったわけですか＞そういうのはなかったですね。＜ではお母様も、もう行っておいでみたいな感じで＞まあ、そうですね（否定的⑲さん）」

上記の語りからは、同居親が面会交流を認めている態度が子どもが面会交流をしやすい環境を作っていると考えられた。

このように、無理することなく継続した定期的な面会交流では、(a)子どもは自分のペースで会いたいと思う時に交流できていたこと、(b)中学生以上などある程度高年齢になった子どもと別居親は誰も介さずに直接交流していたこと、(c)子ども自身が楽しいと自然に感

じられる交流であったこと、(d)同居親が面会交流後に不機嫌にならないなど行きやすい環境を作ってくれていたことなどが語られている。このような交流は、肯定的群、否定的群、どちらともいえない群それぞれにみられた。

無理することなく継続した定期的な面会交流をしていてもこのように両親の離別に思いが異なる背景の1つとしては、両親間の関係性が考えられる。肯定的群の子どもで、無理することなく継続した定期的な面会交流を経験した子どもの両親間の関係性は、離別したとはいえ、子どもの教育に関する相談や仕事の愚痴をいいあえるなど比較的良好であった。一方で、無理することなく継続した定期的な面会交流を経験した子どもでも、否定的群の子どもの両親間の関係性は、葛藤が高いと思われるものであった。否定的⑩さんは次のように語っている。「いろいろなところに連れていったりはしてもらったので、父との関係は良好だったわけで、そこまで何かマイナスな記憶というのはいないですね。＜マイナスな記憶はなし＞はい。＜何か交流に行くときに、お母様との関係がちょっとぎくしゃくするとか、そういうこともなかったわけですか＞そういうのはなかったですね。…(中略)…ただですね、父が養育費はちゃんと払ってくれてはいたのですけれども、やはり遅れがちになっていた時とか時期がありまして、そのときに母親から、3人いる自分の兄弟のなかで自分だけ、ちょっと父と仲が良かったというのもあったので、母親からではなくて、私から父に対して催促をかけるようなことを命じられたのが何度か。＜それが嫌だったとか、そういうことですね＞そうですね、当時は拒否していたのですが、何かそこを強制させて、やらされてました」

このように、両親の間で板挟みになったり、子どもを通してしか両親がやりとりできない状況、つまり、離別後の両親間の葛藤に子どもが巻き込まれ続けてしまうと子どもはだんだんと離別によってネガティブな影響を受けていると感じるようになり、ひいては同居親、別居親双方にネガティブな感情を持つようになっていった。本調査からは、無理することなく継続した定期的な面会交流を続けたとしても両親間の葛藤が高くその板挟みになっている場合は、子どもに負担が生じやすいという可能性が考えられた。両親間の葛藤を低めるために両親がどのようなことに取り組むとよいか、社会がどのような支援を行っていきけるかについては今後の検討課題になるだろう。

#### 【子どもにとって負担となる面会交流】

子どもにとって負担となる面会交流は、肯定的群、否定的群でみられた。子どもにとって負担となる面会交流では、(a)離別前後の別居親の態度が影響を与えていること、(b)連絡なく別居親が突然現れたり、警察を呼ぶほどの騒ぎになること、(c)子どもの意向を無視した交流であったこと、(d)交流自体は楽しかったがその後離れないといけないという状況の辛さ、などが語られている。

#### (a)離別前後の別居親の態度が影響を与えていること

顔もみたくないといわれて別居親が出て行った後に面会交流があった⑥さんは次のように語っている。「中学校2年生で父の家に行ったのは最後なのですけれども、そのときも全

身に蕁麻疹が出てしまって、病院に緊急で運ばれるぐらいちょっと、多分精神的に負担だったみたいで。病院に行ったら蕁麻疹は収まってしまったので、食べ物とかではないねということで（肯定的⑥さん）」また、離別前に別居親から暴力を受けていた⑦さんは、「（別居親の入院先に）お見舞いに行くのとかが嫌で。結構泣いてた時期もあったので。…（中略）…行きたくないっていったのはありますね。それは、ちょっと嫌なことだったかもしれないですね。…（中略）…多分、母親はそれほど（別居親を）嫌っていなかったので、多分、母と子どもたちで、ちょっと気持ちの違いがあったんだと思うんですけど（肯定的⑦さん）」と語っている。

このような語りからは、離別前の別居親の言動が子どもの心に傷を与えており、その経験が影響して子どもが面会交流を負担に感じている様子が伝わってくる。

また、⑥さんはその後の交流でも、次のような経験もしている。「中学校の卒業式とかに来てくれたときに、私は高校の第一志望には合格ができませんでしたけれども、そのことをすごく何というのでしょうか、『勉強頑張らなかつたお前が悪いんだ』というようなことを急にすごく罵倒していったり。何でしょう、何かにつけて『お前が悪いんだ』というのを、結構両親ともいうのが癖のようにあったので、そのときにもいわれて。それをちょっと残したまま 27 歳の時に病気になった時にも、『病気になったのはお前が悪いんだ』って、10 年ぶりに会った父親にいわれて、『えっ』となってびっくりしました（肯定的⑥さん）」また、離別後中学生になるまでは交流を続けていた⑨さんは、「すごいお父さんのなかで、めっちゃ子どものまま私が多分成長してないんやろうなっていう感じで、ものすごい子ども扱いじゃないですけど、をされるのが多分、ちょうど微妙な時期（思春期）の私にとっては、…（中略）…居心地が悪くて、それで余計に一緒にいたくないっていうので、会うのいいわみたいな感じになったんやと思います（肯定的⑨さん）」と語っている。

⑥さんのように、面会交流中に別居親から傷つく言葉をいわれるような交流は子どもにとって負担になる。また、⑨さんのように、思春期に行われる面会交流では、別居親の何気ない言動に子どもの気持ちが左右され、負担に感じる可能性があることも理解しておく必要があるだろう。

#### (b)連絡なく別居親が突然現れたり、警察を呼ぶほどの騒ぎになること

「（別居親が突然来て）チェーンをしてるんで、入ることはできないんですけど、ポストが外れたりとかしたんで、そこからのぞかれてたりとかはしてました。＜すごいこわいですよね＞そうですね（肯定的③さん）」「（面会交流が中断して数年後に、通学路に突然父が現れ）嬉しいとかそういった気持ちはないです。ただただおっかないなっていう。＜おっかない＞こっちの情報を知ってたのもこわいですし、そうやって通学前に押しかけてきて、サラリーマンだったはずなのに金髪に染めたお父さんがやってきて。＜急なことですごいびっくりしたし＞びっくりしましたし、こわかったです。＜こわかった＞その当時、タメ口で話せばいいのか、敬語で話せばいいのかわからなかった。本当にめちゃくちゃな会話してましたね（どちらともいえない⑦さん）」

こういった語りからは、連絡なく急に別居親が来ても戸惑いが大きく、子どもに負担がか

かる可能性が考えられる。また、③さんは、別居親が何度も突然家に来ることから警察を呼ぶこともあった。別居親が突然家に来る際に③さんがいないこともあったが、その様子は家族から共有され、別居親に恐怖心を持つに至っている。

#### (c)子どもの意向を無視した交流であったこと

「父親が、山が好きで登山が好きだから、それに付きあわされて、何回か山は登ったりとかはしました。…(中略)…<そこでお父さんがいろいろ、学校、どうだ最近とか、そういうのを聞くわけでもなく>聞くわけでもなかった。どちらかという、逆に放置されていた。何か仕事で急な用事があると、先に帰るからっていわれて頂上で置いて帰られたこともありました。頂上付近で置いていかれて、しょうがないから知らない人に事情を話して、テントで一夜明かして頑張って帰りましたけど。死にたくない思いで(否定的⑱さん)」「基本的には、やはり自分主体でしか考えてくれなくて、私がどうしたいみたいなのかを、常に聞いてくれない気がしていました、ずっと。<それは離婚後にプレゼントを送ってくるのに対してもそうだし>そうですね、何か押し付けられている感じしか、基本、しないのですよ、子どもの頃から。それはありますね(否定的⑲さん)」

こういった語りからは、別居親のしたいことが優先され、子どもからすると楽しくない／しんどい思いをする交流であることがわかる。

#### (d)交流自体は楽しかったがその後離れないといけないという状況の辛さ

この交流は別居親との交流自体は楽しかったという点で、前述した(a)～(c)の交流とは異なる。「会いたいし、楽しいし、うれしいけど、帰りの車に乗ったら、その楽しいひと時は終わりじゃないですか。別々の家に帰る。じゃあ、このひと時って何なんだろうみたいな。だって、会ってくれるし、心配してくれるし、プレゼントもくれるし、優しい言葉もくれるのに、いらんなんだみたいな。物ではないけど、結局私たちはいらん子なんだよねみたいな。じゃあ何で、何なんだろうねじゃないけど、矛盾がうまくいい表せないんですけど、何でというか、天国から地獄じゃないけど。というのも何となく薄々感じてたから、もしかしたら回数が減ってたのかもしれないし、態度に私たちも出してしまうている。最初はうれしかったけど、だんだん話すこともなくなるし、何の時間なんだろうみたいなものになっていったのかなって、何となく思います(肯定的⑲さん)」といった語りからは、子どもの複雑な気持ちが伝わってくる。

特に⑲さんは、子どもからすると問題ない生活をしており、小学1-2年生時に離別を経験した。また、離別理由は聞かされておらず、子どもの意見をいえる場や尊重してもらえる場はなく、「離別は自分のせいなのかもしれない」といった感情を抱えていた。「結局私たちはいらん子なんだよね」といった感情も離別理由の無さや子どもの意見をいえる場がなかったことが影響している可能性が考えられる。

また、説明といった観点では、“なぜ面会交流をするのか”という説明も大切である。離別前別居親から暴力を受けていた⑦さんは、「なんで母親は自分たちにこんなことをするのかとか、僕の場合は会わせたりするの、どちらかというやめてほしかったので。そういうと

ころをやっぱり、ちゃんと話しあったほうがいいのかなっていうふうに、親と子どもが話す機会ってというのは、あったほうがいいのかなっていうふうには思いますね。…(中略)…僕とかはやっぱり会いたくなかったんで、そういう子どももいると思うので。うーん、そこは寄り添ってあげてもいいのかなっていうふうには思いますね」と語っている。

特に面会交流を嫌がっている子どもには、細やかな説明が必要になるだろう。そして、何が不安でなぜ会いたくないのか細やかに意見を聞いていくことが大切だと考えられる。離別前後の別居親の態度から面会交流を嫌がる場合、離別前後の同居親の態度から面会交流を嫌がる場合、両親の高葛藤に巻き込まれるため面会交流を嫌がる場合など、子どもが面会交流を嫌がる背景はさまざまであり、複数の要因が併存している可能性もある。さらに、意見を聞かれても、子どもが答えられる場合もあれば、答えられない場合、答えられたとしても本心ではない場合も考えられる。こういった子どもの繊細な心の動きを、子どもの言動はもちろんのこと、両親の言動、家族内の関係性を見立てながら適切に捉え、どのようなかわりがあるかその家族に必要であり、子どもの利益につながるかという視点を持つことが支援者にとって重要となってくるだろう。

前述してきたように、子どもにとって負担となる面会交流では、(a)離別前後の別居親の態度が影響を与えていること、(b)連絡なく別居親が突然現れたり、警察を呼ぶほどの騒ぎになること、(c)子どもの意向を無視した交流であったこと、(d)交流自体は楽しかったがその後離れないといけないという状況の辛さ、などが語られている。このような交流は、肯定的群、否定的群で語られており、どちらともいえない群も、成長してから別居親と会う機会があるなかで、同じような体験をすることがあった。本調査の子どもたちの語りからは、面会交流はすばらしいというものではなく、その内容(親の態度や交流内容)が重要であることが伝わってくる。

一方で、別居親は日々の生活をともにしている同居親と異なり、「今日子どもに厳しい言葉をいってしまった。明日説明してフォローしよう」といった機会がほとんどないといえる。面会交流という限られた時間のなかで子どもと関係性を築いていかなければならないという点で非常に難しい立場であると考えられる。別居親をどう支援し、子どもと良い関係性を構築していってもらうか、これは社会として取り組んでいくべきテーマであると考えられる。

## (7) 養育費

養育費に関しては、各群ともに、養育費をきちんともらっていることが子どもにポジティブな影響を、養育費をもらえていない、もしくはもらえていたとしても少なすぎるのが子どもにネガティブな影響を与えていると考えられた。

⑥さんは、面会交流では別居親から望むような対応を受けられていなかったが、養育費はきちんともらっており、かつ⑥さんが病気で入院した時に入院費や個室代を別居親が出してもいいとってくれたことについて、「やはり心配してくれている、まったく心配してい

ないのではないかと思っていたのが、実は少しは心配してくれたんだなっていうところは、はい、うれしいとか思いました（肯定的⑥さん）」と語っている。

一方で、養育費がまったくなかった②さんは、「暗い、雰囲気、しんどくて、母親がね。やっぱ、こう、笑顔もないんすよ、やっぱり。毎日毎日毎日、こう、遅くまで働いてたら余裕もないんで。だから気持ちだけで何とかなるっていうレベルじゃないんで、お金あるのと、ないので全然違うんすよね、生活。精神的なところも。だから、もう、お金は払えよっていう感じです（否定的②さん）」と語っている。また、養育費が決められた額より少なかった⑩さんは、「毎月2万円を20歳になるまで払ってたというのは聞いてましたが、それは裁判でいわれた金額より全然少ないと。…（中略）…それはとても少ない金額だし、何も。それで払っているって自分で満足されてほしくないなとは思ったし、それも嫌でしたね、そんな少ない金額がくるっていうことが。＜少ない金額でそういう気持ちになられるぐらいだったら、払わないでくれたほうが良いという感じ＞それはありました（否定的⑩さん）」と語っている。このように、養育費をもらえていない、もしくはもらえていたとしても少なすぎる場合は、別居親にネガティブな印象や感情を持つことに影響を与えていた。

#### (8) 第三者の存在・かかわり

第三者の存在とは、祖父母や親戚、友人、学校の先生、近所の人などのコミュニティといった子どもを取り巻く親以外の存在のことを指す。肯定的群では、特に第三者の存在や第三者への感謝の気持ちが多く聞かれた。

「おばあちゃんには、ほんまにいろいろ助けてもらい、経済的にも。助けてもらったかなと思いますし、かわいがってもらったなって。遠方なんで、そんなしょっちゅう会えるわけではなくて、でも、夏休みとかにおばあちゃんちに行ったりするのは、すごい楽しみでした。ご近所さんには恵まれてたなと思います。父と母と一緒に住んでいたときの近所の人とみんなキャンプ行ったりとか、バーベキュー行ったりとか、父抜きで。…（中略）…母も周りの人に助けてもらってました（肯定的②さん）」「もともとお父さんの友だちなんですけど、お父さんの性格を知ってからは、お父さんと友だちをやめて、お母さんとか私とかを遊びに連れていってくれたりとかしてた人がいるので、その人に感謝してますね。しょっちゅう、お父さんよりも遊んでくれた思い出があるんで（肯定的③さん）」「結構、家のことをよくやってくださっていた家政婦さんみたいな人が、何か家のことだけじゃなくて、私たちの何かいろいろ話を聞いてくれたりとか、学校のこととか、そういうのを聞いてくれて、結構、親身になってくれたのは本当にありがたかったかなと思って。母親代わりみたいな感じの存在に近かった存在なので、何かそれが本当にありがたくて（肯定的⑧さん）」といった声が聞かれた。

このように、肯定的群の子ども達は、経済的、生活的、心理的、といったさまざまな側面のサポートを第三者から受けていた。

一方、否定的群にも、祖父母や仲のいい友達、友達の家族など気にかけてくれる第三者の存在がいたものの、その第三者に家族関係の悩みを話したという経験やそれによって救われたという経験は語られなかった。その反面よく語られたのは、離別のことをいいたくない・知られたくないという気持ちである。

「その時、あんま離婚してる親が少なかったんで、ちょっと変、うちの家庭はちょっと変なんかなみたいな、そういう感覚はあります。でも1人、片親だけなんで、お母さんしかいないんで、すごい友達も、何でお父さんおらへんのか、いろいろ、やっぱ、悪気もなく聞いてくるんですけど。うん、いない、いいひんよ、で終わらしてて、深く聞いてほしくないみたいな感情はあります。ありましたね（否定的②さん）」といった語りが聞かれた。

どちらともいえない群でも、離別のことをいいたくない・知られたくないという気持ちを強く持っている子どもが一定数含まれていた。「クラスメイト、小学校の子たちはそんな、何か昔って、離婚することは悪みたいな、今みたいに、いい方はあれですけども、カジュアルに離婚するみたいな感覚ではなくて、何か恥みたいなのがあったので、他の子と違うのだというのを強烈に思ったのは、小学校入学の時に思ったんですよね。＜なるほど。それは、何かそういうことはいわないようにって、親御さんにいわれたから、恥みたいなのうに思ってしまったのか、それとも周りから何かいわれたのか、何かそういうエピソードはあったのか＞親も、父親がいないということをあまりいうなということをしていましたし、まわりも何か片親だということで偏見の目がすごくて、そういうのもあって隠していたというのもありますね（どちらともいえない③さん）」

このように、否定的群およびどちらともいえない群では、離別に対する社会の偏見を敏感に察知していた声や、周囲から「親が離婚しているからかわいそう」と思われないようにするため、離別のことを隠し通そうとしている声が多く聞かれた。また、祖父母や仲のいい友達、学校や養護施設の先生などの頼りになる第三者の存在に支えられているという語りも得られたが、離別に伴う悩みはあくまでも人に話さず、自分1人で抱えているという人もいた。

このように、肯定的群は他の2群より、第三者の存在が多く、加えて頼もしい存在として語られることが多かった。

#### (9) 1人の人間としての両親や両親の関係性を捉える

1人の人間としての両親や両親の関係性を捉えるとは、離別後の生活や面会交流、同居親や周囲から話を聞くこと、そして自身が成長したことなどを通して、1人の人間としての両親を理解し、両親の関係性を捉えられるようになることを示している。肯定的群では、この語りも多く聞かれた。

「当時はやっぱり、別れないでほしいっていう思いはあったんですけど、今となっては、別れてよかったんじゃないかなって思っていますね。何もしない父と、それに腹が立つんですけど、いけない母みたいな。で、考え方も、今思えば、2人に相違があったんだろうなっていうのがわかるので。例えば旅行が結構好きで一緒によく行ったんですけど、父はキャンプとか車中泊とかB級グルメとか、でも母は、『本当はあれは嫌だった』って言って、泊まるんだったらホテルに泊まりたかったし、旅館がよかったし、美味しいその場のご飯が食べたかったって。あ、全然考えが違ったんだなって（肯定的①さん）」「私たちがもっと大人になって、離婚しないでとか何かいったら、関係は変わってたのかなと今は思います。…（中略）…私は父の味方とか、お兄ちゃんは母の味方みたいな感じの雰囲気も多分出てたんです。私はあまり何か母に対しても父寄りだったから、そういう態度も母は多分嫌だったんだと思います。そこを多分、私とかが『お母さん』ともっと言って、母を立ててあげる。…（中略）…母もストレスがたまってたんだろうなとは思いますが。話を聞いてあげたりとか、そうだよねってお母さんの味方になってあげれば、多分、子どもたちがもっと母の味方になってあげてたらよかったんだろうなと思いますね（肯定的④さん）」といったように、1人の人間として俯瞰的に両親を捉え、当時の両親の関係性を捉えているような語りが聞かれた。

このような俯瞰的に両親を捉える語りは、どちらともいえない群でも聞かれた。子どもたちは、親をいい面も悪い面もある1人の人間として捉えようとし、特に親のネガティブな側面を冷静にみつめなおすことで、親に振り回されすぎずにいられるようになっていた。

一方で、否定的群では、俯瞰的に両親を捉えているような語りは聞かれなかった。その代わり、未だに離別理由がよくわからないという声が聞かれた。「経緯はあまりよくわかってないですけど、母親が、金遣いが荒かったから、それで出ちゃったのかなあというふうに私は思っているんですけど、具体的な理由は、ちょっと聞いてはいない。…（中略）…やっぱり離婚にあたる説明というか経緯は、ただ出ていくとかそんな感じだったんで、どうして出ていくかというふうな理由をちゃんと説明してほしいかった。じゃないと、何が原因だったかというのが、結局、わからないというのは、個人個人で変なふうに考えて、そこからまた変な方向に行っちゃうような感じもしちゃってた（否定的⑩さん）」このように、離別理由がわからないことで、子ども自身が離別にまつわる出来事を整理して捉えなおすことができない場合、子ども自身の人生や家族関係に悪影響を及ぼす可能性があると考えられた。

#### (10) 離別への納得感と現在の両親の離別への思い

1人の人間としての両親や両親の関係性を捉えることができると、両親がなぜ離別したのかを納得することができる。

肯定的群の子どもからは、「大人になって、母や、介護をしていくなかで父と接するようになって、それはそうやろうって納得というか、してきましたね（肯定的②さん）」「さっきの俯瞰でみての話とつながるんですけど、性格形成の時に、これ以上壊れていく家族をみせられてもね、きついただけなんできていうのがあるので、ぱっと別れて、こっちで、逆に前向



きに頑張っていく感じになるじゃないですか、これからまた土台を固めていくみたいな。そのほうが前向きやから、子どもにとってはいいかなと思うんですよ。だから、離婚してよかったと思います（肯定的⑯さん）」といった両親の離別に納得している声が多く聞かれた。

そして、「別れてからのほうが、今お互い伸び伸びと楽しくやっているので、今も仲が悪いわけではなく、そんな頻りに連絡をとりあったりっていうことはないですけど。なので、今思えば、あれでよかったんじゃないかなって思います（肯定的①さん）」といった語りからもわかるように、今、家族が平和であることから考えても、離別してよかったと両親の離別に肯定的な思いを抱くに至っている。

どちらともいえない群でも、離別は仕方なかったと離別に納得する声も聞かれている。「仕方がなかったのかなっていう気持ちは、肯定に入るんですかね、と思っています。ただ、子ども心にいうならば、どうにかできなかったのかなっていうのも、その当時の⑳の気持ちで考えると、再構築なり何なりできなかったのかなと。ただ、では20歳になっていろいろ知った状態だったから、いや、それは無理だよと。再構築っていうか、そこまで裏切られ続けて、ずっとだまされ続けてっていうのがあれば、それは仕方がなかったっていう気持ちは。だから、否定的から、どちらでもないと肯定的の間ぐらいの気持ちに、成長過程で…（どちらともいえない㉑さん）」

一方で、どちらともいえない群と肯定的群の違いは、肯定的群が今現在家族が落ち着いていることに対して、どちらともいえない群は自分や家族が離別によってネガティブな影響を受けていると感じることが今も多々あることであると考えられる。「僕、結構、お姉ちゃん子なんで、お姉ちゃんにされたことに対してのほうの怒りっていうか、もやもやのほうが強かったんで。あんたが出ていったせいで、姉ちゃんがすごいことになったんだよって。＜それはでも結構ちゃんといったんですよね、お母さんに＞姉はしゃべりたがらないので、あんたのせいでこうこうこうで、こんなことになってんだよっていいました（どちらともいえない㉒さん）」

また、どちらともいえない群には、離別に納得しきれない思いが残り、離別しなくてもよかったのではないかと思うことから、両親の離別に肯定的とも否定的ともいえない思いを抱えている子どももいた。これについては「(5) 離別後の生活」の㉓さんの例で述べたとおりである。

そして、否定的群では、未だに離別理由がよくわからない子どもと成長して離別理由を知った子どもがいたが、離別理由を知った後でも「もっと他にやりようがあったのではないか」という気持ちが残り、両親の離別に未だに納得がいかない気持ちを抱える子どもが多かった。この納得がいかない気持ちが離別に対して否定的な思いを抱くにつながっていた。父が仕事人間で家庭に協力しない状態が続いたことが理由となって離別したと大人になってか

ら聞いた⑳さんは、次のように語っている。「もっとこう、離婚をせずになんとかできなかつたんだらうかと。(離婚より) もっと前の話になるのでしょうかけれども、そういうところから、もっと家庭の状況とか、そういうのも考えて、なんとかできなかつたんじゃないのかと、そういうふうに思いますね。…(中略)…結果的に離婚という形になってしまっているのです、その前に、もっとこう何か、分岐点ではないのですけれども、いろいろあったと思うのですけれども、細かいことが。そういうところで、もっと家族が続けられるように、継続するようなことって何もできなかつたのかなあっていう(否定的㉑さん)」

(11) 父母の別居・離婚に対して子どもに思いが異なるに至る背景にあると考えられるもの

以上、各群(各プロセス)の比較をしながら、共通点と相違点について記述した。

両親の離別という同じ体験を経験しても、「父母の離婚や別居についての子らの捉え方や考え方はさまざまである(2021 実態調査報告書)」という点は本調査においても同様であり、さまざまなエピソードを収集することができた。

そのうえで、本調査では、「未成年期に父母の別居・離婚を経験した子はどのような体験をとおして、父母の離別にどのような思いを抱くようになるのか」というテーマに基づき、調査対象者を3群に分けて分析、比較検討を行った。

その結果、父母の別居・離婚に対して子どもに思いが異なるに至る背景には、離別前の生活、離別に関する説明、子どもの意思確認・意思表示、離別後の生活の安定、面会交流、養育費、第三者の存在、1人の人間としての両親や両親の関係性を捉えられるか、両親の離別に納得感を得られているか、といった点が影響を与えている可能性が高いということが考えられた。表9に前述した父母の別居・離婚に対して子どもに思いが異なるに至る背景にあると考えられるものと子どもたちの語りから考えられる考察事項を簡単にまとめる。

〔表9〕 父母の別居・離婚に対して子どもに思いが異なるに至る背景にあると考えられるもの

	語りから考えられる考察事項
離別前の生活	・ 離別前の生活が子どもからすると問題のない生活である場合、離別に困惑することが多いため、より丁寧な説明をすることが求められている。
離別に関する説明	・ 離別すること、なぜ離別するのか（特に「子どものせいで離別するのではない」とはっきり伝える）、今後の生活の見通し（どこで暮らすか、学校はどうなるのか、別居親と会えるのかなど）を伝えることは子どもの納得につながりやすい。
子どもの意思確認・意思表示	・ 離別に関する説明をしたうえで、子どもが離別についてどう思うか、父母どちらと暮らしたいか、心配なことを聞くなど、子どもの意思確認をすることは子どもの納得につながりやすい。 ・ かなえられる希望はかなえる、難しい希望については理由をつけて説明することは、真摯に耳を傾けてくれた経験として子どもに残る可能性が考えられる。 ・ 子どもが意見をいやすい雰囲気をつくることが求められている。 ・ 離別の説明と子どもの意思確認は一度きりでなく、子どもの発達段階や理解度・納得度にあわせて何度もくり返し説明し、その時々で子どもの疑問に答えることが求められている。
離別後の生活	・ DVからの解放、経済的安定、両親の不和をみなくなる、離別後親が元気になるなど、離別後のほうが落ち着いた生活ができると離別が肯定的な思いにつながりやすい。 ・ 離別後の生活状況の悪化、経済状況の悪化による希望進路の変更などは離別への否定的な思いにつながりやすい。
面会交流	・ 子どもにとって無理なく継続する面会交流が求められている。 ・ 上記のような面会交流を実施していても、両親間の葛藤が高くその板挟みになっている場合は子どもに負担がかかる可能性が考えられる。
養育費	・ 養育費をきちんともらっていることは子どもにポジティブな影響を与えやすい。 ・ 養育費をもらえていない、もしくはもらえていたとしても少なすぎることは子どもにネガティブな影響を与えやすい。
第三者の存在	・ 両親以外の第三者（祖父母、親戚、先生、友人、コミュニティの人々）からの経済的、生活的、心理的支援は子どもの支えになる。 ・ 一方で、離別のことをいいたくない・知られたくないと思う子どももいる。匿名で相談できるような仕組みも求められている。
1人の人間としての両親や両親の関係性を捉えられるか	・ 離別後の同居親との生活や別居親との面会交流、離別理由を聞くこと、自身の成長などから1人の人間としての両親を理解し、両親の関係性を捉えることは、離別への納得感につながる。 ・ 離別理由がわからず子ども自身が離別にまつわる出来事を整理して捉えなおすことができない場合、子ども自身の人生や家族関係に悪影響を及ぼす可能性が考えられる。
離別への納得感	・ 両親の離別への納得感と今現在の家族が平和に暮らせていることは離別に対し肯定的な思いを抱くことにつながりやすい。 ・ 両親の離別に納得がいけない気持ちを抱える子どもは離別に対して否定的な思いを抱くことにつながりやすい。

## 2 プロセスには出てきていない重要事項（その他語りから考察できる重要事項）

ここでは、1の未成年期に両親の離別を経験した子とその離別にどのような思いを抱えていくかのプロセスには入らなかったが、本調査を実施するにあたり語りに出てきた「(親の)再婚」と「介護」について紹介・考察する。この2つのテーマは、親の離別を経験する子どもにとって重要なテーマだと考えられたためである。また、インタビューのなかでは、あってよかった支援、実際なかったが必要だと思う支援についてもうかがった。その内容を以下に記述する。

### (1) 再婚（再婚時に必要な配慮など）

再婚は、離別と同様、子どもの生活に大きな変化を与えるものである。本研究においても、再婚に関する語りは多く聞かれた。その内容を、同居親の再婚と別居親の再婚に分けて記述する。

#### 【同居親の再婚】

同居親の再婚は、再婚相手（およびその家族）と一緒に住むという点で、子どもにとって非常に大きな変化であり、新しい環境への再適応が求められるものである。その新しい環境の内容次第では子どもに大きな負担がかかる場合がある。

まず、再婚を受け入れ喜んでいる人の例として、肯定的③さんのエピソードを紹介する。肯定的③さんの両親は別居親の借金、ギャンブル、DVといった理由で離別をしている。同居親の再婚相手は、両親が離別する前から同居親や肯定的③さん、きょうだいを助けてくれていた人であった。公園や健康ランドなどに連れていってもらったり、同居親の相談にのってくれたりしていたというエピソードが話されている。「お母さんのほうのおじいちゃんが倒れて救急車で運ばれたって、おばあちゃんのほうから連絡があったんで、そのときにお父さんは友だちが家に来てたんで、『友だちが来てるから行かれへん』いうんですけど、でも、さっき話してた人（再婚相手）は、そのとき自転車しかなかったんですけど、自転車でおじいちゃんのところに様子をみにいってくれたりとかして、お母さんにとって……大きかったんやろなと思います。…（中略）…その支えてくれた人が、今お父さんになっているので。お母さんが再婚して10年。初めからこの人と結婚してほしかったって。お母さんも、これで幸せになれると思ったんで。私たちも、ずっと小さい頃からよう遊んでくれた人やっただんで、すごいうれしかったです。＜複雑な思いとかは特になく＞そうですね。一切それはなかったです（肯定的③さん）」このように、離別前から家族を支えてくれていた人との再婚は、子どもにとって受け入れやすいように考えられた。

次に、当初再婚に困惑したが、現在は受け入れている人の例として、肯定的②さんのエピソードを紹介する。肯定的②さんの両親は別居親が仕事をしないこと、借金をつくることといった理由で離別をしている。同居親の再婚相手は、きょうだいの同級生の父親だったということで、元々知っている人であった。説明なくなんとなく一緒に過ごす時間が増えていく

ことや母親は母親だけれども女の人でもあるということに複雑な感情を持ったというエピソードが話されている。一方で、再婚後15年ほどたち、その時間のなかで、肯定的②さんが別居親の介護で大変だった時は同居親と一緒に再婚相手の人も手助けしてくれたり、きょうだいの子どもの面倒をよくみてくれたりしたといった体験を通して、今は再婚を受け入れているとの語りが聞かれた。このように、離別前に特に関係性が構築できていない場合の再婚は子どもに負荷がかかりやすいが、その後信頼関係を構築できるような出来事を通して、子どもは再婚を受け入れていく可能性が考えられた。

最後に、再婚後の新しい環境に大きな負担があった人の例として、肯定的⑫さんと肯定的⑬さんのエピソードを紹介する。まず、肯定的⑫さんは、実父との離別は1-2歳の幼少期であり、小学4年時に同居親が再婚、そして高校1年時に同居親と再婚相手の離別を経験している。実父との離別は記憶にないとのことで、本研究では同居親と再婚相手との離別に対してインタビューを実施している。再婚時は再婚相手が遊んでくれ、父親という存在に憧れもあったことから再婚を受け入れていた。しかし、同居親と再婚相手との間に子どもが産まれてからは、同居親と再婚相手の肯定的⑫さんへの関心は薄れ、肯定的⑫さんは孤立感を感じるようになった。「頑張って（高校受験で）合格したけれども、それを報告しにいても『そう』ぐらいの感じだったのは、今でも覚えています。もう本当に興味がないんだなというのを実感したのを、すごく覚えていて。やっぱり子どもですっていても、興味を持ってもらいたかったかなあというぐらいですかね。そういうのが積み重なって、こっちの興味がなくなっただけというのがあるんですけど（肯定的⑫さん）」その後、同居親と再婚相手は離別したが、年月がたった今、再婚する家庭へのアドバイスとして、連れ子に対して、たとえ新しい子どもが産まれたとしても、当初の（優しい）態度を変えるのは絶対によくない、子どもが裏切られたような気持ちなる、と語っている。また、大なり小なり配慮が必要になるとも語っていた。続いて、肯定的⑬さんは小学1-2年時に別居親の不倫がきっかけで両親の離別を経験し、小学高学年時に同居親の再婚を経験している。再婚後の生活は、説明のないままの引越し、転校に加えて、再婚相手にも連れ子があり、再婚相手は連れ子ばかりかわいがり、家事全般を肯定的⑬さんと⑬さんのきょうだいに押しつけるなど、「最悪でしたね（肯定的⑬さん）」と語っている。さらに新しい子どもが産まれた際は育児も肯定的⑬さんが担うようになった。また、再婚をきっかけに別居親との面会交流はなくなってしまった。

これらのエピソードからは同居親の再婚は子どもに非常に大きな影響を与えることが読みとれる。再婚時には、再婚自体の説明、再婚後生活はどのようなようになっていくかの説明、別居親との面会交流はどうなるのかの説明をしたうえで、子どもが新しい環境に慣れるようにサポートしていくことが必要だと考えられる。また、再婚後に新しい子どもができたとしても、変わらずに子どもに新しい子ども同様に愛情を注ぐことが何より重要になっていくだろう。

#### 【別居親の再婚】

別居親の再婚は、同居親の再婚よりは子どもの生活に直接の影響を与えないものの、子どもにとって精神的に大きな出来事である。面会交流が途切れるきっかけにもなりやすいため、配慮が必要である。

別居親の再婚をきっかけに面会交流が途切れた人の例として、肯定的⑩さんのエピソードを紹介する。肯定的⑩さんの両親は別居親のギャンブル依存や繰り返される転職が理由で離別をしている。離別後も月 1 回程のペースで家族でご飯を食べるなどしていたが、別居親の再婚と養育費の不払いがきっかけで面会交流が途切れた。また、再婚には至らなかったが、別居親が再婚するかもしれないという話を聞き、関係がギクシャクし始め面会交流が途切れた例（肯定的⑨さん）もあった。

別居親の再婚は子どもにとって精神的に大きな出来事である。特に面会交流が継続している場合は、再婚後面会交流はどうなるのか、聞きたいけど聞きづらいという子どももいるだろう。再婚時、別居親は再婚自体の説明、面会交流はどうなるのかの説明をきちんと行い、子どもと自分の関係は何も変わらないことを伝えていく必要があるのではないだろうか。

## (2) 父母の介護

父母の介護も子どもにとって重大な問題である。父母が離別していることで、それぞれの介護をもう一方の親に担ってもらうことはできず、子どもや親戚が介護を担う必要が出てくる。「いずれ自分が介護をするんだろうな」と予測している場合もあるが、突然介護を担わなくてはならなくなる場合もある。特に離別後別居親と交流がなかった／交流が中断していたのに、突然別居親の介護を担う必要が出てきた場合、子どもにとって介護は非常に負担の大きい出来事となる。

突然別居親の介護が必要になった人の例として、②さん（肯定的）と⑰さん（否定的）のエピソードを紹介する。②さんは、別居親が入院したという連絡を受け、お見舞いに行ったことから別居親の介護を担うこととなった。きょうだいと②さんだけが別居親のことを知っている状態で、比較的近距离にいて融通がつけられた②さんが主に介護を担い、その相談はきょうだいとの 2 人だけで行っていたという。いろいろな制度を使いながらの介護とはいえ、特に介護の知識や経験があったわけでもなく、自分もフルタイムの仕事をしているなかで度々各種手続きにいたり、別居親の様子をみにいたりすることには大きな労力が必要だった。「誰か、次やってくれるっていうんやったらお願いしますっていうけど、誰も物理的に無理な状況やって、（自分が）しなしゃあないなっていう」（②さん）気持ちだけで頑張っていたという。しかし介護度が徐々に上がっていくなかで、きょうだいと②さんだけではどうしようもなくなり、同居親に相談することにした。同居親は“離別していなかったら自分が担うべきだったことを子どもたちに背負わせてしまった”と、さまざまな援助をしてくれるようになった。別居親の介護を通じて、別居親の人を“どうしようもないけれども憎めない人”“周りに恵まれている人”だと感じ、「あまり交流がない別居親のままという思い出

のままじゃなくて、介護している間、しんどかったけど接点持つことができよかったです」思うに至ったという。そう思えるようになった背景には、途中で事情を知った同居親が②さんたちの苦労を慮ってくれ、介護に協力してくれたことも大きく影響しているようであった。

⑱さん（否定的）は、別居親からの養育費を受け取る代わりに⑱さんが介護を担うようにいわれ、突然別居親の介護を担うことになった。そして、介護を担わざるを得なくなったことにより、⑱さんの進路選択も大きな影響を受けた。同居親もその状況は知っていたが、⑱さんをかばってくれたり協力してくれたりすることはなかったという。きょうだいもいたが、きょうだい間で知っている事情がそれぞれ異なるために相談しづらく「なるべく自分1人で何とかできるように、収まるように」頑張っていた。介護だけでなく、他の家族間で起こった出来事についても父母からきちんとした説明はまったくなく、大変な状況を⑱さんが1人で抱えることも多かった。⑱さんは「きつかったといえばきつかったけど、結局誰かが火中の栗を拾わないといけないからな。で、結局分散したところでみんな潰れちゃうんだったら、最後、私1人だけ潰ればいいのかと、そう思って行動してました」と語っている。⑱さんの場合、進路の大切な時期に突然別居親の介護を担わざるを得なくなったこと、その経緯もとても納得できるものではなかったこと、介護を通して別居親への印象や関係性は変わらなかったことにより、介護への負担感はさらに大きく感じられているようであった。そして、介護の件も含めて、離別によるネガティブな影響が続いていると感じていた。

⑳さん、㉑さんに共通することとして、突然介護を担わざるを得なくなったことにより、生活が激変し、自分の負担が増し、他に頼れる人もいない（⑳さんの場合は途中から同居親が協力してくれるようになった）ことがあげられるだろう。

一方で、交流がない別居親の介護を自分たちだけで引き受けざるを得ない状況をつくらないように、あえて別居親との交流を持たないようにしているという声もあった。例えば㉒（肯定的）さんは、別居親が倒れたときに連絡がきて、一時期介護を担うことになりとても大変だったという経験から、現在は別居親やその親戚と連絡をとらないようにしているという。㉒さんの場合は、他に別居親の介護を担える別居親側の親戚がいて、現実的にもそちらに介護を任せたいほうがスムーズであるという事情もあるようであった。他にも㉓（肯定的）さんは、介護だけでなく金銭的な面も含めて今後思わぬ問題に巻き込まれないように、別居親との連絡をとらないようにしていることを語っていた。このように、現実的に起こり得る可能性を見越して、別居親との交流を考えている人もいた。

また、現時点では父母の介護をするには至っていないけれども、今後介護が必要になるだろう状況に対して不安を感じている人も多い。例えば㉔さん（肯定的）は「父の介護、母の介護となったときに別々だとどうなっていくんだろう。お金の面とかもあるし、最終的にきょう

だいが多いので、誰かが最終的に一緒に住んでいくってなるんだらうな、世話していくんだらうなというなののが何となく流れているんですけど…（中略）…2人（父母）は別れて離れて過ごすことで、結構そういうコツや労力の部分が心配になってくるなどは思います」と語っている。④さんのようにきょうだい間で介護の分担ができそうだと感じられていたり、他のきょうだいがメインで介護を担ってくれると思えていたりする場合もあるが、他のきょうだいの事情から自分がメインで介護を担わなくてはならないと感じていたり、1人っ子であったりする場合もある。後者の場合、同時期に父母の介護が必要になったときにどうしたらよいかの方がより現実的な不安として感じられていた。例えば、㊸さん（どちらともいえない）は現在の一番の心配は父母の老後だと話す。「きょうだいでも話しても、難しい問題やねって。同居親は自分が今、一緒に住んでるんでみれますけど。例えば、別居親が倒れたってなって、誰が面倒をみんねんっていう話をたまにしたら。僕がまだ近いところに住んでるんで、僕かなとかって話をしながら、でも、そんななあと思いつつながら、こっちも生活あるしなと思いつつながら」（㊸さん）と、きょうだい間でも時折そういう話題は出しつつも、きょうだいの反応から自分が主に介護を担わなければいけない可能性を感じていることを語っていた。そして別居親にもその懸念を直接伝え、別居親から老人ホームへの入居費用など、介護に必要な資金は用意している旨を聞いたので一応安心したことを語っていた。

また、介護とともに相続関係の心配をしている人もいた。このように、父母の離別は後になってから思わぬ形で子どもに影響を及ぼすことがある。離別後の父母の介護や相続といった問題は、今後検討していくべき大きな課題であろう。

### （3）あつてよかった対応・支援

インタビューからあがってきた、あつてよかった対応・支援は、同居親からしてもらえたこと、別居親からしてもらえたこと、第三者（祖父母や親族）からしてもらえたこと、第三者（周囲のコミュニティ）からしてもらえたことの4種類に大別された。

#### 【両親（同居親）からしてもらえてよかったこと】

お金に不自由をさせないでくれたことや自分のものを我慢してでも子どもに食べ物や物（プレゼント含む）を買ってくれたこと、旅行に連れていってくれたこと、行きたい進路を応援してくれたことといった経済支援から、家事をしてくれたことといった生活支援までさまざまな声が聞かれた。また、自由にやらせてくれたこと、不登校になっても見守ってくれたことなど心理的支援に対する感謝の声も聞かれた。別居親の介護をしなくてはならなくなった際に、その介護を手伝ってくれた同居親もあり、そのことに子どもが感謝している声も聞かれた。

#### 【両親（別居親）からしてもらえてよかったこと】

主に面会交流が継続した子どもから、こまめに会って日々の生活が回るように買い物などを一緒にしてくれたこと、学校行事に来てくれたこと、別居先を家の近くにしてくれて行



き来しやすいようにしてくれたこと、アウトドアや普段行けないようなところに連れていってくれたこと、といった声が聞かれた。また、養育費をきちんと支払ってもらっていた子どもからはそのことへの感謝の声も聞かれた。

一方で、親からしてもらえたことでよかったことはない、思いあたらないと答える人もおり、そういった人たちからは、離別の経緯や反省点をきちんと説明してほしい、意見をいえる場がほしい、離別をするタイミングをもっと考えてほしい、養育費を払ってほしい、離別は子どもに後々まで影響を与えることだということをきちんと考えてほしいなどの声が聞かれた。

#### 【第三者（祖父母や親族）からしてもらえてよかったこと】

祖父母や親族からしてもらえてよかったこととしては、経済的な支援や家事などの生活支援、外食や遊びに連れていってくれたこと、かわいがってくれたこと、気にかけて何かにつけ親身になってくれたこと、不登校で難しい時期に逃げ場所になってくれたことがあげられた。

#### 【第三者（周囲のコミュニティ）からしてもらえてよかったこと】

周囲のコミュニティからしてもらえてよかったこととしては、ご近所さんが一緒にキャンプやBBQ をしてくれたこと、学校の先生が朝食を食べさせてくれたり、進路相談にのってくれたこと、現在同居親の再婚相手になっている人が遊んでくれたり、相談にのってくれたりしたこと、家政婦さんや里親さん、児童養護施設の職員さんの温かなかわり（家事支援、心理支援）、心理士が話を聞いてくれたこと、などがあげられた。また、友人が話を聞いてくれたり、腫れ物扱いせず一緒に遊んだり普通に接してくれたことをよかったこととしてあげている声も多かった。恋人の存在が支えになったと話した子どももいた。

#### (4) 必要な支援

必要な支援としては、父母に対して行ってほしい支援と、子ども（本人）に対して行ってほしい支援の2種類に大別された。

#### 【父母に対する支援】

父母に対する支援としては、(a) 居住や面会交流などを適切に取り決めるための支援、(b) 離別について子どもが納得できるようにするための支援、(c) 家族内の関係調整のための支援、(d) 父母間の葛藤低減のための支援、(e) 親が家族問題や心身の健康について相談できる場所、(f) 養育費の支払いが確実に実施されるための支援、(g) 生活基盤を安定させるための支援、があげられる。

(a) 居住や面会交流などを適切に取り決めるための支援としては、父母のどちらと一緒に住みたいか、面会交流の頻度をどうするか、子どもの希望も聞きつつ、現実的な父母の養

育能力も見極めつつ、合理的に判断してくれるような支援が望まれている。居住について自分やきょうだいの希望が通らなかった場合、面会交流をしたいのに機会がなかった／望まない形の面会交流が続いた場合に、このような支援を切望する声が多い。子どもの意向を尊重しつつ (b) にもつながるが、それを子どもが納得できるような形で説明してほしい、という子どもの切実な願いが込められていると考えられる。

(b) 離別について子どもが納得できるようにするための支援としては、離別すること、離別理由、離別後の生活の見通しをきちんと説明する、子どもの理解度や発達段階に応じて繰り返しフォローする、などの対応を親がとれるように支援してほしい、親がそのような役割を担えない場合には第三者にそのような役割を担ってほしい、という声があった。具体的には、離別時の子どもの気持ちや必要な対応などを親に伝えていくような、心理教育や親ガイダンスにあたると思われる。子どもが必要としているときにきちんと説明をすることで、子どもが悩んだり自分を責めたりすることなく離別を納得して受け入れられるようになる、と語る人も多く、そのような説明がなかったゆえに苦悩してきた子どもたちが多いことをうかがわせる。

(c) 家族内の関係調整のための支援としては、離別後家族関係が不安定になってしまうなど、機能不全の状態に陥っている家族に対して、家族内に入ってきて、関係調整を担ってほしいという声があった。子どもが年少であるほど、自分から外の機関に援助を求めに行くことは難しい。また、勇気を出して児童相談所に相談してみたが、家族の状況をうまく表現できず、取りあってもらえなかったという経験をしていた人（否定的⑰さん）もいた。家庭内の状況は外からみえづらいことも多く、親や周りの大人に問題意識がないと支援につながることは難しい。しかし、子どもが外部にSOSを発信できる方法、子どものSOSを受け止めて、子どもに害が及ばないような配慮をしつつ必要に応じて支援につなげていくような仕組みが求められている。

(d) 父母間の葛藤低減のための支援としては、離別前から離別後まで続く父母の葛藤を少しでも低減させ、子どもがそれに巻き込まれずにすむようにしてほしいという声があった。特に否定的群や、どちらともいえない群では、離別後も父母間の関係が改善せず、その間で板挟みになる、父母の仲が悪い様子が強烈に印象に残る、という経験が多く語られていた。葛藤が続く場合でも、葛藤を子どもにみせない・巻き込まない配慮があれば、子どもへの否定的影響は和らぐ可能性もある。父母の高葛藤が子どもに及ぼす悪影響についての知識啓発や、父母が葛藤を低減できるような心理教育やカウンセリング、父母が直接やりとりしなくてもすむような支援（面会交流支援など）が必要である。

(e) 親が家族問題や心身の健康について相談できる場所については、離別後親が身体的・精神的不調に陥ってしまう、余裕がなくなるとどんどん疲れていく様子を目の当たりにしていた子から、「親自身が気軽に相談できる場所があったらよかった」という声が多く聞か

れた。離別にまつわる悩み・心配・困りごとを包括的に相談できる窓口や、離別後忙しい・余裕がない親が気軽に立ち寄り健康相談をできる場所、というのは少なく、あったとしてもアクセスしづらいと感じられている。現在はオンライン上のピアグループなども多く出てきているが、親がケアされることによって、結果的に一緒に住んでいる子どももケアされることになるという視点は忘れてはならないだろう。

(f) 養育費の支払いが確実に実施されるための支援をしてほしいという声が多く聞かれた。本調査からも、養育費をもらえていない、もしくはもらえていたとしても少なすぎる場合は、別居親にネガティブな印象や感情を持つことに影響を与えることが明らかになっているため、養育費の支払いが確実に実施されることは必要なことだと考えられる。

養育費は当初支払われていても段々支払われなくなってしまう、もしくは額が少なくなっていくなど状態になることもある。また、離別時、特に別居親の暴力などの問題がある場合は、離別さえしてくれればよいという気持ちにもなりやすく、養育費についてもそもそも話しあわれない場合もある。そして、養育費が滞った場合、面会交流をしている子どもに養育費を催促するようにさせる親もあり、そのことは子どもにネガティブな影響を与えやすい。

上記のことを考えると、養育費の支払いを確保するための支援が重要になってくると考えられる。

(g) 生活基盤を安定させるための支援について、(f)養育費の他にも、年金制度を見直してほしいという意見や、医療費を無料にするなどの支援も大事だが、生活を安定させるような支援や教育に関する支援をもっと考えてほしいとの意見が出た。奨学金制度は助かるが、返さねばならないため負担になりやすいこと、家族の医療費がかさんで実際にお金がないのに所得制限で切られてしまい奨学金をもらうことができなかつたことなどが語られた。

また、現在日本では母親が同居親になる割合が高いが、専業主婦のまま離別しシングルマザーになった場合、さらに年齢が高い場合、仕事をみつけるのが困難であるとの意見も聞かれた。子育てしながら安定的な収入が得られる仕事をみつけられる支援をしてほしいとの声が聞かれた。

#### 【子どもに対する支援】

子どもに対する支援としては、(a) 相談ができる第三者（機関）の設置、(b) 奨学金や学費免除の申請などを知る機会、があげられる。

(a) 相談ができる第三者（機関）の設置について多くの子どもから話が出た。小さい頃は家族の離別の相談をしていいのか、するとしてもどこにすればいいのかわかりにくい。また、子どもの生活の場からアクセスしやすい場所に第三者（機関）があると心強いという声があがった。本調査において信頼できる第三者として、祖父母や友人の他に学校の先生などがあげられたが、学校の先生には友人に知られたくないという思いから相談しにくかった

という声も聞かれた。離別ということが何なのかまだよくわからない子どもにとっては、アクセスしやすい場所であつ内密に相談できる、という点が重要になってくるのかもしれない。学校生活から少し離れた距離であつ子どもがアクセスしやすい場所として児童館や学童（民間学童も含む）などが考えられる。そういった場所にいる大人に対し、離別後の子どもをどう支援していけばよいかの研修などを行っていくことは、子どもが相談できる場所を増やすという意味で意義があるように考えられる。また、学校では虐待やいじめ相談 SOS といった紙はよく配布されるが、家庭の悩み相談というものはなかったため、そういった匿名の相談窓口があるといい、という声も聞かれた。今の状況が一体どのようになっていくのか、両親からの説明があまりなされず不安になる子どももいる。そういった子どもに対して匿名の電話相談・SNS 相談は力になっていくだろう。また、肯定的<sup>⑬</sup>さんは、こういった子どもの味方になってくれる機関や番号がある＝子どもも自分の意見をいっていいというメッセージになるのではないかと語っている。こういった相談機関を設置し、子どもにわかりやすく周知するということが求められている。

(b) 奨学金や学費免除の申請などを知る機会がほしかったという声も多く聞かれた。そういったことがあることを知らず、たまたま同じように両親が離別した友人に教えてもらったという子どももいた。奨学金の情報などは、本当に困窮している人は調べる余裕もないと思うため、情報が確実に届くような仕組みをつくってもらいたいという声も聞かれた。

#### (5) 本調査の意義と限界

最後に、本調査の意義と限界について述べる。本調査では、性別、年齢、最終学歴、同居親の性別、などに可能な限り多様性を持たせて調査協力を依頼した結果、借金や暴力、アルコールといった、日常生活の安心・安全の根本にかかわるような離別理由を持つ人のエピソードを多く収集することができた。さらに離別への現在の思いが「肯定的」「否定的」「どちらともいえない」プロセスごとに検討することで、各プロセスの特徴と父母の離別に対して子どもに思いが異なるに至る背景を明らかにできたことが本調査の意義である。

本調査の限界としては、回顧的調査であること、調査対象者の偏りがあることが挙げられる。本調査は 6 歳～15 歳未満の間に父母の離婚を経験しており、かつ調査時に 20 歳以上 40 歳未満の人を対象としている（なお、「II 調査実施方法」でも述べたとおり、事前のウェブアンケートでは上記対象にあてはまる人に調査協力を依頼したが、実際には父母の離別を 15 歳以上で経験した人も何名か含まれている）。本調査対象者には 10 年～30 年以上前に離別を経験している人も多く含まれている。回顧的調査であるため、出来事の時系列を正確に覚えていない、強烈に印象に残っていることと、覚えていないことが混在していることも多くみられた。

上述のとおり、時代背景や社会制度の違いにより、面会交流や養育費について積極的な取り決めをしないで離別に至っている人が一定数いるのが特徴である。養育費については、「わからない」「多分もらっていない」と答える人も多かった。また、面会交流を継続して

行っていた人であっても、その頻度は年数回程度であることが多かった。定期的に頻回に面会交流を行っていた人も数名いたが、肯定群において定期的に頻回に面会交流を行っていた人の離別後の両親の関係性は良好であったことがほとんどであり、両親の葛藤が高いうえで定期的に頻回に面会交流を行い、両親の離別に肯定的な思いを抱いている調査対象者は今回みられなかった。したがって、そういった方のプロセスは本調査では明らかにされていない。両親の葛藤が高いうえで定期的に頻回に面会交流を行う子どもも一定数存在すると考えられるため、そういった子どもの心理プロセスに焦点をあてて検討していくことも今後必要になっていくだろう。